

500

15



始



Handwritten notes on the right page, including the word "Zurück" and other illegible characters.

500-15

世界文藝全集第九編

基督と反基督(2)

神々の復活

後編

メレジュコーフスキイ著  
米川正夫譯

大正  
11. 11. 18  
内交

---

第十編	靜かな波……………	三
第十一編	翼は出来る……………	八
第十二編	皇帝か然らずんば無か……………	一四〇
第十三編	眞紅の獸……………	二四三
第十四編	モナ・リザ・ジオコンダ……………	三〇七
第十五編	宗教裁判……………	三八〇
第十六編	レオナルド、ミケランゼロ、ラファエロ……………	四四六
第十七編	死——翼ある先驅者……………	五〇三

---

神々の復活

(レオナルドダヴィンチ)

メレジュコフスキイ作  
米川正夫譯

### 第十編 屏かな波



モロイ城の東北に當る噴煙の中に、鐵で張つた小さな屏があつた。それは檜の木の箱を一杯並べた地下室。モロイ公の國庫へ通するものであつた。此の屏の上にはレオナルドの筆に成る、嚴めしい天使の様なマイキユリイ神を描いた、未完成の壁畫があつた。千四百九十九年九月一日の夜、宮中會計官のオムプロヂオ・ダフェラリと、王家歳入監督官ペルゴンチオ・ポットが部下の役人達と共に、此の地下室から金や眞珠や、其の他の貴重品を取り出した。眞珠などはまるで穀物か何ぞの様に、杓で掬ひ出すのであつた。役人達が皮袋に詰めて封印をすると、従僕共はそれを庭へ擔ぎ出して、騾馬の背へ積み上げた。二百四十の袋が一杯になつて、荷をつけた騾馬の数は三十に達したけれど、蠟の流れ盡した燃えさしの蠟燭は、依然として箱の後ろに堆く積まれた金貨の山を照して居た。

モロイは國庫の入口に、帳簿を引き散らした書物卓を据ゑて、その前に腰掛けてゐた。そし

て會計官達の仕事には少しも注意しないで、無意味な目付で蠟燭の焰を見詰めてゐるのであつた。

味方の總指揮官ガレアツ・サンセズリノの敗走と、佛蘭西軍のミラン近接の報を受取つた日から、彼は奇妙な痲痺状態に陥つたのである。

貴重品が一切地下室から運び出された時、會計官長は王に向つて、金銀器具を持つて行くか、それとも置いて行く積りかと訊ねた。モローは彼が何を言つてるのか合點しようと思つて、一生懸命思考力を緊張させるものの様に、ちつと眉を擧め乍ら彼を見詰めて居たが、直ぐに顔を外向けて片手を振ると、其の儘ちつと瞬きもせず、蠟燭の焰を見詰め始めた。アムプロジオは今一度質問を繰返したが、王はもうまるで耳に入らない様子であつた。會計官はその儘答を得る事が出来ないで立去つた。モローは一人切りになつた。

老侍従のマリオ・プステルロが、新任要塞長官ベルナルチノ・ダコルテの到着を知らせた。

モローは顔を一撫でして立上り乍ら、

「あゝ、あゝ、無論通すのだ」と言つた。

彼は名門の子孫を信用しないで、無名の人物を登用して、貴賤高下を顛倒するのが好きであつた。彼の傍に仕へてゐる顯官の中には煙爐焚きや、園丁や、料理人や、驢馬追ひなどの子が

交つて居た。ベルナルチノは、後に庖厨の會計係となつた宮廷附侍僕の息子で、若い時には自分でも四季施を着たものである。モローは彼を取り立てて國家の要職に當らせたが、今度はロムバルヂヤ最後の要塞たる、ミラン城の防禦を委任して、最高の権力を與へたのである。

王は懇ろに新任の太守を迎へて席に着かせ、その前に城の圖面を幾枚も擴げて、要塞守備隊と町の住民との通信用に定められた、軍用信號を説明し始めた。至急援助を要する場合は、晝ならば園藝用の曲つたナイフ、夜ならば把火を城の一番高い哨樓から掲げる事とし、兵士の反亂は白い敷布をボナの哨樓に吊し、火藥の缺乏は椅子を繩で縛つて砲眼から下げ、酒の缺乏は婦人袴、パンの缺乏は黒い織物で造つた男のスボン、醫師の必要は土燒の小便壺で示す等の類であつた。

モローは自分でかうした信號を作り出したので、まるで今一切の救ひと希望がこれに懸つて居るかの様に、無邪氣な心持で喜んでゐるのであつた。

「いゝかねベルナルチノ」と彼は言葉を結んだ。「もうあらゆる場合に對する備へが出来てゐて、金も、火藥も、糧食も、銃砲も、何もかも十分あるし、三千の傭兵にも前金で給料を渡してあり、其の上に三年間は包圍に堪へ得る要塞が君の手に一任してある。併しわしは只三ヶ月間支へて呉れと頼むのだ。若しそれ迄にわしが救援に歸つて來なかつたら、その時は何うとも君の

勝手にするがいゝ——さあ、これでもう言ふ事は無かつたらうな。ぢや左様なら。何うか神様、私の息子をお守り下さいまし！」

王は別れに彼を抱きしめた。

太守が去つた後、モローは小姓に命じて行軍用の床を敷かせ、祈禱を済して寝に就いたが、中々寝入る事が出来なかつた。彼は再び蠟燭を點して、旅行用の袋の中から一束の紙を取り出し、ペリンチオエの競争者たる、アントニオ・カメリ・ダビストイヤと云ふ詩人の詩を探し出した。之は自分の恩人たるモロー公に背いて、佛蘭西側へ走つた男なのである。此の詩の中にはモローと佛蘭西との戦争が、古いハルの雞(無名)と翼あるスフォルツァの蛇との戦に譬へてあつた。

我は雞と蛇との戦ひを見る

二者は互に掴み合ひつつ、

一團となりて轉々す

既に雞は龍の目を突き破れり

蛇は絡み付かんとすれど力能はず

雞は爪もて其の口を締め上げぬ

蛇は痛みに堪へず身を跳く

やがて蛇は斃れて、ハルの世とならん  
嘗て己れを空より高しと信ぜし蛇を  
人間のみか野獸の類も、  
死屍を啄む鴉さへ、見返らんとせず。

彼は常に怯者なりしが、只我國の  
動亂に紛れて怯者も勇士の如く見えにき。  
おゝモローよ、汝が肉身の甥を殺して  
王位を奪ひ、祖國へ敵を呼び集めたる酬いに、  
神は汝に不幸を下し給ひぬ。そを醫するには  
死より外に醫師無かるべし。  
若し汝己れの幸を忘れざりせば、  
『我は幸福なりし』と云ふ人の  
苦痛の如何に大いなるかを、  
今こそ汝も思ひ知りたらん！



憂はしい、それと同時に何となく甘い屈辱感が、モローの胸中に在つた。彼は同じアントニオ・カメリ・ダビストイヤが遠からぬ以前に作つた、敬虔の念に充ちた頌歌を想ひ出した。

モローの榮えを見たる者は、メツサの首を見し如く

聖なる恐怖の爲めに化石すべし

平和と戦争の支配者よ

汝は片足もて天を支へ

片足もて地を支ふなり

おゝ我が王よ、汝は全世界を顛覆すべく

一本の指を擧ぐれば足れり

汝は神の後に始めて

宇宙の舵と運命の輪を司りぬ。

もう夜半を過ぎてゐた。王が依然として陰鬱な寶藏の哨樓を、彼方此方歩き廻つて居る中に、燃え盡きた蠟燭はゆらくと慄へながら消えさうになつた。彼は自分の苦しみや、運命の不公平や、人間の意思などと云ふ事を考へて居た。

「俺は彼等に對して何をしたらう？ 何の爲めに彼等は俺を憎み出したのだらう？ 皆俺の

事を人殺しだの悪人だのと云ふが、そんな事を言つたら弟を殺したロムルス(羅馬の)も、シーザアも、アレクサンドルも、すべて古の英雄豪傑は悉く人殺しの悪人になつて了ふ！ 俺はアウグストゥス、トラヤヌス、アントニウス以來嘗て人民が見た事もない様な、新しい黄金時代を授けてやらうと思つたのだ。もう少し待つて呉れたら、俺の主權の下に統一された伊太利國には、古いアポロの月桂樹やパラスの橄欖の木が咲き誇つて、永遠の平和の王國、ミューズ(神の)の神の王國が實現された筈なのだ。俺は血腥い功名の中に光榮を求めないで、黄金の平和の實——文明の中にそれを追求した最初の帝王なのだ。ブラマンテ、パチオリ、カラドツ、レオナルド、其他數へ盡されない位だ！ 後世空しい劍戟の響が静まつた時、彼等の名はスフォルツァの名と共に傳へられるであらう。若しあの北方の野蠻人共が襲つて來なかつたら、俺は未だくあれ位の事ではない、新しいペリクレス(雅典の)のやうに、俺の新しい雅典(雅典)を素晴らしい盛大なものにして見せたらうに、あゝ神様、一體これは何の罰でございます？」

彼は首を胸の上へ俛れ乍ら、アントニオの詩を繰返した。

「我は幸福なりし」と云ふ人の

苦痛の如何に大いなるかを

今こそ汝も思ひ知りたらん

蠟燭は最後の名残りにばつと燃え上つて、哨樓の圓天井や、寶藏の扉の上にあるマーキュリー神の壁畫を照らし出したと思ふと、その儘消えて了つた。王はびくりとなつた。蠟燭が燃え盡きて消えるのは悪い兆候であつた。リチャルデットを起さない様に、闇の中を手探りで寢床へ近寄り、着替をして横になつた。そして今度は直ぐに寢入つた。

彼は自分が妃ベアトリーチの前に跪いてゐる夢を見た。彼女はたつた今良人とルクレチヤの隣を知らず、口を極めて罵りながら彼の頬をびしく打つのであつた。彼は痛いけれども腹は立たなかつた。彼女が未だ生きて達者であるのが嬉しかつたのである。従順しく妻の手の下へ顔をさし出し乍ら、その小さな淺黒い手に唇を押し當てようと思つて、機もあらばそれを捕へようと焦慮つた。そして彼女に對する愛情と憐憫の爲めに泣くのであつた。ふと見ると、彼の前に立つて居るのはベアトリーチでなく、鐵の扉の上なるレオナルドの壁畫に描いてある、嚴めしい天使のやうなマーキュリー神であつた。神は王の髪を引つ掴んで叫んだ。「馬鹿！ 馬鹿！ 何をお前は當てにしてゐるのだ？ お前の奸計が助けになつて、神罰を免れる事が出来ると思つてゐるのか、人殺しめ！」

彼が目を醒したとき、朝の光が窓の上に白々と射してゐた。彼が獨逸へ伴つて行くべき騎士、貴族、軍人、獨逸の傭兵など、總勢三千人ばかりの騎馬の人が公國の大並木から、北の方アル

プスに通ずる街道へ掛けて居並びながら、王の出御を待つて居た。

モローは馬に跨つて、最後に今一度妻の墓前で祈りをする爲めに、デレ・グラチヤの僧院へ赴いた。

太陽の最初の光線と共に、淋しい一行は旅程に上つた。

## 二

秋の霖雨で道が壊れた爲めに、旅行は二週間以上も長引いた。

旅行も最後に近付いた九月十八日の夜遅くの事であつた。疲勞して病人の様になつたモローは、牧夫の避難所となつてゐる高い山の洞穴で、一夜を過すことに決めた。もつと落ち着いた便利な隠れ家を探し出すのも、さして困難でなかつたけれど、彼は自分の許へ遣はされたマクシミリアン帝の使者と會見する爲めに、わざとこんな酷い場所を選んだのである。

焚火は洞穴の天井から垂れ下つてゐる。鐘乳石を照らし出した。晩餐の用意として、雉子が行軍用の焼串で炙られて居た。王は外套を身に纏つて、足許に火鉢を置かせ乍ら、行軍用の革の椅子に腰掛けて居た。その傍には何時も晴れ／＼として靜かなルクレチヤが、家に居る時の様な主婦らしい顔付をして、齒痛を鎮める含嗽劑を持へてゐた。それは彼女自身の發明に係る

もので、酒、胡椒、丁字、その他の強烈な香料から出来てゐた。王は齒が痛むのであつた。

「それでは、オドアルド君」と彼は皇帝の使者にかう言つた。自分の不幸の悲壯さを、心密かに慰めとする様な氣持も交つて居たのである。「ロムベルヂヤの正當な君主と、何處で何んな風にして會つたかと云ふ事を、皇帝にお話し下すつてもいいですよ」

此頃彼は長い沈黙と失神状態が続いた後で、突然饞舌の發作に襲はれる事がよくあつた。

「狐に穴あり鳥に巢あり、されど人の子は枕する處なしだ！」

「カリオ」と彼は宮廷附の年代記者に向つて、「今度お前が記録を編纂する時には、此の牧夫の洞穴で過した一夜の事も書くがいゝ——これがトロイの勇士エネアスの伴侶たるアングルの流れを汲む、大スフォルツァ家の子孫に取つて最後の隠れ家なのだ！」

「殿下、あなたの御不幸は新しきタシタスの筆に値ひします」とオドアルドが言つた。

ルクレチヤは王に齒痛の含嗽劑を薦めた。彼はその顔をちらと見て、うつとりと眺め入つたのである。彼女は黒い髪を奇麗に耳の上に撫で付けて、額の真中に夜光石を一つ細い紐で留めた蒼白い而も生々とした顔を、薔薇色の焰に照されながら、母親らしい愛情に充ちた微笑を浮べて、額越しに王を見詰めて居た。その目はまるで罪のない子供の様に、嚴つくて物々しく、そして注意深さうであつた。

「おゝ可愛い奴！ わしに背いてわしを賣さないのは、此の女一人切りだらう！」と、王は心に考へた。それから含嗽を終へた後かう言つた。

「コリオ、それからお前かう書いて呉れ。火の中に金の見分けらるゝ如く、其の友情は偉大なる苦患の爐中に見分くるを得、とな」

小人の道化ヤナキがモローの傍へ近寄つた。

「叔父さん、叔父さん」モローの足許に坐り込んで、親しげに王の膝を叩き乍ら彼はかう言ひ出した。「何だつてお前は鼠が麥を睨んだ様に、さう悄氣込んでゐなさるのだ？ 止しなさい、本當に止しなさいよ！ 死ぬ事だけは別として、何んな辛い事にだつて樂はあるよ。まあ言つて見れば、死んだ王様よりか生きた驢馬の方がましな譯だからねえ。あゝ鞍がある！」突然彼は床の上に置いてある馬具の山を指さし乍ら、かう叫んだ。「叔父さん、見なさい、驢馬の鞍がある！」

「何をお前は嬉しがつてるのだ？」と王は訊いた。

「古い昔話なんだよ、モロー！ 併しお前に想ひ出させて上げてても差支へは無からう。お望みなら話さうか？」

「まあ話して見ろ」

一寸法師はいきなり飛び上つた。と、體につけてゐた鈴が皆一度に鳴り出した。彼は豌豆を

一杯入れてある膀胱を尖につけた、道化杖を振り廻すのであつた。

「昔ナボリのアルフォンソと云ふ王様が、デオットと云ふ畫師を抱へて居つたのさ。或時王様が此の畫師に、御殿の壁へ自分の王國を描くように吩咐けた。デオットは國の紋章と、王冠と、笏の附いた鞍を背に載せた一匹の驢馬が、同じ様な紋章のついた別な新しい鞍を、嗅ぎ廻してゐる所を描いた。「これは何だ？」とアルフォンソが訊ねると、「これは始終新しい王様を求めてゐるあなたの人民でございます」と畫師が答へた。——なあ叔父さん、俺の話はこれつ切りさ。俺は馬鹿ぢやあるけれど、今ミランの人間が嗅ぎ廻してゐる佛蘭西の鞍は、間もなく彼奴等の背中を磨り剝いて了ふよ——まあ驢馬の腹に足りる丈け氣儘をさせてやるがよい。又古いものが新しく見え、新しい物が古い様に思はれ出すのさ」

「愚かな者が時々賢い事を言ふものだ淋しい微笑を浮べ乍ら王はかう言つた。「コロオ、矢張り書き留めて置くがよい……」

併し今度は後世に傳ふべき箴言を發する事が出来ない様に、運命が定まつて居たのである。洞穴の入口で馬の鼻を鳴らす聲や、蹄の音や、ひそくと遠慮さうに話す人聲が聞えた。と侍従のマリオロ・ブステルロが、慄へた様な顔付をして駈け込みながら、秘書官長のバルトロメオ・カルゴに何やら耳打ちした。

「何事が起つたのだ？」とモローが訊ねた。

一同は鳴りを鎮めた。

「殿下……」と秘書官長は言ひ掛けたが、急に聲が慄へて、彼はしまひ迄言ひ終らないで顔を反けた。

「殿下」ルイジ・マルリアニがモローの傍へ寄つてかう言つた。「何うか神様の御守護に依つて、十分お覺悟遊ばします様に……よくない報らせでございます」

「言へ、早く言へ」とモローは叫んだが、急にさつと顔が蒼くなつた。

洞穴の入口に立つてゐる兵士や廷臣などの間に、全身泥まみれになつて、革の長靴を穿いた一人の男が、ふと王の目に入つた。一同は無言の儘道を開いた。王はルイジイを押し退けて、急使の方へ飛んで行き乍ら、その手から書面を掻き取つて開封し、さつと其上に目を走らせたかと思ふと、急に一聲叫んで仰向に倒れた。ブステルロとマルリアニが、やつとの事で彼を抱き留めた。

ボルゴンチオ・ポットの報告に依ると、九月の十七日即ち聖サチロの祭日に、裏切人のペルナルチノがミランの城を、佛蘭西の將デヤン・デヤコボ・トリヴリチオに明渡したとの事であつた。王は卒倒するのが好きで又上手であつた。時とすると彼は此方法を、外交上の權謀術數とし

て利用する事もあつたが、今度の卒倒は拵へものではなかつた。

近臣は暫く彼を正氣に返す事が出来なかつた。到頭彼はやつとの事で目を開けて、ほつと溜息をつき乍ら身を起し、恭しげに十字を切つた後かう言つた。

「ユダ以來今日に至る迄、あのベルナルド・ダコルテ以上の裏切人は嘗てなかつた！」  
それつ切り彼は終日口を利かなかつた。

數日後インスブルクの町で（此處で彼はマクシミリアン帝の手寫い歓迎を受けたのである）、彼は夜遅く皇帝の宮殿内なるとある、一間を彼方此方歩き廻り乍ら、秘書官長のペルトロメオと差向ひで、二通の信任状を起草してゐた。王が口授すると、ペルトロメオが筆記するのであつた。これはモローが秘密に君コンスタンチノブル府なる、土耳其王の許へ遣はす事に決めた、二人の使者に托するものであつた。

老秘書官の顔は注意以外に何等の表情も浮べてゐなかつた。ベンは王の口早な言葉を漸との事で追ひ乍ら、從順に紙の上に走るのであつた。

「……常に陛下に對して確固不變なる好意と尊敬を抱ける某は、殊に今日我國土の恢復に關して、オットマン大帝國元首の寛大なる援助を切望するの餘り、三つの異りたる道を経て、三人の急使を陛下の闕下へ送らんと決心仕候。少くとも其の中の一人は、某の任命を果し得る事と信

じ申候……」

次に王は法王アレクサンドル六世の非を鳴らして、土耳其帝に訴へるのであつた。

「天性奸譎邪惡なる羅馬法王は……」

無關心な秘書官のペンは急に留つた。彼は眉を上げ額を皺め乍ら、聞き違ひではないかと問ひ返した。

「法王ですつて？」

「あゝさうだ、さうだ。早く書いて呉れ」

秘書官は尙一層紙の上へ首を屈めた。さうして再びベンが軋み出した。

「陛下も御承知の如く生來奸譎邪惡なる法王は、佛蘭西王を唆かしてロムバルヂヤ遠征の軍を起さしめたるものに御座候……」

それから佛蘭西軍の勝利を詳細に報告した後に、

「此の報知に接したる某は恐怖の念に慄然と致し候」と王は正直な所を打明けた。「爲めに某はマクシミリアン帝の許に退き、陛下の援助を待つを賢策と思考仕候。すべての人は某に裏切り某を欺き申候、されど最も憎むべきはベルナルヂノに候……」  
此名を發した時彼の聲は慄へた。

「ベルナルチノ・ダコルテは某の胸に暖められたる蛇に御座候。彼は某の恩寵に浴し乍らユダの如く某を賣りたる奴隷に御座候」……いや待てよ、ユダと云ふ事は要らない」モローは異教徒の土耳其王に出す手紙と氣が付いて、かう訂正した。

自分の不幸を書き述べた後、彼は海陸よりゼニスを攻撃するよう土耳其王に哀願した。そして勝算の確かな事、オットマン帝國に取つて不倶戴天の仇たる、サンマルコ共和國滅亡の間違ひない事を誓つた。

「尙此の戦争のみならず其の他の事件に於ても、某の所有に屬する一切のものは、陛下の隨意御使用に任せ申す可く、全歐洲に於て某以上強力にして誠實なる同盟者は、到底他に求め得ざる事を敢て斷言仕候」と彼は親書を結んだ。

彼は卓に近寄つて何やら言ひ足さうとしたが、手を振つて崩れる様に眩椅子へ坐つた。

バルトロメオは未だ乾いてゐない最後の一頁へ、砂入れの砂を振り撒いた。ふと目を上げて王を眺めると、王は兩手で顔を蔽うて泣いて居た。背も、肩も、むつちりした括り願も、剃立ての青々とした頬も、綺麗に撫で付けた頭も、歎歎の爲めに力無く慄へてゐた。

「一體何の爲め、何の罰でございますか？ 神様、あなたの眞理は何處にあるのでございますか？」此の時丁度愚痴っぽい女の様に見える擧めた顔を秘書官の方へ向け乍ら、彼はかう呟いた。

「バルトロメオ、わしはお前を信用してゐる。わしの考へが間違つてゐるか間違つてゐないか、一つ腹藏なく言つて呉れ」

「殿下の仰有るのは土耳其帝へ送る使者の事でございますか？」  
「モローは點頭いた。年寄つた政治家は考へ深さうに眉を上げ、唇を突き出して額に皺を寄せた。」

「勿論一方から見れば、狼と一緒に暮すには狼の吠聲を學ばねばなりません、併し又一方から見ますと……甚だ僭越の申分ではございますが、少し御猶豫になりましたは如何でございますか？」

「斷じてならん」とモローは叫んだ。「わしはもう十分待つた。苟もミラン王を詰らない將棋の歩か何ぞのやうに、世界の舞臺から抛り出す譯に行かない、と云ふ事を皆の者に示せてやるのだ。何故と言つてお前考へても見るがい——若しわしの様に正しき者が侮辱された時、其者が土耳其皇帝どころか悪魔に援助を乞うたからと言つて、深く咎める事は出来ない筈だ」

「殿下」と秘書官は恐る／＼口を開いた。「土耳其軍の歐羅巴侵入は意外な結果を呼び起しは致しませんまいか……例へば基督教會に危険を醸すやうな虞れが……」

「お、バルトロメオ、お前はわしがそれを豫想してゐないと思ふのか？ わしは我等の神

聖な母たる教會に些かたりとも害を加へる位なら、寧ろ死んだ方がましだと思つて居る。飛んでもない事だ！……お前にはわしの腹の中が未だ十分わかつて居ないのだ」以前の狡猾で貪婪な薄笑ひを浮べ乍ら彼は言足した。「今に見てゐるがよい。わしは世界に大混亂を惹き起して、敵の奴等が再び日の目を拜む事が出来ない様な、權謀術數の網を編んで見せてやるから！ 只一つお前に聞かせてやるが、土耳其帝などはわしの手中の武器に過ぎないのだ。時が到れば、わしは土耳其帝をも攻め滅して、汚ららしいモホメットの宗派を葬つた上、基督のみ墓を異教徒の軛くわから救ひ出して見せるよ！……」

バルトロメオは何とも返事をしないで、力無げに目を伏せた。

「駄目だ」と彼は考へた。「まるで駄目だ！ 飛んでもない夢を見てゐる。あれが外交などと言へるものか！」

土耳其帝の援助に對する熱い信念と希望を抱き乍ら、王は此の晩長い間自分の秘藏の聖像の前で祈禱した。それはレオナルド・ダヴィンチの作で、美しいモローの雙妾かまもツェチリヤ・ベルガミニ伯爵夫人の顔に似せて、聖母を描いたものであつた。

## 三

ミラノ城明渡しの日前に、佛蘭西の元帥トリヴルチオが、「佛蘭西！ 佛蘭西！」と言ふ人民の歡呼の聲と、寺々の鐘の音に迎へられ乍ら、さながら征服した町へでも入る様に、ミランへ乗込んだのである。

佛蘭西王の到着は十月の六日と豫定されてゐた。市民は盛大な歡迎式を準備してゐた。

祭の行列に用ひる爲めに商業組合の人々は僧院の聖器藏の中から、二つの古い天使像を引つ張り出した。それは五十年以來未だアムプロジア共和國と稱してゐた頃、人民の自由を表象したものである。金色に塗つた翼を動かす古いベネが弛んだので、組合の人々はその修繕を前の王室附の技師レオナルド・ダヴィンチに頼んだ。

此頃レオナルドは新しい飛行器の發明に従事してゐた。ある時まだ早朝の薄暗い時から、彼は卓に向つて圖を引いたり、數學の計算をしたりして居た。膜のやうな琥珀を張つた軽い葦の骨の翼は、以前の機械のやうに蝙蝠に似てゐないで、巨大な燕を想ひ出させるのであつた。一方の翼はもう出來上つてゐた。そして並々ならず美しい、華奢な、先の尖つた其翼は床から天井まで届く程高かつた。その下の蔭の方で、アストロがごく／＼動き乍ら、ミラン自治團體の古い天使の、毀れた彈機ばねを繕つてゐた。

レオナルドは今度こそ出来る丈け詳しく、自然が人間に飛行機の模型を示してゐる、鳥の體の

構造を研究しようと決心した。彼は依然として飛翔の奇蹟を、機械學の法則に分析しようと望んでゐるのであつた。人間の知り得る事は悉く知り盡した様に思はれるけれど、それでも鳥の飛翔の中には、如何なる機械學の法則にも分解する事の出来ない、神祕があるのを感じた。又もや彼は以前の實驗の時と同じく、自然の創造と人間の手工、生きた體と死んだ機械を分つてゐる或何物かに打つ突かつた。そして彼は自分が不可能を志して努力してゐるのではないか、と言ふ様な心持がした。

「あゝ有難い、やつと済んだ！」彈機を巻きながらアストロはかう叫んだ。

天使は重々しく翼を振り始めた。部屋の中に軽い風が起つて、巨大な燕の薄い軽い翼は、さながら生ある物の如く、さら／＼と音を立て、動いた。鍛冶工は何とも言へぬ優しい目付でそれを見遣つた。

「こんな偶像の爲めに何れ丈時間を潰したか分りやしない！」と彼は天使を指さし乍ら呟いた。「さあ今度こそあなたが何と仰有らうとも、翼の出来ない間は此室を出やしません——尾の圖面を一寸見せて下さい」

「未だ出来てないんだよアストロ！ 待つて呉れ、よく考へなきやならない」

「何う言ふ譯ですか先生？ あなたは一昨日約束なすつたぢやありませんか……」

「何うも仕方がないよ！ お前も知つての通り、此の機械の尾は舵の代りになるのだから、若し一寸でも間違へたら、みんな駄目になつて了ふんだよ」

「ぢや宜しい、宜しい、私は待ちますよ。その間にもう一つの翼を……」

「アストロ」と師は言つた。「お前も少し待つたら何うだ。何だか其處も少し變へなきやなるまいかと思はれるんだよ……」

鍛冶工は答へなかつた。彼は牛の筋を撚つて拵へた綱を張つた、葦の骨組を注意深く擡げてくる／＼と廻し始めたが、やがて不意にレオナルドの方へ／＼と向き直つて、慄へる籠り聲で言ひ出した。

「先生、ねえ先生、何うか腹を立てないで下さい。けれど假令あなたが一生懸命に計算して、それで結局又此の機械でも飛ぶ事が出来ないと言ふ事になつても、私は兎に角飛びますよ。あなたの機械學に對する面當に飛びますよ——さうですとも、私はもう此上我慢がなりません、根が盡きました！ だつて私にはよく分つてゐるんですもの、若し今度も……」

彼は終ひまで言はないで顔を外れた。レオナルドはその頬骨の張つた、鈍い、根氣強い顔をちつと注意深く見詰めた。その顔には只一心に凝り固まつた、一切の物を呑み盡す様な、氣狂ひめいた想念がちつと動かすに浮んでゐた。



「先生」とアストロは言葉を結んだ。「何うか一思ひに本當の事を言つて下さい。一體私達は飛べるんですか飛べないんですか？」

言葉に盡せぬ様な恐怖と希望とが彼の言葉に響いたので、レオナルドは本當の事を言ふ氣力が無かつた。

「勿論」と彼は目を伏せ乍ら答へた。「實驗をして見ない中は分らないけれど、私は飛べると思ふよ……」

「もう澤山です、澤山です！」鍛冶工は有頂天になつて両手を振り廻した。「もうそれ以上聞きたくありません！ あなたが飛べると仰つたら、つまり大丈夫飛べるのです」

彼は押堪へようとしたけれど我慢が出来ないらしく、子供らしい幸福げな聲を立てゝからからと笑ひ出した。

「お前、何うしたのだ？」レオナルドは吃驚した。

「御免なさい先生！ 私はあなたのお邪魔をしてゐますね。まあこれが最後ですから——もう二度とお邪魔はしません……ねえ先生、私はミランの人間や、佛蘭西兵や、モロー公や、佛蘭西王などの事を想ひ出すと、何だかかうもぞく／＼して來るのです——可笑しくもあれば可哀さうでもあります。哀れな奴等がうよく／＼動き廻つて、お互に喧嘩をし合ひながら、まあ何うでせ

う、何か偉い仕事でもしてる氣なんですからね。何だ、あんな地びたを這ひ廻る蟲けらの癖に、羽なしの蛙蟪め！ さうして彼奴等は誰一人として、何んな奇蹟が準備されてゐるか、少しも知らないんですからね。彼奴等が翼を持つて空を飛ぶ人達を見たら、何んなに目を斜いて口をばかんと開けるか、まあ先生想像して御覽なさい。だつてそれは世間の馬鹿者共を喜ばす爲めに翼を振る、木造りの天使とは事が違ひますからね！ 見ても本當にならないでせう。これは神様だと考へるに相違ありません。まあ私などは神様と言ふよりか、寧ろ惡魔とでも考へるかも知れませんが、あなたに翼が出来たら、本當に神様の様にお成りになるでせう。それとも事に依つたら、反基督と言ふかも知れませんか。そして恐しさの餘り地びたに倒れて、あなたを拜むに相違ありません。その時あなたは彼奴等を好きにする事が出来ますよ。さうなるともう戦争もなければ法律もなく、主人もなければ奴隷もなくなつて、一切の物がすっかり變つて了ひます。今私達が考へるのさへ憚る様な、新しい時代がやつて來ると思ひます。そして世界の人民はみんな一緒になつて、翼を擴げて大空を飛び乍ら、丁度天使の合唱の様に聲を揃へて、一つ神に對するホザナを唱へるでせう……おゝレオナルド先生！ 全く本當に……」

彼はまるで熱に浮されてゐる様な調子でかう言つた。

「可哀さうな男だ！」とレオナルドは考へた。「何と云ふ信仰だらう！ 本當に氣が違ふかも知

れないぞ。一體私は此男を何うしたらいいのだらう？ 何うして本當の事を言つたものだらう？」

二六

此瞬間、表の戸をどん／＼烈しく叩く音が聞え、續いて人の話聲や足音を響いたかと思ふと、今度は閉め切つた畫室の戸を前と同じ様に叩く音が聞えた。

「誰が今時分のこ／＼やつて来るのだらう？ 仕様のない畜生だ」と鍛冶工は毒々しげに、かう呟いた。「誰だ？ 先生はいらつしやらないよ。ミランを立つて行かれたから」

「私だよアストロ！ 私だ——ルカ・パチオリだよ。お願いだから早く開けてお呉れ！」  
アストロは戸を開けて、數學家の僧を中へ入れた。

「あなた何うしたのですか？」パチオリの憎えた顔を見詰め乍ら、畫家はかう訊いた。

「レオナルドさん、これは私の身に起つた事ぢやありません——尤もさうですね、私の身にも起つたのですが、併し此の事は後にしませう。先づ取敢ず……ねえレオナルドさん！……あなたの巨像をガスコニイの弓兵共が……私はたつた今カステロから来たばかりなので、自分の眼で、ちやんと見ましたが、佛蘭西人があなたの騎馬像を毀してゐますよ……さあ、さあ早く駆け出して行きますせう！」

「何の爲めに？」とレオナルドは靜かに言葉を返した。只顔は心持蒼くなつてゐた。「何うも仕様が無いぢやありませんか？」

「何ですつて？ 冗談ぢやない！ あなただつて自分の最大傑作が亡びようとしてゐるのに、手を組んでちつと坐つてゐる譯に行きますまいよ。私はトレムイル氏に手蔓がありますから、一つ運動しませう……」

「何うせ間に合はないでせう」と畫家は言つた。

「間に合ひますよ、間に合ひますよ！ これから畑を抜けたり垣を越えたりして、眞直に走つて行きませう。只急がなきやなりません！」

僧に曳かれてレオナルドは家を出た。そして二人は殆ど走る様にミラン城を指して行つた。道々ルカは自分の災厄を物語つた。昨夜獨逸の傭兵共がルカの住んでゐるサン・シムブリチアノ僧侶組合の穴藏を破壊して、有りつ丈けの酒を飲み食つた擧句亂暴を始めたが、その中にある僧房で、硝子で拵へた幾何學の模型を見付け出し、それを魔法に使ふ「占ひの硝子」と間違へて、粉微塵に毀して了つたのである。

「一體あの罪もない硝子が」とパチオリは訴へた。「あいつ等に何んな悪い事をしたのでせう？」  
城塞の廣場へ足を入れた時、トレ・デル・フィラレテ哨塔の南本門の傍らなる、パチボンテと呼ばれる刎橋の上に、扨從に取巻かれた若い佛蘭西の貴族が立つてゐるのを見付けた。

「ジル先生だ！」とルカは叫んだ。そして、レオナルドに向つて、このジル先生は「山鳥馴らし」と呼ばれる鳥飼ひで、主君たる佛蘭西王の飼つてゐる鴛鴦や、鶺鴒や、鸚鵡や、鶉に歌や話や其他の藝を教へる役目を勤め、宮中では可成り勢力のある人だと説明した。佛蘭西ではジル先生の笛に連れて踊り出すのは、鶺鴒だけではないとの評判であつた。パチオリはもう以前から自分の著はした「神聖なる比例」や、「算術總論」と云ふ本を、立派に装幀して此の人に捧げようと考へてゐたのである。

「何うか私の事は心配しないで下さいルカさん」とレオナルドは言つた。「何うかジルさんの所へ行つて下さい。私は一人で自分のする丈の事をしますから」

「いや、あの人の所へは後で行きませう」とパチオリは間の悪さうな様子でかう言つた。「それともかうしたら何うでせう。私は一寸一走りジル先生の所へ走つて行つて、只一言何處へお出掛けか訊いて見たら、直ぐに又あなたの所へ歸つて來ます。その間あなたはトレムイル氏の所へ行つて下さい……」

機敏な僧は鶺鴒色の法衣の裾を掴み上げて、素足に突つ掛けた木靴を小刻みにから／＼と鳴らし乍ら、王の山鳥馴らしの方へ飛び上る様な足取りで駆け寄つた。

レオナルドはパチポンテの刎橋を渡つて、練兵場になつてゐるミラン城の中庭へ入つた。

#### 四

霧の深い朝であつた。燃え残りの焚火が消え掛つてゐた。大砲や、砲弾や、陣中用品や、燕麥の俵や、麥藁の堆積や、馬糞の山や、かう云ふ物の一面に並んでゐる廣場とその周囲の建物は、一つの大きな兵營と既と酒場に變つて了つたのである。行軍用の床几や、庖厨用の焼串や、酒樽や、底を上へ向けて賭博の卓に代用した空樽などの周りには、叫聲、笑聲、呪咀、様々な言葉の入交つた罵詈、冒瀆の言葉、醉漢の歌などが聞えた。唯時々上官が通り掛つたときだけ、邊りがひつそりと靜まるのであつた。その間々にはライン、スエビヤ地方の傭兵が鳴らすけたましい太鼓や、眞鍮喇叭が響いたり、瑞西のウリイやウンテルデルデンの自由州から出た、傭兵の吹き鳴らすアルプス風の角笛が、牧歌的な佻しい響きを邊りに漲らすのである。

廣場の眞中まで辿り着いた時、畫家は自分の巨像が未だ手をつけられないでゐるのを發見した。

羅馬皇帝の様な禿げた頭に、獅子の男々しさと狐の狡猾さとを兼ねた表情をした、ロムバルヂヤの征服者たるフランチェスコ・アッテンドロ・スフォルツァ大公は、依然として馬の背に跨つてゐた。馬は後足で立ち乍ら、倒れた敵兵を蹄で蹂躪してゐるのであつた。

スエビヤの砲手や、グラウピュンドの弓手や、ピカルジャの投石手や、ガスコニイの弩弓手などが、此の彫像の周りに群がって、何やら頻りに喚いてゐた。彼等は互に相手の言ふ事が分らないので、身振り手振を以て補つてゐた。それに依つてレオナルドは、これから獨逸と佛蘭西の弓手が一人宛出て、競技をしようと思ふのだなと曉つた。二人は強烈な酒をコップに四杯呷つた後、五十歩の距離を隔て、交互に射撃する事になつてゐた。標的は巨像の頸にある黒子であつた。

歩数を計つて籤を引き、誰が先に射るかと思ふ事を決めた。酒保の女は酒を注いだ。獨逸兵は息をも繼がずに後からと約束の四杯を飲み干した後、指定の場所に立つて狙ひを定め、ひうと切つて放したがやり損じた。矢は頬を掠めて左耳の端を缺いた丈で、黒子には當らなかつた。

次に佛蘭西兵が肩へ弩弓を當てた時、群集の間に動搖が生じた。兵士等は兩側へさつと分れて、一人の騎士に随ふ美々しい護衛兵の行列の爲めに道を開いた。

「あれは誰ですか？」レオナルドは傍に立つてゐる投石手に問ひ掛けた。

「ド・ラ・トレムイル閣下です」

「未だ遅くはない」と畫家は考へた。「あの人の後を追つ掛けて頼まなきやならない……」

けれども彼は身動きもせず立つて居た。實際的問題に對する極度の無能力と、何うする事も出来ない様な麻痺感が彼の全幅を領して、假令今が生き死の決まる様な場合であつたとしても、指一本動かさなかつた。あのルカ・パチオリの様に從僕や馬丁の間を押し分けて、勢力家の後を追ひ廻さなければならぬと思つた丈で、恐怖と羞恥と嫌惡の情がこみ上げて來るのであつた。

カスコニイ人が切つて放した。と矢はひうと唸り聲を立てて、見事に黒子に命中した。

「よう／＼！ 萬歳！」と兵士等は帽子を振り乍ら叫んだ。「佛蘭西大勝利！」

兵士達は巨像を取り巻いて競技を續けた。

レオナルドは立去らうとしたが、丁度恐しい而も馬鹿げた夢でも見てゐる様な氣持で、其場へ釘付にされた者のやうに、自分の生涯中最も貴重な十六年間の勞作が——恐らくブラクシテレスやフィヂウス以來最も偉大な彫刻の傑作が、むざ／＼破壊されて行く有様を、ちつと從順しく眺めて居た。

雨霞と降る銃丸や矢や石の爲めに、粘土は細かい砂となつて飛び散り、大きな塊となつて崩れ落ちた。埃が一面に立迷うて、巨像は骸骨の様な骨組を露はし始めた。

太陽は雲の陰から現れた。悦ばしげに降り注ぐ其の光を受けた時、巨像の殘骸は尙一層儼然

なものに見えた。英雄も首のない胴體ばかりになつて、乗馬の足は取れて了ひ、やつと無事に残つた手には王笏の破片を握つて居る。たゞ臺座に刻んである *Ecce Deus* (此神) の銘がありありと讀まれた。

此の時廣場の上を佛蘭西の總指揮官、チャン・チャコボ・トリヴルチオ老元帥が通り掛つた。ふと巨像を見て怪訝さうに足を留めた。そして小手を翳して日光を避け乍ら、今一度像を見上げたが、伴の者を振返つて訊ねた。

「これは何事だ？」

「閣下！」と中尉の一人が恭しげに答へた。「ジョルジ・コケブルン大尉がご自身の権限で以て、弓兵達に許可されたのでございます……」

「スフォルツァの記念碑を」と元帥は怒鳴つた。「レオナルド・ダギンチの傑作を、ガスコニイの弓兵共の標的にするなんて！……」

射撃に夢中になつて何も知らずに居る、兵士の群にづか／＼と近寄りながら、彼はいきなりとあるピカルヂヤの投石手の襟首をひつ掴んで、地びたへ引摺り倒したと思ふと、雷の様な罵聲を浴せ掛けた。

老元帥の顔は眞赤になつて、血管が頸筋に怒張してゐた。

「閣下！」兵士は膝を突いて全身わな／＼と慄へ乍ら、しどろもどろにかう呟いた。「閣下、私達は何も知らなかつたのであります。コケブルン大尉殿が……」

「待つてゐろ、此の畜生めら！」とトリヴルチオは喚いた。「コケブルン大尉が何んなものかわしが見せてやる、何奴も此奴もみんな逆さ吊りにしてやるから！」

劍がきらりと閃いた。彼は振り上げて打下さうとしたが、その瞬間レオナルドが左手で彼の二の腕を掴んだ。それは眞鍮の小手が凹む程の恐しい力であつた。

元帥は手を振放さうと空しく腕き乍ら、呆れ顔をしてレオナルドを見遣つた。

「これは誰だ？」と彼は訊いた。

「レオナルド・ダギンチ」と此方は落着いた聲で答へた。

「君は何うして無禮にも……」と老人はかつとなつて、かう怒鳴り掛けたが、畫家の澄んだ視線に出會つて口を噤んで了つた。

「では君がレオナルドなのか」ちつと對手の顔を見詰め乍ら彼はかう言つた。「まあ手を、手を放して呉れ。小手が曲つて了つた。何と云ふ力だらう！ いや、君は中々度胸のいい男だ……」

「閣下、願ひですから、お腹立にならないで、彼等を許してやつて下さいまし！」と畫家は恭

しい調子でかう言つた。

元帥は尙一層注意深く彼を見詰めてゐたが、やがてにやりと笑つて首を振つた。

「變人だなあ！ 彼奴等は君の傑作を毀して了つたのに、君は彼奴等の命乞ひをするのかね？」

「閣下、假令閣下が彼等を一人残らず絞しぼり首にしてお了ひになつても、私や私の彫像に取つて何の益にもなりません。彼等は自分で自分のした事が分らないのでございます」

老人はちつと考へ込んだが、突然その顔が晴やかになつて、賢さうな小さい目の中に善良な感情が輝いた。

「ねえレオナルド、たつた一つわしに合點の行かない事がある。何うして君は此處に立つて居乍ら、ちつと見物して居たのだね？ 何うして知らせなかつたのだ？ わしかトレムイル氏に訴へて出ればよかつたのに。あゝさう言へばあの人はたつた今此處を通つた筈だが」

レオナルドは目を伏せて、まるで悪い事でもした人の様に、赤くなつて吃り乍ら答へた。

「間に合はなかつたのでございます……トレムイル閣下のお顔を存じませぬので……」

「残念だなあ」巨像の残骸を見廻し乍ら彼はかう言葉を結んだ。「君の巨像ゴブラスの爲めなら部下の撰り拔きの兵士を、百人出しても惜しくはなかつたのになあ……」

レオナルドが家へ歸る途中、王と最後の會見をした優美なブラマンテの涼廊ポウラの下にある橋を

渡つてゐると、佛蘭士の小姓や馬丁達がミラン王の秘藏してゐた、手馴れの白鳥を狩つて楽しんでゐるのが目に入つた。惡戯いたづらつ子達は弓を射てゐるのであつた。四方から高い石垣に圍まれた狭い濠の中で、白鳥の群は氣狂ひの様に騒ぎ廻つてゐた。白い羽や柔毛ユキウの散亂した黒い水の上を、血みどろの死骸がゆら／＼と揺れ乍ら泛んでゐる。たつた今傷ついたらしい白鳥が、耳を劈く様な憐れな叫聲を上げ乍ら、死ぬる前に今一度飛び上らうと努力する様に、長い頸をぐつと延して、次第に弱り行く翼を慄はせて居た。

レオナルドは顔を背けて、急ぎ足に通り抜けた。彼は自分も此白鳥の様な氣がした。

## 五

十月六日の日曜日、佛蘭西王ルイ十二世はチチナ門を潜つてミランへ入つた。隨行の中には羅馬法王の息きたるブレンチノ公、ツューザル・ボルジャが交つてゐた。寺院前の廣場から宮城の方へ行列が進む間、ミラン共和國の天使が二つ、規則正しく翼を振つて居た。

巨像ゴブラスが破壊されて以來、レオナルドは再び飛行機の製作に手をつけなかつた。只アストロが一人でこつ／＼仕上げを急いで居た。畫家は此の翼も役に立たないと云ふ事を、彼に打明ける氣力がなかつたのである。鍛冶工の方でも師を避ける様な風付で、目前に迫つた試験飛行の事

を少しも口に出さなかつた。只時々一つしか無い目に無言の非難を籠めて、偷む様に師を眺めるのみであつた。彼の目の中には暗鬱な而も物狂ほしい火が燃えて居た。

十月二十日過ぎの或朝、パチオリがレオナルドの所へ駆け付けて、王が彼に参内を命じてゐる由を告げた。畫家は氣が進まぬ乍ら出掛けた。ふと飛行機が見えなくなつたので、若しやアストロが何でも彼でも飛んで見ようと云ふ氣を起して、何か災難を惹起しはすまいかと、心配で堪らなかつたのである。

レオナルドがかの記憶に新しいロケット城の廣間へ入つた時、ルイ十二世はミランの年寄株や行政委員などに謁見してゐた。

畫家は未來の命令者たる佛蘭西王を眺めた。

彼の容貌には少しも皇帝らしい品位が無かつた。瘦せた弱々しい體、狭い肩、べちやんこな胸、醜い皺に刻まれた顔——それは受難者の様な表情をしてゐたけれど、苦痛に依つて淨化されてゐない無味平板な顔で、卑俗な徳行家と云つた様な表情が浮んでゐた。

玉座の上段に二十歳ばかりの青年が立つてゐた。質素な黒い服を着て、帽子の折返しに幾つかの眞珠をつけてゐるのと、大天使ミカエル勳章の貝入りの金鎖を頸に掛けてゐる外、少しも飾りらしいものが無かつた。亞麻色の髪は房々と長く、小さな暗色の鬚髯は心持二つに分れ、

顔は一面に濃淡のない蒼白い色をして居て、黒みがかつた青い目は利口さうな愛想のいゝ表情をしてゐた。

「ねえルカさん」と畫家は同行の僧の耳に囁いた。「あの貴族は誰ですか？」

「法王のご子息です」と僧は答へた。「アレンチノ公<sup>チューザ</sup>・ボルジアです」

レオナルドはツューザルの悪行を噂に聞いてゐた。明確な證據こそ無いけれど、何時までも弟でゐるのが厭になつて、大僧正の紫袍パープルスを脱ぎ棄てた上、羅馬教會の軍事長官たる<sup>インフラ</sup>聖職手の職を襲はうと云ふ野心を起して、自分の兄のデオワンニ・ボルジャを殺した事は、誰一人疑ふ者が無いのであつた。併しそれより以上に有るまじき噂が行はれてゐた。外でもない、此のカインの様な悪業の原因は、兄弟が父の寵愛を争つた爲めばかりでなく、現在の妹ルクレチヤに對する道ならぬ戀の遠引から起つた、とかう云ふのであつた。

「そんな事があつてよいものか！」彼の落着いた顔や、罪の無い目に見入り乍ら、レオナルドはかう考へた。

多分自分の方に注がれた凝視を直覺したのであらう、ツューザレは彼の方を振返つた。そして自分の傍に立つてゐる、長い黒い服を着た秘書官らしい上品な老人の耳へ屈み込んで、レオナルドを指さし乍ら何やら囁いた。老人が返事をした時、彼はちつと畫家を見詰めた。微妙な薄

笑ひがツェーザレの脣を亡つた。と其瞬間にレオナルドは

「いやさうかも知れない、大きにさうかも知れない。事に依つたら噂以上に悪い事が有るかも知れない」

行政委員の代表者は退屈な朗讀を終へて玉座に近寄り、跪いて王に願書を捧げた。其時ルイ王はふと羊皮紙の巻物を取り落した。代表者が周章ててそれを拾ひ上げようとすると、ツェーザルが其の機先を制して、素敏しく巻物を拾ひ上げ、會釋し乍ら王に差出した。

「下司」レオナルドの背後に立つてゐた佛蘭西貴族の群の中で、誰やら毒々しげにかう囁いた。「嬉しさうに飛び出した様子は何うだ」

「君の言はれる通りですよ」と今一人が引取つた。「羅馬法王の息子は下男の役目を見事に務めてゐます。毎朝王が着替をなさる時に、あの男が細々とご用を勤めて、肌衣まで暖める所を、君のお目に掛け度い位ですよ。恐らく既の掃除さへ厭だとは言ひますまいよ」

畫家はツェーザルの卑屈な舉動に氣が付いたけれど、それは丁度猛獸の表面ばかりの愛撫の様に、忌はしいと云ふより寧ろ恐ろしく感じられた。

此時パチオリはせか／＼と興奮した様子で、レオナルドの肘を突つたのであつた。併し畫家がいつもの遠慮がちな性質の爲めに、王の注意を惹くべき機會を發見する事が出来ないで、

終日群集の中に立ち通し兼ねない姿だつたので、彼は最後の手段に訴へる事とした——彼は畫家の手を執つて全身を二重に折り屈め乍ら、絶えず早口に「最も驚くべき、最も激烈な、最も勇壯な」と云つた様な、最上級の形容詞のつく口笛と叱咤を發して群集を押し分け、畫家を王に謁見させたのである。

ルイ十二世は「最後の晚餐」の話をし掛けて、使徒達の表情を賞めたが、併し何より天井の遠近法に一番感心すると言つた。

ルカは王がレオナルドを宮廷附として招聘するのを、今か今かと待つて居たが、突然小姓が入つて来て、たつた今佛蘭西から届いた手紙を王に差出した。

王はブレトン生れの愛妻アンナの筆蹟に氣が付いた。それは王妃分娩の報知であつた。

貴族達は祝辭を述べ始めた。群衆はレオナルドとパチオリとを、傍の方へ押し出して了つた。王はちらと二人を見遣つて、何か想ひ出した様に口を切らうとしたが、それも又直ぐに忘れて、新たに誕生した王女の健康を祝する爲め、杯を擧げようではないかと女臣達を誘つて、次の間へ出て了つた。

パチオリは畫家の手を掴まへて、ぐん／＼しよ曳き出した。

「さあ早く、早く！」



「いやルカさん」とレオナルドは靜かに言葉を返した。「いろいろ御心配を掛けて有難いですが、私はもう差し出るのは止めませう。陛下は今私なんかの事どころぢやないのですから」かう言つて彼は宮殿を出た。

カテスロの南門の邊りにあるパチボンテの刎橋の上で、ツェーザル・ボルジャの祕書官アガピトが、後から追つ掛けて來た。彼はブレンチノ公の代理として、「建築技師長」の職を務める様に申入れた。これはレオナルドがモローの許で勤めてゐたのと、同じ官職なのであつた。

畫家は二三日経つて返事をする約束した。

家へ近くなつた頃、未だ大分離れた所から、往來に人集りがしてゐるのを見て、彼は足を早めた。ジオヴェンとマルコとサライノとが、多分擔架が無かつたからであらう、揉みくたになつて折れたり破れたりした。大きな燕の翼の様な新飛行器の翼の上に、友達の鍛冶工アストロを載せて運んで來た。アストロはずた／＼に裂けた血みどろの着物をきて、死人の様な蒼い顔をして居た。

遂に師の恐れてゐた事が實現されたのである。鍛冶工は翼を試験しようと思つて飛んで見たが、二振り三振りしたと思ふと其儘落ちて了つた。若し機械の一方の翼が傍に立つてゐた木の枝に引つ掛らなかつたら、慘死を免れなかつたのである。

レオナルドは自分でも手傳つて擔架を家へ入れ、そつと病人を床へ臥かしてやつた。彼が傷口を見ようと思つて屈み込んだ時、アストロはふと正氣に返つた。そして無限の哀願を籠めた目でレオナルドを見上げ乍ら、

「先生、許して下さい」と囁いた。

## 六

十一月の上旬、王女の誕生を祝する盛な催しがあつた後で、ルイ十二世はミラノ市民の宣誓を受け、トリヴルチオ元帥をロムボルヂヤの太守に任命して、フロレンスへ向けて出發した。寺院では精靈に對する感謝の祈禱式が催されたりして、市中は靜穩に歸したけれど、それは表面ばかりであつた。市民はトリヴルチオの残忍と老獪を憎んでゐたのである。モロー公に歸服する人々は愚民を煽動して、宣言書など撒き散らした。つい此間冷笑と罵詈を以て舊主を送つた人達が、今では稀世の名君か何ぞの様に彼を追慕するのであつた。

一月の下旬一團の群集がチチナ門の附近で、佛蘭西の收稅官吏の事務署を破壊した。同日バヤに近いレオナルドの田莊で、一人の佛蘭西兵が若いロムバルヂヤの百姓の娘を凌辱しようとした。娘はそれを防禦し乍ら、箒を以て無禮者の顔を撲り付けた。兵士は斧を振つて彼女を

威嚇した。只ならぬ叫聲を聞いて娘の父が、棒を以て駆けつけたので、兵士は老人を殺害したのである。すると群衆が集つて兵士を殺して了つた。そこで佛蘭西兵等はロムベルヂヤの村民を襲撃して、多数の農民を擧殺し、村を荒廢に歸して了つた。ミランに達した此の報知は、まるで火薬の上へ火の粉が落ちた様なものであつた。人々は物凄いい叫喚を立て乍ら、ありと有らゆる廣場や往來や市場を充したのである。

「王を抛り出してさへ！ 太守を追ひ出してさへ、やつつける、佛蘭西人を！ やつつける！ モロー萬歳！」

トリヴルチオの手勢は、三十萬の市民に對抗すべく餘りに少數であつたので、彼は一時寺院の鐘樓に使はれてゐた塔の上へ大砲を据ゑて、銃口を群衆の方へ向けさせ、合圖と同時に發射する様に命じたが最後に今一度和解の試みをして見ようと思つて、人民の方へ進んで出た。併し暴徒等は彼を殆ど殺さぬばかりの目に會はせて、ラトッシャの中へ追ひ込んだ。若しクルセンジを隊長とした瑞西の傭兵隊が、城塞の中から援助に出て來なかつたら、彼は其處で最後を遂げたかも知れなかつたのである。

放火、殺人、掠奪などが始つた。暴徒の手に落ちた佛蘭西人や、佛蘭西に同情してゐると云ふ嫌疑を受けた市民などは、拷問の上死刑に處せられた。

二月一日を迎へようと云ふ夜、トリヴルチオはデスピ大尉とコデベカルに防禦を任せて、密かに城を脱け出して了つた。丁度其の夜獨逸から歸つたモローは、コモの市民から非常な歓迎を受けた。ミランの市民は救世主の如く彼を待ち設けてゐた。

レオナルドは最近動亂が始つて以來、近所の家が二三軒、砲弾で破壊されたのに恐れをなして、自分の家の穴藏へ居を移した。そして其處へ巧みに下水管を敷いたり、煖爐を設けたりして、幾つかの住みよい室をしつらへた。丁度小さな要塞か何ぞの様に、彼は此處へ繪だの、下圖だの、原稿だの、すべて家の中にある大切なものを運んで來た。

此の頃彼は愈々ツェザール・ボルジャに仕へようと決心した。アガピトと締結した契約書の條文に依れば、遅くとも千五百年の夏までには、ロマニヤへ着いて居なければならなかつたのであるが、そこへ向けて出發する前に、舊友のジロラモ・メルチの許へ立寄つて、ミラン附近のヴプリオなる友の靜かな別荘で、戦争と叛亂に充ちた危険な時期を過さうと思つたのである。

二月二日聖燭節の當日、レオナルドの許ヘルカ・パチオリが駈付けて、城内は大洪水だと告げた。それは佛蘭西方に仕へてゐたミラン人のルイジイ・ダポルトが叛徒の側へ走つて、城塞の濠に通ずる水門を夜中密かに開いたのである。水は外へ溢れてロケッタ城外の公園に在る水車小屋を浸し、火薬、油、パン、酒其他の食糧を貯藏してある地下室へ侵入したので、若し佛蘭西が

やつとの事でその幾部分を救ひ出す事が出来なかつたら、彼等はルイジイの豫定通り、饑饉の爲めに降伏の止む無きに至つた筈なのである。洪水の際域に隣接してゐる、エルチル門郊外の低地を流れる堀割が岸を溢れて、デレ・グラチエ寺院の立つてゐる沼澤地を浸したのである。僧のルカは畫家に向つて、若し水の爲めに「最後の晚餐」が傷む様な事は有るまいか、心配で堪らないから、繪が無事か何うか行つて見るように勧めた。

レオナルドはわざとらしい無頓着な調子で、自分は今忙しいし、「最後の晚餐」の事は少しも心配はない。あの繪は濕氣の爲めに傷む氣遣ひの無い程高い處にある、と抗辯したが。けれどもパチオリが立去るや否や、レオナルドは僧院をさして駈け出した。

食堂へ入つて見ると、煉瓦の床の上に汚い水溜りが出来てゐた——洪水の痕なのである。邊りには濕けた匂が漂つてゐる。一人の僧の話に依ると、水は四分の一エルまで上つたとの事である。

レオナルドは「最後の晚餐」を描いてある壁に近寄つた。

繪具は一見した所、前と變りない様であつた。

普通の壁畫に使ふ水繪具と違ふ透明な優しい此の油繪具は彼自身の發明であつた。彼は土臺の壁をも特殊の方法で塗り上げた。先づ柏楨漆とオリブ油を混ぜた粘土の層を作り、その上

へ更に乳香と松脂と石膏を塗つたのである。経験のある畫工達は、低い沼地の上に建てられた濕氣のある壁の上へ、油繪具で描くのは保が悪いと留めたけれど、レオナルドは持前の新しい試みや、藝術上の未知の境地を開拓するのが好きな性質の爲めに、他人の忠言や警告に耳も貸さず、さ強情を張り通したのである。水繪具で壁畫を描くのを厭がつたには、もう一つ別な理由があつた。外でもない塗り立ての濡れた白壁に畫を描くには、彼の不得意とする敏速と決斷力が必要であつた。

「懷疑のない畫家は大なる成功を望み難い」と、彼は常々斷言して居た。彼に取つて必要な此の懷疑、動搖、訂正、摸索、極端に鈍い製作の進行——かう云ふものは油繪に於てのみ可能なのであつた。

壁に屈み込み乍ら、彼は廓大鏡を透して繪の表面を検査し始めた。突然左の下の端——使徒達の坐つてゐる卓に掛けた卓布の下に當つて、パルトロメオの足許の邊に、彼は小さな龜裂を發見した。そして直ぐ其傍には、やゝ色の褪せた繪具の上に、丁度霜か天鵞絨の毛の様に白い微が浮いてゐるのであつた。

彼の顔はさつと蒼くなつた。けれど直ぐ心を取り直して、尙一層注意深く検査を續けた。

濕氣の爲めに粘土の下塗りが歪んで壁を離れ、石膏の上塗りを薄い繪具の表皮と一緒に掻げ

たので、殆ど肉眼を以て見る事の出来ない位の微細な龜裂が生じて、煉瓦の氣孔から吹き出す硝石分を含んだ濕氣がその間から滲み出るのであつた。

「最後の晩餐の運命は決しられた。繪の具は四五十年位保つから、畫家自身その凋落を見る事はないとしても、それにしても、彼の最大傑作が減びたと云ふ、恐しい眞實に對しては疑をさし挟む餘地が無かつた。

食堂を出る前に、彼はもう一度最後に基督の顔を見上げた。と、まるで今始めて見たかの様に、此の作品が自分に取つて何れ丈貴重な物かと云ふ事を、不意にはつきりと了解したのである。

「最後の晩餐」と巨像の滅亡と共に、彼を生きた人間と結び合せてゐた最後の縁が切れた。それは假令近しい人間でないとしても、遠い人間との連鎖だつたのである。今や彼の孤獨は一層望みのない物となつた。

巨像は粘土の埃となつて風に吹散つて了つた。基督の顔の描かれてゐる壁の上には、鈍い鱗の様な剝がれ掛つた繪具が微に蔽はれて居る。すべて彼が自分の生命とした物が、悉く影の様に消えかゝつて居るのであつた。

彼は家へ歸つて穴藏へ下りた。アストロの臥てゐる室の傍を通り掛つた時、彼は一寸足を停めた。ペルトラファイオが病人に冷濕布をしてゐた。

「又熱かね？」と師は訊いた。

「え、謙語を言つてゐます」

レオナルドは繻帯を締めようと思つて屈み掛つた。そして早口な連絡のない呟きに耳を傾けるのであつた。

「もつと高く、もつと高く、眞直に太陽を目指して昇るのだ。翼が焼けなければいゝが。おや小さな奴がやつて来た！ 何處から来たのだ？ お前の名は何と言ふのだい？ 機械學だつて？ 悪魔の事を機械學と言ふなんて、俺は今迄聞いた事がない。何だつてさう齒を剥き出すのだ？ ……もういゝから止めるよ。一寸冗談を言つた丈なんだ、もう澤山だよ。あゝ引つ張る、引つ張る……堪らない、待つて呉れ——一寸息をつかして呉れ……あゝ俺は死ぬ！」

胸の中から捲ぎ取つた様な恐怖の叫びが、彼の口から發しられた。彼は無限地獄の中へ墮ちて行く様な氣がしたのである。

やがて又彼は早口に呟き始めた。

「いや、いや、先生を笑はせないで呉れ！ 俺が悪かつたのだ。先生は未だ出来上つて居ないと仰つたのだ。もう駄目だ。俺は先生の顔に泥を塗つたのだ、先生の顔に泥を……おい聞えるかい？ あれは一體何だ？ あゝ分つた、彼奴等の事を言つてるのだ。あの小さな奴の事

だ。澤山の悪魔の中でも一番厭な、機械學の事なんだ！……」

「悪魔またイエスをエルサレムに伴れ行き、」と病人は丁度教會の讀誦のやうに歌でも唱ふ様な調子で讒語を續けた。「聖殿の頂きに立て、曰ひけるは、爾もし神の子ならば此處より己が身を投げよ。そは神その使ひらに命じて爾を護らせん、爾が足の石に觸れざる様、彼等手にて扶ふべしと録さる……あゝ所で俺は基督が機械學の悪魔に言つた返事を忘れて了つた？ チオヴンニ、君憶えてゐないかね？」

彼は殆ど意識ある人の様な目付で、ベルトラフィオを眺めた。

此方は病人が依然として讒語を言つてゐるものと思つて、黙つてゐた。

「覚えてゐない？」とアストロは追窮した。

チオヴンニは彼の氣を落着かせる爲めに、路加傳第四章第十二章を讀んでやつた。

「イエス答へけるに、主たる爾の神を試むべからずと云ひおけり」

「主たる汝の神を試むべからず！」何とも言へない情の籠つた調子で病人は繰返したが、又直ぐに讒語を言ひ始めた。「青い青い空、雲の影もない……太陽も無い、永久に無いだらう——上にも下にも青い空ばかりだ。翼も何も要りやあしない。あゝ空中をふうわりと墮ちて行くのは、何と言ふいゝ心持だらう。これを先生に知らせて上げ度いなあ！」

レオナルドはちつと見乍ら考へた。

「私の爲めだ。私の爲めに此の男も一生を臺なしにして了つたのだ！ 私は此の小さき者の一人を誘惑した。チオヴンニと同じ様に此の男をも迷はしたのだ！」

彼はアストロの熱い額に手を當て、見た。病人は次第に靜まつて、うと／＼と眠り始めた。

レオナルドは地下の仕事場へ退いて、蠟燭を點け、數學の計算に没頭した

翼の設計上再び謬りに陥るのを避ける爲めに、彼は波即ち水流の法則を基礎として、風即ち氣流の法則を研究するのであつた。

「若し同じ大きさの石を靜かな水の中へ、若干の距離を隔て、投げたならば、」と彼は日記の中にかう書き込んだ。「水面には二つの圈が生じて、次第々々に擴がつて行く。此處に一つの疑問が生ずる。二つの圈が次第に擴がつて遂に相接觸した時に、一つの圈が今一方の圈を切り破つて、その中へ入るであらうか、それとも二つの波動はその接觸點に於て、相等しき角度をなして互に反撥するであらうか！」

自然は此の機械學の問題を譯なく解決して了つた。其の無造作な點がすつかり彼の氣に入つたので、彼は横の方の欄外へかう書き添へた。

「何と言ふ美しい微妙な問題であらう！」

「余は實驗に基づいて次の様に答へる」と彼は書き續けた。「二つの圈は、石の落ちた點をそれぞれ自己の不變なる中心點として、融合し混亂する事なく、互に相交するものである」

彼は數學上の計算をして見た後、數學は理知の内部的必然性の法則に依つて、機械學の自然的必然性を證明する、と言ふ事を確信したのである。

時は一刻々々と飛ぶ様に過ぎ去つて、もう晩になつた。

食後弟子達と雑談し乍ら一休みして、レオナルドは再び仕事に取り掛つた。

以前經驗した事のある鋭い、明晰な心の状態に依つて、彼は自分が偉大なる發見に近づきつつあるのを直感した。

「野の風が麥の穂波を追うて走るのを見よ。穂波は後から／＼と疾驅するけれど、麥の莖は曲つた儘ちつと不動の姿勢を保つてゐる。これと同じ理で波も動かざる水の表面を走つて行くのである。是等投げられたる石又は風に依つて生ずる漣波は、水の運動と言ふより寧ろ戰慄と呼ぶべきである。試みに、漸次擴つて行く水の圈に、一本の藁を投じて見ると、只ゆら／＼と揺れるのみで動かないのを發見するであらう。これに依つて右の眞實を確かめる事が出来る」

藁の實驗は嘗て音波運動の法則を研究する時、彼の試みた類似の實驗を憶ひ起させた。彼は日記の頁を幾枚かめくつて、次の様な覺書を読み下した。

「一つの鐘を打つとそれに隣る今一つの鐘が、微かな顫慄と低い呻きを以て之に應じる。琵琶の絃を鳴らせば、それに隣る今一つの琵琶で、必ず同音の絃が響を發する。而もその絃の上に藁屑を載せたなら、その藁屑がびり／＼と慄へるのを發見するであらう」

名狀し難い心の興奮を覺えながら、彼は此の相異なる二つの現象の間に、何か連繋があるのを感じた。一つは漣波の上に浮び、一つは共鳴する絃の上に載せられ乍ら、慄へ戦く二本の藁屑の間に、未だ發見せられざる大きな認識の世界が潜んでゐるに相違ない。

と不意に電光の様な目眩しいばかりの想念が、彼の腦裡に閃めいた。

「何方の場合にも同じ機械學の法則が働いて居るのだ！ 投げた石から起る波と同じ様に、音波も矢張り空中を擴つて行つて、音の生れた場所を中心とした儘で、混亂する事なしに相交するのだ。所で光線は何うだらう？ 反響が音の反射であるのと同じ理窟で、鏡の中に於ける光の反映は、即ち光の反響なのだ。つまりあらゆる力の表現の中には、機械學の唯一の法則が働いて居る。第一の動力よ、汝の唯一なる意志の正しさよ。落下の角度は反射の角度に相等しい」

彼の顔は蒼靄め、その目は燃えて居た。彼は今又もかう言ふ事を感じたのである——自分は嘗て先人の窺つたことの無い深淵を、恐しい程近々と覗き込んで居る。そして自分の此の發見

は、若し實驗に依つて證明されたならば、機械學に於てアルキメデス以來の最も偉大なものとなるに相違ないのだ。

二月前グザド・ベラルヂ氏から手紙を貰つて、つい近頃歐羅巴へ傳つたばかりのヴスコ・ダガマ探検旅行の報に接し、彼が二つの大洋を渡つて、阿弗利加の南端を迂回し、印度へ赴く新航路を發見した事を知つた時、レオナルドは美望の念を感じた。けれども今彼はコロムブスよりもヴスコ・ダガマよりも、もつと大きな發見をした、もつと神祕的な新天地の地平線を認めたと、言ふ權利を有つて居る譯である。

壁の向うで病人の呻き聲が聞えた。畫家はちつと耳を澄して居る中に、自分の失敗の數々を憶ひ出した——騎馬像の無意味な破壊、「最後の晚餐」の無意味な滅亡、アストロの愚かしく而も恐しい墜落——

「一體此の發見も私のすべての仕事と同じ様に、痕形もなく空しく亡びて了ふのだらうか？一體誰一人として私の聲を聞き付けるものが無いのだらうか？永久に私は今と同じ様に只一人地下の暗の中で、人間の翼を夢みながら生き埋めにされるのだらうか？」  
併しかうした想念も、彼の心中の悦びを消し去る事は出来なかつた。

「一人でも構はない。暗黒と沈黙と忘却の中に取り残されても構はない。永久に誰一人知らなく

つても構はない。私は知つて居るのだ！」

何とも言へない力と勝利の感情が彼の心を充した。彼が生涯渴望して止まなかつた人間の翼は、もう既に作り上げられて、彼を空の高みへ擡げて居るかのやうであつた。

彼は地下にちつとして居るのが窮屈に感じられて、廣々とした處へ出て新しい空氣が吸ひ度くなつた。

家を出ると、彼は中央寺院の廣場をさして歩き出した。

## 七

よく晴れた月の夜であつた。家々の屋根の上には煙を罩めたどす赤い、火事の空明りが明滅して居た。町の中心たるプロレトの廣場へ近づくに隨つて、群集は益々多くなつて來た。時にはコバルト色の月明り、時には眞赤な把火の光の中に、狂憤の爲めに歪んだ人々の顔が浮み出したり、赤十字をつけたミラン共和國の白い旗や、角燈を括りつけた棒や、鐵砲や、火繩銃や、戟や、棍棒や、槍や、草刈鎌や、又竿や、棒ぎれなどがちらついたりした。人々は蟻の様に群がり乍ら、樽板を合した上に鐵の籠を箆めた、古い大砲を曳く牡牛共に力を貸して居る。警鐘ががんと鳴つて、大砲は物凄く轟きを發してゐた。要塞内に閉ち籠つた佛蘭西の傭兵

達が、ミランの町々を砲撃してゐるのであつた。箇城の人々は自分達が降伏するより先に、市中に一軒として満足な家を残しては置かぬ、と豪語してゐた。鐘の響きと大砲の轟きには、止み間のない群集の叫喚が交るのであつた。

「やつつける、佛蘭西人をやつつける！ 王なんか押つ抛り出して！ モロー公萬歳！」

レオナルドが見た一切の物は、丁度恐しい而も馬鹿げた夢の様であつた。

東門に近いプロレットの魚市場で、年の頃十六ばかりらしい、ピカルチャ生れの少年鼓手が市民の捕虜となつて、絞刑に處せられる所であつた。彼は壁に凭せ掛けた梯子の上に立つて居た。愉快な道化者で金箔繻のマスカレロが、死刑執行人の役目を勤める事になつた。少年の頸に繩を掛け、指で軽く頭を叩きながら、道化した物々しい調子でかう言つた。

「神の奴僕たる佛蘭西歩兵小藪飛越之助、今回麻頸飾の騎士に編入せらるるものなり。父と子と聖靈のみ名に於て！」

「アーメン！」と群衆が和した。

鼓手は自分が何うなつて行くのか、よく分らないらしい様子で、今にも泣き出さうとして居る子供の様に、ぼち／＼と忙しげに目を瞬き乍ら、體をもぞ／＼と動かしては、細い頸を彼方此方廻して、繩の工合を直すのであつた。奇妙な微笑が彼の唇を去らなかつた。が突然最後の

一瞬間に、彼はふと放心状態から眼醒めたものの様に、見る／＼蒼靄めて行く憎えた様な美しい顔を、群衆の方へ振向けながら、何やら哀願しようとしたが、群衆がわつと咆哮の聲を發したので、少年は諦めた様に弱々しく片手を振つて、懐から銀の十字架を取り出した。それは姉か母の贈物らしく、水色の紐がつけてあつた。彼は忙しげにそれを接吻して十字を切つた。マスカレロは彼を梯子から突き落して、愉快さうに叫んだ。

「さあ、麻の頸飾の騎士、一つ佛蘭西の踊は何う云ふ風にやるのか教へて呉れ！」

一同のどつと笑ひ崩れる中で、少年の體は把火掛けの釣にぶら下つて、まるで本當に踊でも踊る様な恰好をし乍ら、致死期の痙攣にびく／＼と慄へるのであつた。

幾歩か行き過ぎた時、レオナルドはぼろ／＼の着物を着た一人の老婆を見付けた。此女はたつた今砲弾の爲めに壊されたらしい、古い小家の前なる往來に立つて、臺所道具や、羽根布團や、枕や其他の家財が堆く積まれた間で、露はな骨ばつた兩手を差し伸しながら、悲鳴を振り上げるのであつた。

「おーい、おーい、おーい！ 助けて呉れ！」

「伯母さん一體何うしたのだね？」と靴屋のコルボロが訊ねた。

「うちの子が壓し潰された！ 寢床の中で寢て居ると……床が落ち込んで了つたのだ……若し



かしたら未だ生きてるかも知れない……おい、おい、おい！ 助けて呉れ！……」  
 大きな鐵の砲弾がひうと甲高い呻き聲と共に空気を劈き乍ら、傾いた小家の屋根の上へ落下した。梁がめり／＼と裂けて、砂塵がばつと柱の様に舞ひ上つた。屋根はその儘どつと崩れ落ちて、老婆も鳴りを鎮めて了つた。

レオナルドはラトッシャ宮殿へ近づいた。オジイ露臺の眞向ひに軒を並べた兩替店の傍で、バギヤ大學の學生らしい青年が、腰掛の上に立つて講壇の代りにし乍ら、人民の尊嚴、貧富平等暴君排斥などと云ふ様な事を滔々と辯じて居た。群衆は疑はしげな態度で聞いて居た。

「市民諸君よ！」と大學生はナイフを振廻し乍ら叫んだ。此小刀は不斷鷲ペンを削つたり、牛の脳髓で拵へた白い腸詰を切つたり、郊外の森の楡の木に矢が心臓へ突き立つた畫を描いて、その傍へ化生の女の名を刻むなど、すべて平和な用向を辯じてゐたものであるが、彼はそれを今ネメシス(後略)の匕首と呼んで居た。「市民諸君よ、自由の爲に死なうではありませんか。須らくネメシスの匕首を暴君の血に染めるべしです！ 共和國萬歳！」

「一體あの男は何を出鱈目言つてるのだ？」と言ふ聲が群衆の中で聞えた。「我々はよく分つてゐるぞ、貴様等が腹ン中で何んな自由を企らんでるか、よく分つてるんだぞ、謀反人め、佛蘭西の間諜め！ 共和國なんか糞を喰へだ！ モロー公萬歳！ 謀反人を打ン撲れ！」

辯士がシセロや、タシタスや、リギウスなど古典的な例證を引き乍ら、自分の思想を説明し始めた時、人々は彼を腰掛から引摺り下して、突き倒し乍ら、

「そら、これが貴様の自由の報いだ、これが貴様の共和國の罰だ！ さうだ、さうだ、皆うんと此奴の頸筋をどやし付けて遣るがい！ やい畜生、巫山戯るない、そんな手に乗つて堪るものか！ 正當の王様に對して謀反を起させようなどと、大それた考へを起すとかう云ふ目に會ふのだぞ！」と言つては撲り付けるのであつた。

アレンゴの廣場へ出た時、中央寺院の尖塔や哨樓がまるで鐘乳石の様に林立し乍ら、蒼い月光と赤い火事明りと、二重の光線を受けてゐるのが、レオナルドの目に入つた。

大僧正の宮殿の前で、丁度死體を山と積み上げた様に見える群衆の中から悲鳴が聞えた。

「あれは何だね？」憎えた様な、人の好い、沈んだ顔をして居る年取つた職人に向つて、畫家はかう訊いて見た。

「あの連中のする事が分るものですか！ 自分でも何をしてるのか分りやしないんでさあ。何でも佛蘭西人に抱き込まれた間諜だとか言ふんですよ。あの人は市場牧師のチャコボ・クロットと言ふ人でしてね、毒の入つた食物を人民に食はしたと言つて責めてるんですが、多分あの人次やありまてまいよ。兎に角手當り次第に誰でも構はずぶん撲るんでさあ。あゝ恐しい事だ、

主イエス基督様、何うか私達罪深い者をお赦し下さいまし！」

人間の體の重り合つた中から、硝子吹きのコルゴリオが、長い棒の先に血みどろの首を突き刺したのを、戦利品か何ぞの様に振り廻し乍ら飛び出した。

餓鬼大將のファルファニキオは雀躍りし乍ら、彼の後ろから駆け出した。そして首を指さしながら喚くのであつた。

「犬は犬の様な死に態をするのが當前だ！ 裏切人はみんなかう言ふ目に合ふのだ！」

老人は恭しげに十字を切つて、禱りの言葉を發した。

「民の怒りを免れしめ給へ！」

城の方から喇叭の響き、太鼓の音、小銃の爆聲、兵士等の突撃の聲などが聞えた。此の瞬間の城の堡壘から大地も轟く様な砲聲が聞えて、町全體が崩れ落ちるかと思はれた。それは佛蘭西の Margot la Folle 獨逸の die Tolle Grete (共に狂せる女の意)と呼ばれてゐる、有名な鑄銅の巨砲が發射せられたのである。

砲弾はボルゴ・ノブ川の對岸で、炎々と燃えて居る家へ命中した。火の柱が夜空に沖して、廣場は赤い光に照らし出され、靜かな月の輝きは一時に暗くなつた。

人々は恐怖に襲はれ乍ら、黒い影の様に右往左往に馳せ交ひ乍ら、周章てふためくのであつた

レオナルドはかうした人間の幻影をちつと眺めて居た。

いつも彼が自分の發見を想ひ起す度に、靜かな音響と光の波が、その發生の場所を中心として、混亂する事なく相交又し乍ら、まるで水に石を投げて生ずる漣波の様に空中を擴つて行く有様が、火焰の輝き、群衆の叫喚、警鐘の亂打、大砲の轟きなどの中に感じられるのであつた。すると何とも言へぬ偉大な悦びが彼の心を充した。人間は如何なる力を以てしても、目に見えぬ無限の波の、目的を持たぬ、諧調に充ちた遊戯を妨げる事が出来ない、落下の角度は反射の角度に相等しと云ふ、公平な機械學の法則が、唯一なる創造主の意志の如く、すべての物の上に君臨してゐる、といふ事を悟つたのである。

彼が嘗て自分の日記に記し、其後も幾度となく繰返した言葉が、再び彼の胸に響いた。

「おゝ第一の動力よ、驚くべき汝の公平さよ！ 汝は如何なる力からも、必然なる運動の秩序と性質を奪はうとしない。おゝ神の如き必然性よ。汝はすべての結果をして、最も短少なる道に依つて流出せしめる」

狂せる如き群衆の間に交りながら、畫家の胸には永遠なる觀照の靜けさがあつた。丁度火事の空明りの上に靜かな月光が照つてゐる様に。

千五百年二月四日の朝、モローはボルタ・ノブ門を経てミラノ市へ乗込んだ。

その前日レオナルドは、メルチの別墅ヴプリオへ向けて出發した。

六〇

八

ジロラモ・メルチは嘗てスフォルツッの宮廷に仕へてゐたが、十年前に若い妻が死んだ時、彼は宮廷を捨てて、ミランから馬車で五時間ばかりの距離を隔てて、東北の方アルプスの麓に位した、閑寂な別墅に引き移つて了つた。そして浮世の浪風を他所に、自ら畑を耕したり、大好きな學術や音樂の研究に身を委ね乍ら、哲學者らしい生活を始めたのである。世間の噂では、メルチ氏はあの世から亡き妻の佛を呼び出す爲めに、魔術を學んでゐるとの事であつた。

鍊金術師のガレオット・サクロボスコと、僧侶で數學者を兼ねたルカ・パチオリとは、度々彼の家に客となつて、プトレミオの思想や、天體の音樂を司つてゐるピタゴラスの數理などの議論で、夜を過したものである。併し主人に取つて何よりも一番の楽しみは、レオナルドの訪問であつた。

マルテザナ運河の設計をしてゐる頃、畫家はよく此の地方へ出掛けて來て、別墅の美しい景色に惚れ込んで了つた。

ヴプリオはアツダ川の峻しい左岸に位して、運河は川と庭の間に引かれて居た。此處ではアツダ川の急な流れが多くの堰に遮られて、まるで満潮時の海鳴りの様な水聲が、絶間なく聞えるのであつた。風化されて黄色くなつた砂岩から成つてゐる峻しい兩岸の間を、アツダ川は冷い青い波を立て乍ら、奔放不羈な姿を示してゐる。直ぐ其の傍には鏡の様に滑らかな静かな運河が、アツダ川と同じ青い山の水を流へてゐたけれど、それはもう押らされて静められた、眠たげな重たい水で、眞直な岸の間を音もなく流つて居た。此の對照が畫家の目には、深い意味に充ちてゐる様に思はれた。彼は人間の理智と意力の創造物——彼自身の創造物たるマルテザナ運河と、その姉妹たる野性的な誇りに充ちたアツダ川とを比較して、何方がより多く美しいか卒かに決する事が出来なかつた。彼の胸には二つの流れが何方も同じ様に親しみがあつて、何方も同じ様に理解出来るのであつた。

庭の中なる小高い廣場からは、ベルガ、モトレギリオ、クレモノ、ブレンシャなどの間に介在した、ロムバルヂヤの緑野が見渡された、夏になると目の届かない程廣い草原から、乾草の香りが漂つて來た。肥沃な耕地では勢よく延びた裸麥や小麥が、枝と枝を交へた果樹の頂きまで蔽ひ隠しながら、その穂先が梨や、林檎や、櫻實や、李などと接吻して、さながら平野全體が大きな花園か何ぞの様に思はれた。

北の方にはコモの連山が黒く見えて、その上にはアルプス連山の支脈が半圓形をなして聳え

てゐた。更に又其上には黄金がかつた蔷薇色の雪を頂いた高峰が雲の中で輝いて居るのであつた。

隅々隈々残る方なく人工を加へられた楽しいロムバルヂヤの平原と、野生的な荒寥たるアルプス連山の大地を比較し乍ら、レオナルドは此處でも亦静かなマルテザナ運河と、物凄く荒れ狂ふアッダ川との間に感じた様な、甚しい對照と同時に完全な調和を見出したのである。

ルカ・パチオリと鍊金術師のサクロボスコも、彼と共に此の別荘に泊つて居た。鍊金術師はエルチエル門附近なる住家を、佛蘭西軍に破壊されて了つたのである。併しレオナルドは常に孤獨を撰んで、彼等を避ける様にして居た。が其の代り主人の息子の幼いフランチェスコとは、直ぐ仲好しになつて了つた。

まるで女の子の様に臆病で含羞やの少年は、長い間彼を恐れて居たが、或時父の吩咐で彼の室へ入つた時、ふと様々な色の違つた硝子が目に付いた。それは畫家が補充色の法則研究に使つて居たのである。レオナルドは少年に硝子を目へ當てて見ると勧めた。此の戯れがすつかり少年の氣に入つて了つた。黄、淺黄、赤、紫、又は綠と、目に當てる硝子の色が變るに隨つて、見馴れた物が不思議な物語りめいた姿を呈して、時には陰鬱な、時には悦ばしげな、時には敵意ありげな、時には愛想のいゝ表情を浮べるのであつた。

レオナルドの今一つの發明も彼の氣に入つた。それは暗箱である。白い紙の上に生きた景色が現れて、水車場の車がくる／＼廻つてゐる様子や、鴉の群が教會の上で舞つてゐる様や、薪割のペボの灰色驢馬が、柴を山の様に背負はされて、汚い路をとぼ／＼と歩みを運んでゐる姿や、ポプラの梢が風に靡いてゐる光景などが、まさ／＼と見分けられた時、フランチェスコは我慢し切れないで、歡喜の餘り手を叩いたのである。

併しそれよりも一層彼の心を擒にしたのは、晴雨計であつた。それは度盛りをした銅の環と衡の天秤に似た棒から出来てゐて、棒の兩端には蠟で包んだのと綿で包んだのと、二いろの玉が結へ付けてあつた。空氣が濕氣を含んで來た時には、綿がそれを吸ひ込む爲めに、其綿で包まれた玉が自然重くなつて下るので、天秤が一方に傾いて來る。その時銅の環に刻んだ度を勘定して、濕氣の程度を正確に計る事が出来る。所で一方の蠟は決して濕氣の侵入を許さないから、目方は依然として變りが無いのである。かう云ふ工合で天秤の移動が一日乃至二日前に天候を豫言するのであつた。少年は自分でも別に晴雨計を拵へた。そして自分の豫言が的中して、家の者が驚くのを見て有頂天になるのであつた。

隣の牧師組合の老僧ドム・ロレンが建ててゐる村の學校では、フランチェスコは學課に精を出さなかつた。羅典語の文法などは厭々ながら機械的に練習してゐた。インキで汚れた算術書の

背を見た丈で、彼の顔は直ぐべそを掻きさうになつて来た。所がレオナルドの學問はまるで別であつた。それは少年に取つて丁度昔噺の様に興味が深かつた。機械學、光學、音響學、水壓學用の器具などは、まるで生きた魔法の玩具の様に彼を牽き付けた。朝から晩まで彼はレオナルドの物語を聞いてゐた。畫家は大人に對しては物事を包み勝ちであつたが（それはうっかり何か不用意に口を辻らすと、彼等の怪しみや嘲笑を買ふと云ふ事を、よく承知してゐたからである）併しフランチェスコに對しては、何んな事でもすべて安心して、さつくばらんに話をした。彼は單に教へたばかりでなく、自分でも少年に學ぶ事が多かつたのである。「眞に誠に爾曹に告げん、若し爾曹小兒の如くなるに非ずんば、天國に入る事能はじ」と云ふ主の言葉を想ひ出し乍ら、「而して又知識の王國にも入る事能はじ」と附加へた。

その頃彼は星に關する書物を書いて居た。

寒い空にもう最初の春の息吹が感じられる三月の夜、彼はフランチェスコと一緒に別荘の屋根の上に立ち乍ら、星の運行を観察したり、月の斑點を寫したりした。それは後で又較べて見て、その輪郭に變化が起らないか何うかを、確めて見る爲めであつた。ある時フランチェスコは彼に向つて、パチオリの話に依ると星は夜光石ダイモントか何ぞの様に、水晶で出来た圓い天體に嵌められてあるので、その天體は廻轉につれて多くの星をも運動の中に卷込み、妙なる音樂を發するさう

だが、それは一體本當かと訊ねた。師はそれに答へて、若し天體がそんなに何千年の間、想像も出来ない程の早さで廻轉し續けたならば、摩擦の法則に依つて疾くに破壊されて了つた筈である。水晶で出来た天體の縁は磨り耗つて、音樂も止んで了ひ、「飽く事を知らぬ踊り好き」の天體も運動を止めたに相違ないと説明した。

それから彼は針の先で紙に穴を明けて、少年にその中を覗いて見させた。フランチェスコは星が光を失つて、無限に小さな明るい點が玉の様になつて居るのを發見した。

「此の點はみんな」とレオナルドは言つた。「非常に大きな球で、あの中には我々の住つてゐる世界より、百千倍も大きいのが澤山ある。併しそれかと言つて此の世界もあの天體に比べて、少しも劣つた詰らない物ぢやないよ。此の地上を支配してゐる機械學の法則が、あらゆる世界あらゆる天體を動かしてゐるので、人間の智慧がその法則を發見して行くのだ」

かう言つて彼は「我世界の氣高さ」を力説した。

「此の地球だつて他の星に住んでゐる人から見ると、我々があの星を見る時と同じ様に、矢張り永久に變る事のない一つの星に見えるのだ。只の明るい點に見えるのだ。」

彼の言葉の多くはフランチェスコに分らなかつたけれど、振り仰いで空を眺めた時、彼は恐しくなつて来た。

「あすこに、あの星の向うに何があるの」

「他の世界だよフランチェスコ、我々の目に見えない他の星があるんだよ」

「その又向うには？」

「又他の星があるさ」

「でもお終ひには、一番のお終ひには？」

「お終ひは無いのだ」

「お終ひは無いの……」と少年は繰返した。レオナルドは自分の手の中で、フランチェスコの手が、びくりと慄へたのに気が付いた。小さな卓の上で天文器械などの間に燃えて居る燈明の、ちつと揺わつて動かぬ焰に透して、彼は少年の顔が不意に蒼くなつたのを認めた。

「それぢや一體何處に」次第に不審の募つて来る様な風で、彼は靜かにかう言つた。「一體何處に天國が在るの。レオナルド叔父さん？ 天使や、聖者や聖母や、玉座に坐つてゐられる父なる神や、神の子や、聖靈などは何處にあるの？」

師はそれに對して、神は到る處にある、一粒々々の砂の中にも、太陽や宇宙の中と同じ様に存在して居ると答へようとしたが、その子供らしい信仰を破るのが痛ましくなつて、其の儘口を噤んで了つた。

## 九

木々の芽が開き始めた時、レオナルドとフランチェスコとは、終日別荘の庭か又は近隣の森の中で時を過し乍ら、復活して行く植物の生活を觀察した。時とするに畫家は何か木や花を寫生し乍ら、決して何處にも二度と繰返される事のない、特殊にして唯一の佛を捉へようと、まるで肖像でも書く様に苦心するのであつた。

彼はフランチェスコに向つて、木の幹の横断面に現れてゐる輪の數に依つて、木の年齢を知る事が出来るばかりでなく、その輪の一つ一つの厚さに依つてその年の湿度を知る事も出来るし、又枝が何の方角に向いて生えてゐたか、と云ふ事さへ決定する事が出来る。何故と言つて、北の方へ向いた年輪は一層厚くなつてゐて、木の心は何時でも日に暖められる南側へ寄つてゐるからだ、とかう云ふ様な事を説明して聞かせた。

又かう云ふ事も話して聞かせた。春は木の汗が幹の内部にある緑色の甘皮と外皮の間に集つて、その皮を次第に厚くし、押擠げ、皺を寄せて行き乍ら、前の年の裂目の中に、一層深い新しい裂目を拵へ、かうして木を大きくして行くのである。若し枝を切るとか皮を剝ぐとかしたち、治療の力を持つた生活力が、滋養に富んだ汗を非常に多量にその傷ついた箇所へ引寄せ

ので、その結果傷口の癒えた痕は、皮が厚くなるのである。此の汁の集つて来る勢は非常に強烈なもので、治療の目的を達した後も急に止める事が出来ないで、傷口から上の方へ上つて行き、さながら沸騰した水の泡の様な、ごつ／＼とした瘤状突起となつて外部に現れるのである。

レオナルドは只科學的明晰のみ志し乍ら、冷たく素氣ない様に感じられる位、控目な調子で自然を語つた。春の植物の優しい生活を悉く説明する際にも、「枝と幹との角度は、枝が若くて細い丈け、益々鋭くなるものだ」とまるで生の通つてゐない機械の話でもする様に、冷静な調子で定義するのであつた。樅、松などの針葉が結晶體のやうに正確な、圓錐形をして並ぶ神祕な法則を、彼は抽象的な數學に歸納した。

けれどかうした冷淡無關心な態度の下から、生きとし生きける物に對する愛が潜んでゐるのを、フランチェスコは直感した。自然が明るみを遮らないやうに、又莖を傳つて流れ落ちる雨の雫の邪魔をしないやうにと、故意第六の上葉の下へ置いた、赤ん坊の顔の様に萎びた憐れな若葉に對しても、手を合して祈る様に、木陰から太陽の方へ差延した古い逞ましい枝に對しても、まるで熱した生血の様に、傷口を癒さうとして四方から一處へ流れ集まる植物の液汁の力に對しても、此の愛は一樣に隔てなく注がれるのであつた。

時々彼は深い森の中に立止つて、去年の枯葉の下から青い草の芽が覗いて居る様子や、未だ

開き切らぬ雪割草の花の中へ、冬眠の爲めに弱つた蜜蜂がやつとの事で這ひ込んでゐる様子などを、長い間微笑を浮べ乍ら見詰めるのであつた。邊りはしんと静まり返つて、フランチェスコは自分の心臓の鼓動が聞える様な氣がした。彼はおづ／＼と目を上げて師を眺めた。太陽は、半ば透明な木の枝を透して、レオナルドの亞麻色の髪や、長い鬚や、垂れ下つた濃い眉などを照らし乍ら、彼の頭を光輪で包んで居る様であつた。彼の顔は穩かで美しかった。かう云ふ瞬間の彼は、葉が延びたり、地下の泉が囁いたり、神祕な生の力が目醒めたりする聲に耳を澄す、古代の牧羊神に似通つてゐた。

一切は彼に取つて生ある物であつた。人間の體が小さな宇宙である様に、宇宙は一つの偉大なる體であつた。

彼は一滴の露の中に、地球を包む水の世界との類似を見出した。又マルテザナ運河の上流なる、ヴブリアノ附近のトレッツォの水門で、瀑布や渦の研究をしながら、それを房々と渦巻く女の髪に比較したのである。

「御覽」と彼は言つた。「髪の毛は二つの流れに沿うて走つて居るものだ。一つは主たる方の真直な流れで、髪は重力に曳かれて走つてゐる。今一つは反對の逆な流れで、これが爲めに髪は環の様な渦を巻くのだ。それと同様、水の運動に於ても、一部分は下流へ向けて突進するし、今

一部分は渦巻を作つたり、女の髪の様な紆餘曲折を描いたりするものだ」

異つた世界から相呼應する二つの聲と言ふか、自然界の現象に於ける共鳴音と言ふか、かうした謎の様な類似が畫家の心を牽き付けるのであつた。

虹の起原を研究し乍ら、彼は同じ様な色と色との交流が鳥の羽にも、腐つた木の根に近い停滞した水の上にも、寶石の中にも、水の表面に浮いた油にも、古い曇つた硝子にも見受けられる、と言ふ事に気が付いた。それから樹木の上や、凍つた窓硝子に現れる霜の模様の中に、彼は生きた葉や、花や、草などの類似を發見した。それは丁度冷たい氷の結晶の世界に、もう植物の生活を暗示する夢の豫感が現れて居るかの様であつた。

時々彼は遠い次の時代に於て始めて發見さるべき、新しい偉大な認識の世界に近付いて居るのを、それとなしに感じたのである。で羅紗で摩擦した磁石や琥珀の力に關して、彼は日記へ次の様に記した。「余は人間の力を以て此現象を説明し得べき方法がある、とは何うしても信じられない。磁石の力は人間に知られざる多くの力の一つであると考えへる。世界は未だ具象化されざる無数の可能で充されて居る」

或時プリアオ附近なるベルガモに住んでゐるジュド・ト・プレスチナリと言ふ詩人が、此の別荘へ客に來た。食事の時、レオナルドが自分の詩を十分賞めなかつたと言つて腹を立てた彼は、

繪畫よりも詩の方が優れて居ると言ふ議論を吹掛けた。畫家は沈黙を守つて居たけれど、詩人が餘りにむきになつて怒るのが可笑しくなつて、到頭冗談半分に駁論し始めた。

「繪畫は詩よりも高い位置を占むべきものです」とレオナルドは言つた。「それはつまり、詩人達が、少くとも現代の詩人達が人間の思ひ付で満足して居るのに反して、繪畫は神の仕事を描寫するからです。詩人は描寫と言ふ事をしないで、只他人の持物を借りて、他人の商品を商ひ乍ら記述するのです。彼等は様々な科學の生んだ古いがらくたを集めて、只捏ち上げるに過ぎません。ですから彼等を贖品商人に比較する事が出来ず……」

僧のルカ、メルチ、ガレオトなどが反駁し始めた時、レオナルドは段々吊り込まれて、もう冗談でなしに言ひ出した。

「目は耳よりも一層完全に自然に關する智識を人間に與へる。従つて見た物は聞いたものより正確です。かう言ふ理由に依つて、啞の詩たる繪畫は盲目の繪畫たる詩よりも、正確な科學に近いのです。文字の描寫に於ては、只箇々の形象が一つ／＼別々に連続してゐるに過ぎないが、繪畫に於てはすべての形象すべての色彩が、丁度合奏樂に於ける箇々の音の様に、一つの物に融け合つて居ます。それ故繪畫と音樂に於ては、詩に於けるよりも尙一層高級な調和が可能なのです。此の高級な調和の無い處には、高級な美も存在しません。例に戀する人に向つて、偉



大な詩人の書いた愛人の描寫と、その肖像畫と、何方がいゝか訊いて御覽なさい」

七二

一同は此の結論を聞いて、思はず微笑を浮べた。

「現に私はかう言ふ事件を経験しました」とレオナルドは話し續けた。「私の描いた女の顔が或フロレンスの青年にすつかり氣に入つて了つて、その繪を買ひ取つた上、その繪が聖母を描いたものだと思はせる様な徴候を、一切消して了はうとしました。それは冒瀆の恐怖を感じる事なしに、好きな繪姿を接吻しようが爲めなのです。併し良心は愛の慾望に打克ちました。彼は外に心の安靜を得る方法が無いので、その畫を自分の家から遠ざけたのであります。何うでせう詩人諸君、一つ試みに婦人の美を描寫して、これ丈けの情火を人間の心に呼び醒して御覽なさい！ 私は敢て自分の事を言ふのではありません。私には未だ／＼多くの物が不足して居るのを、自分でよく承知してゐます。私は完全の域に達した畫家の事を言つてゐるのです。實際その畫家はその觀照の力に於て、もう人間と言ふ事が出来ない位です。己れの欲する儘に、或は此の世ならぬ美の實見者となる事も出来れば、或は物凄しい、或は滑稽な、或は悲しい、或は恐しい形の目撃者となる事も出来るのです。彼は萬物の上に君臨する神の如き者です！」

僧のルカは師が自分の著述を蒐集して、印刷に附さないのを非難して、自分が適當の出版者を見付けようと迄言つたが、レオナルドは頑なにそれを拒んだ。

彼は最後まで自分の節を屈しなかつた。彼の書いた物は遂に一行も、生前印刷に附される事なしに終つた。とは言へ彼はまるで讀者と會話でもして居る様な體裁で、自分の手記を認めて居るのであつた。ある日記の初めの方で、彼は自分の手記が亂雑で、度々同じ事を繰返すのを詫びて居る。「讀者よ、余の不注意を咎むる勿れ。何となれば問題は無數にして而も余の記憶はこれを悉く包藏するの力なく、嘗て一度記したりや否やを知る事能はず、之に加ふるに余は大なる間隔を置きて、生涯中の種々なる年に記載すればなり」

或時彼は人間の精神の發達を現はす爲めに、一列に並んだ杯を描いた。それは第一の杯が倒れ乍ら第二の物を突き、第二の物は第三の物を、第三の物は第四の物と、順々に際限なく續いて行くのである。その下には「一人は他の者を突き動かす」と題銘が書いてあつた。それから又「此等の杯は人類の異なる時代と、その知識を表はすものなり」と附け加へてあつた。

今一つの畫には一本の鋤が土に食ひ込んでゐる所を描いて、「執拗なる峻嚴」と銘が附けてあつた。

彼は倒れる杯の順番が自分の所まで來るに相違ない——何時かは人が自分の叫びに應じるに相違ないと信じて居た。

彼は他の者が未だ寝てゐる時、餘りに早く暗闇の中で目を醒した人に似通つて居た。自分に

近い同胞の中に交り乍ら、一人淋しく遠い同胞の爲めに、秘密の文字を以て自分の日記を認めるのであつた。それは丁度曠野の農夫が霧深い未明に畑へ出て、「執拗なる峻嚴」を以て鋤で神祕の畝を作る様な工合であつた。

一〇

三月下旬になると、益々不穩な報知がメルチの別荘へ達し初めた。デ・ラ・トルムイル將軍の率ゆるルイ十二世の軍は、アルプス山脈を越えた。そしてモローは兵士の裏切りを氣配つて戦争を避け、迷信的な豫感に惱まされつつ、「女より以上の臆病者」となつて了つた。

戦争や外交の噂さは、遙かな弱々しいどよめきの様にプブリオの地に傳はつて來るのであつた。

佛蘭西王の事もモロー公の事も一切考へないで、レオナルドはフランチェスコを連れて、附近の丘や谷や森を徘徊した。時とすると川の流れを溯つて、林の多い山の中へ分け入る事もあつた。此處で彼は人夫を備つて發掘を試み、古い有史前の貝類や、化石した魚や海草などを探し出した。

或時散歩の歸りに二人はアッダ川の斷崖の上に生えた、古い菩提樹の下に腰を下ろして休息し

た。白楊や榆の並木の此處彼處に連つた無限の平野は、彼等の足許に展けて居た。夕陽の光の中に、ベルガモの町の歡び迎へる様な、白い家々が見透された。雪を頂いたアルプスの嶺々は、さながら空中に浮んでゐる様であつた。邊りはすべて一樣に晴れ々としてゐたが、只遙か彼方空の涯に當つて、トレギリオと、カステル・ロツツォネと、プリニャノとの間に、一團の煙が渦巻いてゐた。「あれは何でせう？」とフランチェスコが訊ねた。

「知らない」とレオナルドが答へた。「事に依つたら戦争かも知れない……ほら御覽、大砲の火らしいものが見える。佛蘭西の兵隊と味方の衝突ぢやないだらうか？」

此の二三日、かうした偶然の衝突が、次第に頻繁にロムバルチャ平原の此處彼處で見受けられる様になつた。

やゝ暫くの間、彼等は無言の儘、煙の塊を眺めてゐた。が直ぐその事は忘れて了つて、最近の發掘の獲物を取出して點檢し初めた。師は未だ土のついた、針の様に鋭い、大きな骨を手に取上げた。それは有史以前の魚の鱗らしかつた。

「今日これを見付けた深い洞穴の中で」と、彼は獨り言のやうに言ひ出した。と、彼の顔は靜かな微笑に照らし出された。「此の微妙な體の組織を持つた魚が永久の眠に就いてから、何れ丈けの國民や國王が、時の爲めに滅された事だらう！ 此の魚が辛抱強い時の爲めに骨格を破壊さ

れて、ばら／＼になつた骨を以て重い土塊を支へ乍ら、四方八方から包み隠された穴の中に臥てゐる間に、幾千萬年の時が此の世界を過ぎ去つた事だらう、何う言ふ變化がその中に生じた事だらう！」

彼は二人の前に展けてゐる平原を、手を舉げて指し示した。

「フランチェスコ、今此處でお前が見てゐる土地は、悉皆海の底だつたんだよ。そして歐羅巴も亞弗利加も亞細亞も、大部分は此の大洋に蔽はれて居たのだ。私達が此の邊の山で掘り出す魚や貝類は、アペニン山脈の頂きが大きな海の中の島だつた時分の事を證明してゐる。今鳥の飛んでゐる伊太利平野の上は、昔魚が泳ぎ廻つてゐたのだよ……」

彼等はもう一度砲火を交へた遠い煙の塊を眺めた。今その煙は無限の平野の末に恐しく小さいものに見えた。そしてまるで燈明の様な夕日の輝きを受けて、平和な薔薇色を帯びてゐるので、其處で戦争が行はれて居て、人間が互ひに殺し合つて居るなどは、夢にも信じる事が出来なかつた。

一群の鳥が空を横切つて飛び過ぎた。フランチェスコはその後を目送しながら、嘗て此の空と同じ様に碧く、且つ茫漠とした大洋の波を分け乍ら、魚の群が泳ぎ廻つてゐたと言ふ光景を、心の中に想ひ浮べようと努めた。

二人は無言の儘であつたが、併し此瞬間何方も同じ事を感じて居た——佛蘭西軍がロムバルヂヤ軍を征服しようと、ロムバルヂヤ軍が佛蘭西軍を征服しようと、ルイ王が勝たうと、モロ一公が勝たうと、敵が勝たうと味方が勝たうと、そんな事は何うでもないか？ 祖國、外交、名譽、戦争、國の興亡、國民の叛亂——すべて人間に取つて偉大に、物々しく思はれる是等すべての事は、永遠な晴々しい大自然の中に於ける、あの一團の煙に等しいではないか？ 夕日の光に溶けて行く煙の一小塊と、何等擇む所は無いではないか？

## 一一

ヴプリオの別荘でレオナルドは一枚の畫を仕上げた。それはずつと以前、未だフロレンス時分から描き初めたものである。

岩石峨々たる洞窟の中で、聖母は右手で幼い洗禮のヨハネを抱き、左手を我子基督の上へ差し延べて居る。それは人間と神とを一つの愛に結び付けようとする物の様であつた。ヨハネが恭しげに手を合せて、イエスの前に膝を突いて居ると、イエスは二本の指を以て彼を祝福して居た。幼いイエスが指を擴げてくり／＼した手を突き、ふつくりした括り目のある片足を、今一方の足の上に重ね乍ら、眞裸で裸の土の上に坐つてゐる様子から察する所、彼は未だ歩く事

が出来ないで俯つてゐるらしかつた。けれど其の顔にはもう完全な睿智が表れてゐた。其の  
智は又同時に小兒の如き單純さでもあつた。跪いた天使は一方の手でイエスを支へ、一方の手  
で先驅者を指さし乍ら、優しい奇妙な微笑を浮べて、痛ましい豫感に充ちた顔を觀者の方へ向け  
てゐる。遠く巖の間には水氣を帯びた太陽が、まるで鐘乳石の様に奇異な、此世ならぬ形をし  
た、細く鋭い、ぼうと霧の様に碧い山の上で、雨を透して輝いて居る。宛然潮水で洗はれ腐蝕され  
た様な是等の岩は、干上つた大洋の底を想はせた。そして洞穴の中にも丁度水の中の様な、碧  
い影が立罩めて居た。繪に表された地下の泉、圓い手の様な恰好をした海草の葉、薄色をした  
鳶尾の弱々しい花笠、かう云ふものはやつと肉眼で見分けられる位であつた。此の繪を見てゐ  
ると、黒い白雲石の層が圓天井の様に垂れ下つた所から、濕氣が水滴となつてぼたり／＼と靜か  
に落ち乍ら、その邊を這ひ廻つてゐる狼手草や、馬尾草などの根に吸ひ込まれる音が、はつ  
きり聞える様に思はれた。只聖母の半ば子供らしく半ば處女らしい顔が、宛然中に火を入れた  
薄い雪花石膏の様に、闇の中で輝いて居た。天國の女王は始めて古い牧羊神や水精の隠れ家とも  
思はれる様な、地下の洞穴の神祕めかしい薄暗を背景として、人間の目の前へ現れたのである。  
これは實に神祕中の神祕であつた——神 人の母が自然の中心とも言ふべき、母なる大地の懷  
ろに抱かれたのである。

それは大畫家と大學者とが共同で作りに上げた作である。陰と光の融合、植物生活の法則、人體  
の構造、大地の組織、彼の落下の角度は反射の角度に相均しい、と云ふ法則に歸納する事の出  
来る着物の變の機械學、水のやうに渦卷き流れる女の髮の機械學、是等すべて科學者が「執拗  
なる峻嚴さ」を以て研究し、公平無私な冷靜さを以て實驗し測定し、恰も生の無い屍體か何ぞの  
やうに解剖分析したものを、畫家が更に統一のある神々しい存在に歸納融合し、生ける美と變  
じ、聲なき音樂と化し、神の子の母、聖なる處女に對する神祕な頌歌を創り上げたのである。か  
うして鳶尾の花弁に現れた微かな脈も、幼きイエスのふつくらした肘の小さな凹みも、千年の  
齡を重ねた白雲石の變も、深い地下の泉の戰慄も、天使の微笑に顔へてゐる深い憂愁も、悉く  
彼は同じ様な愛を以て描き出した。

彼は一切を知り一切を愛した。何故なれば偉大なる愛は偉大なる知識の娘だからである。

## 一一一

鍊金術師のガレオット・サクロボスコは、「傳令神の杖」の實驗をしようと思つて考へ付いた。それは  
桃金娘とか、扁桃とか、羅望子とか、その他金屬と類似の性質を持つた、「天文學的樹木」で作  
つた杖の名稱であつた。是等の杖は山中で金銀銅などの礦脈を發見すると云ふ特質を持つて居

た。

彼は此の目的を持つてジロラモ氏と共に、鑛脈に富んだレッコ湖の東岸地方へ赴いた。レオナルドは此の傳令神の杖など少しも信じないで、すべて其の他の鍊金術師の世迷言と同じ様に一笑に附して居たが、それでも矢張り此の行に加つた。

カムピオネ山の麓なるマンデロ村から程遠からぬ處に、一つの鑛鑛があつた。附近の者の話に依ると、四五年前坑が崩れて、多數の坑夫が生き埋めにされた事がある。で坑の一番底では土の割目から硫黄の蒸氣が噴き出して、其の中へ石を投げ込むと、何時までも何時までも陰に籠つた音を立て乍ら落ちて行くが、其の音は次第に細くなつて消えて行く丈で、底まで届く音は決して聞えない。何故と言つてこれは底なしの坑だからであつた。

かうした物語は畫家の好奇心をそゝつた。彼は伴の人達が傳令神の杖の實驗で忙しい間を利用して、此の廢坑を研究しようと思つた。併し、村の人達は其の中に惡靈が棲んでゐると信じて居たので、案内の役を斷つた。到頭一人の老坑夫が行く事になつた。

半ば崩れた滑つこい段々のついた、暗い井戸の様な地下の道は、湖水の方向をさして下り乍ら、豎坑へ一行を導いて行くのであつた。案内人は角燈を持つて先頭に立つた。レオナルドはフランチェスコを両手に抱きながら、其の後から續いて行つた。少年は父の哀願や師の拒絶にも

屈せず、是非連れて行つて呉れと強情を張り通したのである。

地下の道は段々狭く急になつて來た。もう段々の數を二百以上も勘定したが、坂は何處までも續いて、際しが無い様に思はれた。下の方からむつとする様な濕氣が顔へ吹き付けた。レオナルドはシヨベルを以て壁を叩いて其の音に耳を傾けたり、岩石や、地層や、花崗岩の脈に光る鮮かな雲母を見透したりなどした。

「恐しいかい？」フランチェスコが鼻と自分にしがみ付くのを感じて、彼は優しい微笑を浮べ乍らかう訊いた。

「いえ、些つとも——あなたと一緒にだつたら僕恐かありません」

それから一寸無言の後、小さな聲でかう言ひ足した。

「レオナルド先生、あなたはもう間も無く去つてお了ひになるつて、お父さんが言ひましたが、それは本當なんでしょうか？」

「本當だよ、フランチェスコ」

「何處へ？」

「ローマニヤへ、ヴレンチノ公のツューザルの所へ御奉公に行くのだ」

「ローマニヤ？それは遠いんですか？」

「此處から四五日の道程だね」

八二

「四五日」とフランチェスコは繰返した。「ではもう僕達は會へないんですか？」

「そんな事はない、何うして？ 私は暇が出来たら直ぐお前方の所へやつて来るよ」

少年は一寸考へ込んだが、やがて突發的な愛情を籠めて、両手でレオナルドの頸を抱きしめ乍ら、尙一層強く身を摺り寄せつつ囁いた。

「ねえレオナルド先生、連れてつて下さい」

「飛んでもない、何を言ふのだ？ そんな事が出来るものか？ 向うでは戦争があるんぢやないか……」

「戦争だつて構やしません！ 僕さう言つたぢやありませんか、先生と一緒にだつたら怕かありませんよ！……ほら此處だつて随分恐いのでせう。だけどこれよりもつと恐い處だつて、僕怕かありやしません！……僕はあなたの下男になつて、着物に刷毛も掛ければ、室も掃除するし、馬に餌もやります。それに未だ先生知つてらしやるでせう。僕は貝を探し出す事も出来れば、草を木炭で紙に寫す事も出来ますよ。僕は何でも先生のお吩咐になる事は、みんな大人と同じやうにします……只是非僕を連れて行つて下さい。レオナルド先生、僕を棄てないで下さい」

「ぢやお父さんは？ お前はお父さんが一緒に行かして下さると思ふの？」

「行かして呉れますよ、行かして呉れますよ！ 僕、お父さんに強請ります。お父さんは好い人ですもの。僕が泣いたら厭だと言やあしません……若し行かして呉れなかつたら、僕そつと内緒で逃げ出します……只さうしてもいゝと言つて下さい……いゝでせう？」

「いやフランチェスコ、私にはちやんと分つてるよ。お前は只そんなに言つて見る丈けで、本當にお父さんの傍を逃げ出す事なんか出来やしないよ。あの人は年を取つて不合せなんだから、お前も氣の毒だと思ふに相違ない……」

「氣の毒ですとも、無論僕は氣の毒なんです……けれど先生に別れるのも辛いのです。あゝレオナルド先生、あなたはよく御存じなのです。あなたは僕を子供だと思つてらつしやるのでせう。いゝえ僕はすつかり知つて居ますよ。ボナ叔母さんはあなたの事を魔法使だつて言つてますし、学校の先生のドム・ロレンツも矢張りあなたが悪者で、あなたと一緒に居たら魂を亡して了ふと言つて居ます。一度あの人先生の事を悪く言つたので、僕うんと悪口を吐いてやりました。するとドム・ロレンツは危く僕を撲り付けなかりだつたのです。それにみんな先生を怕がつて居ます。だけど、僕怕かありません。だつて先生は誰よりも一番いゝ人なんですもの。だから僕何時も先生と一緒に居度いのです！……」

レオナルドは無言の儘、彼の頭を撫でた。と二三年前にモローの祝宴で、黄金時代に扮した小さな男の子を、同じ様に両手に抱き乍ら歩いてやつたのを、何う言ふ譯かふと想ひ浮べた。不意にフランチェスコのぱつちりした目が曇つて、唇の兩隅が下へさがつたと思ふと、彼はかう呟くのであつた。

「あゝ仕方がない。それならそれで構はない。先生が何うして僕を一緒に連れてつて下さらないか、僕その譯を知つて居ますよ。あなたは僕が嫌ひなんです……僕は……」

彼は堪り兼ねてしやくり上げて泣き出した。

「お止めよ、フランチェスコ！ よくまあ恥しくない事だねえ。それより私の言ふ事をお聴きよ、お前が大きくなつたら、私は屹度お前を内の弟子にして上げる。その時こそ二人楽しく暮して、何時までも別れやしないよ」

フランチェスコは未だ長い睫に涙の光つてゐる目を舉げて、ちいつと試すやうな目付で彼を見詰めた。

「本當にお弟子にして下さいますか？ 事に依つたら一寸氣休めにさう仰有る丈けで、後になつたら忘れてお了ひになるのでせう？」

「いやそんな事はない、私は約束するよ、フランチェスコ！」

「約束して下さるんですか。幾年経つたら？」

「さうだね、八九年経つてお前が十五年になつた時……」

「九年」と彼は指を折つて數へた。「さうしたらもう何時までも別れないんですね？」

「何時までも、死ぬまでも別れやしない」

「それなら宜い——— だけど確かに本當なんです、屹度ですね——— 八年経つたらね？」

「大丈夫、安心おしよ」

フランチェスコはにつこりと合せさうな微笑を浮べ乍ら、彼自身の發明した一種特別な方法で甘え掛つた。それは丁度猫などがする様に、自分の頬を彼の顔に押し付けるのであつた。

「ねえレオナルド先生、何うも不思議な事があるんですよ。僕一度かう言ふ夢を見た事が有ります。丁度今と同じ様に暗闇の中を手探りで、長い長い段々を降りて行くのです。而もそれが今迄も始終あつたし、これから先も亦始終ありさうな氣がする程、何處まで行つても果しが無いのです。それに僕は誰かに抱かれて居るのです。顔はよく見えないけれど、僕はそれがお母さんに相違ないと察して居ました。お母さんは僕が未だ大變小さい時に亡くなつたので、まるで覺えが無いのです。所が今此の夢が本當になりました。只おつ母さんでなくて、あなたでした。だけど僕はあなたと一緒に居ると、おつ母さんの傍に居るのと同じ位いゝ氣持です。それ

に少しも恐しくありません……」

レオナルドは無限の愛情を籠めて彼を見やつた。

少年の眼は暗の中で神祕めかしい光を放つて輝いた。彼は本當に母親に對する様な打解けた態度で師の方へ自分の唇をさし延した。師はその唇を接吻した。と彼はフランチェスコが此の接吻の中で、自分の魂をすつかり彼に捧げ盡して居る様に感じられた。

少年の心臓が自分の心臓に近く鼓動してゐるのを感じ乍ら、レオナルドは無際限の探究心に燃えつゝ、恐しい鐵坑の階段傳ひに朦朧たる角燈の影を辿つて、次第に深く地下の暗の中へ、力強い足取りで下りて行つた。

### 一三

家へ歸り着いた時ズプリオ別荘の人々は、佛蘭西軍近接の報知に驚かされた。

憤怒に燃ゆる佛蘭西王は裏切と暴動に對する報復手段として、ミランの町を傭兵達の掠奪に委ねたのである。事情が許す限りの人々、岳地方へ避難した。到る處の街道で家財道具を山の様に積上げて、泣き叫ぶ子供や女を乗せた馬車が、絶えず續いた。夜は又別荘の窓から、火事の空明りが平原の彼方に見え、ロムバルチヤ全體の運命を決すべきノブラ城

外の會戦を、今日か明日かと待設けて居た。

ある時僧のルカ・パチオリが町から別荘へ來て、い出來事を報じた。

四月の十日遂に決戦が行はれた。朝霧がノブラを出て、敵の眼前で隊伍を整へて居た時、彼の主力たる瑞西の傭兵がトリヴルチオに買収されて、戦闘に赴くのを拒絶した。モローが涙を流し乍ら、何うか自分を滅亡の淵に落さないで呉れ、若し戦争に勝つた時には、自分の領地をお前達にやるからと誓つても、彼等は頑として應じなかつた。モローは僧侶に變装して遁走しようとしたが、シャッテンハルプと云ふリュン出の一人の瑞西人が、佛蘭西兵に向つて彼を指さして見せた。でモロー公は捕へられて元帥の所へ曳かれて行つた。元帥はその爲めに三千ドゥカートドゥカートの金を、瑞西の傭兵達に與へた。それは「謀反人ユダの銀三十枚」であつた。

ルイ十二世は捕虜を佛蘭西へ護送する役目を、ド・ラ・トレムイル將軍に命じた。嘗て宮廷詩人達が「神の後始めて運命の車や宇宙の舵を左右した英雄」も、今はまるで捕へられた野獸の様に、格子造りの檻檻に入れ、荷馬車の上へ載せて曳かれて行つた。噂に依るとモロー公は獄吏に向つて、何か特別な恩恵でも乞ふ様に、ダンテの「神曲」を佛蘭西へ持つて行かして呉れと、頼んだとのことである。

ズプリオに滞在してゐる事は、一日々々と危険になつて來た。佛蘭西兵はロメリナを、獨逸



の傭兵はセプリオを、ゼニス兵はマルテザナ地方を荒らして、強盜の群の様な集團がヴプリオ附近を徘徊するのであつた。ジロラモ氏はフランチェスコと叔母のボナを連れて、キアモンナへ引越す準備に掛つた。

レオナルドはメルチの別荘に於ける最後の夜を過した。例もの辭で、彼は一日の間に見たり聞いたりした珍しい事を、すつかり日記の中へ書き留めた。

「尾が短くて翼の廣い鳥は」彼は此の晩かう書いた。「烈しく翼を羽搏き乍ら、風が眞正面に羽の下へ吹き當て、巧く體を擡げる様に廻轉する。余は今朝ベルガモへ通ずる道路の左側なるヴプリオ牧師組合の上を飛んでゐる、若い隼はやぶさに依つて此の事實を確めた。千五百年四月十四日」

それから同じ頁へ並べて、

「モローは國も財貨も自由も失つて了つた。かうして彼の事業はすべて無に歸したのである」これ以上一言も無かつた。——十六年間生活を共にした人の滅亡も、偉大なるスフォルツァ家の没落も、彼に取つては荒野を翔る猛鳥程の意義も、興味も無いかの様であつた。

## 第十一編 翼は出来る

トスカナ州のピザとフロレンスとの中間に當つて、エムポリ市から程遠からぬ、アルバノ山の西方の斜面に、ギンチ村と言ふ部落があつた——これがレオナルドの故郷であつた。

フロレンスの用事を片付けた後、畫家はツェーザル・ボルジャの許へ出發する前に、此の村を訪うて見ようと云ふ希望を起した。其處には父の兄弟なるセル・フランチェスコ、ダギンチといふ、年取つた叔父が住んでゐた。彼は絹織物の事業で、うんと金を儲けた。家族全體の中でレオナルドを愛するのは、彼一人丈けであつた。畫家は此の叔父に會つて、若し出来得るならば、セル・フランチェスコの家へ、弟子の機械工ソロアストロ・ベレトラを住はせ度いと思つた。彼は未だあの恐しい墜落の負傷が全快しないで、一生涯片輪者で終りはしないか、と云ふ虞れがあつたのである。で師は山の空氣や、村の閑寂や平穩が、醫者の治療より却つて病人に効驗があるだらう、と内々心頼みにしてゐたのである。

レオナルドは驛馬に乗つて只一人フロレンスを出發し、アル・プラト門からアルノ川の流に沿うて下つた。エムポリ市の邊りほとで、アルノ川の溪谷に沿うたビザの大街道マを棄て、さして高くない單調な丘の間を蜿つて居る、狭い村道へ入つた。

餘り暑くない雲の多い日であつた。霧の陰に隠れて、力のない散漫な光を投げて居る。白く濁つた太陽は、風が北に變る事を豫告して居た。

路の兩側の眼界が段々展けて行つた。丘陵は何時とはなく波の様に滑らかに高まつて、その後ろに山が控へて居るのが感じられた。處々の草原には春の草が疎らにつましく生えて居た。そして貧弱な穂を附けた穀物畑も、際限なく續く石垣を圍らした葡萄園も、細かく入亂れた蜘蛛の巢の様な陰を地面に投げ乍ら、正しく一定の距離を保つて立つて居る、節くれ立つた頑丈な幹をした橄欖の木も、すべて邊りの物全體が色彩の不鮮明な、灰色がつた緑色の、素朴な、貧しい、如何にも北國らしい感じを帯びて居た。處々ぼつんと淋しさうに立つてゐる禮拜堂の前や、滑らかな黄色い壁をして、格子窓を不規則に並べ、農具を入れる瓦葺の庇を見せた田舎家の前などに、もう姿を見せ始めた同じく灰色がうつた山並みの、靜かな落着いた色調を背景として、墨の様に黒く紡錘の様に圓く尖つたオリーブ杉の列が、くつきり浮き出してゐた。それは古いフロレンスの畫工が描いた畫に、よく見られる様な形の木であつた。

山は次第に高く大きくなつて行つた。絶えず少しづつ道が登りになるのが感じられた。呼吸が段々と樂になつて行つた。旅人はサント・アウザノや、カリストリヤ、ルカルヂヤ、サン・チオヴンニの禮拜堂などを通り過ぎた。

もう暗くなつて來た。雲は何時しか散つて了つて、星が瞬き始め、風は爽さわしくなつて來た。それは刺す様に冷たい、かん／＼首のする程冷え返つた北トラモンタ風の始まりであつた。

突然最後に急な山鼻を一つ廻ると、キンチ村の景が一望の下に展けて來た。其處にはもう殆ど平らな土地が無くなつて、丘は山と變り、平野は丘になつた。その中でも餘り大くない尖つた一つの丘に、狭い石造の村落がこびり附いて居るのであつた。古い塞まがの細い哨樓が疊つた空に黒々と、さも輕げに聳えて居た。

山の麓で二つの道が交叉して居る處に、壁龕の様なものがしつらへてあつて、其中には白や青の光澤つや々々しい釉藥釉薬を塗つた、土燒の聖母像が燈明に照らされて居た。子供の時分から馴染の深い此聖母の前には貧しい質素な着物をきた、村の者らしい一人の女が、背を屈めて膝を突き乍ら、兩手で顔を蔽うてゐた。

「カテリナ」とレオナルドは、自分の亡き母の名を囁いた。彼女も矢張りキンチ村の百姓娘であつた。

急な溪流に架つた橋を渡つて、彼は庭扉の間についた狭い徑を右へ取つた。此處はもう眞暗であつた。扉越しに垂れた薔薇の枝が、まるで暗の中で接吻でもする様に彼の顔へ觸つて、爽やかな香はしい匂ひを放つた。

扉の中に作られた古い木造の門の前で、彼は馬を下りて石を拾ひ上げ、鐵の銚をこつくと叩いた。それは嘗て彼の祖父アントニオの所有であつたのが、今では叔父のフランチェスコのものとなつた。レオナルドが幼時を過したダギンチの家なのであつた。

誰も返事をする者が無かつた。たゞ静寂の中にモリニ・ヂ・ガ、テ川のせうらぎが聞えるのみであつた。何處か上の方で叩の音に目を醒ました犬共が、聲々に吠え初めた。その聲に應へて庭の中から、大分老耄れたらしい番犬が、ひゞの入つた様な皺がれた聲で吠え立てた。

やつと腰の曲つた白髪の老人が提燈を持つて出て來た。彼は耳が遠かつたので、長い間レオナルドが何者やら合點が行かなかつた。けれどやつとそれが分つた時、彼は悦しさの餘り泣き出し乍ら、危く提燈を取落さないばかりの勢で、四十年前自分の手に抱いた事のある主人に飛び蒐つて、その手を接吻し始めた。そして涙の隙から、「おゝ若旦那様、レオナルド様、若旦那様！」とのみ繰返すのであつた。番犬は只主人に對するお義理の爲めらしく、大儀さうに垂らした尾を振つてゐた。ジアン・パチスト——年老つた庭作りの名はさう云ふのであつた——

は、主人のフランチェスコが、マドンナ・デル・エルタの葡萄園へ出掛けて、其處からマルチリヤナへ廻つた上、知合ひの僧に或藥草の浸劑で腰の痛みを癒して貰ふ事になつてゐるので、二日ばかり経たなければ歸つて來ないと云ふ事を話した。レオナルドは其の間待つてゐる事に決めた。それに翌日の朝はフロレンスから、ゾロアストロとデオヴニが來る事になつて居たのである。

老人は此の時誰も居ない家の中へ彼を案内した(フランチェスコの子供等はフロレンスに住んで居たのである)。そしてせか／＼と忙しさうに動き廻り乍ら、白つぽい髪の毛をした、可愛い十六になる孫娘を呼んで、晚餐を吩咐け始めた。併しレオナルドは只ゼニス産の葡萄酒と、麵麴と、そして叔父の持村の誇りとなつて居る泉の水を持つて來るよう頼んだ。セル・フランチェスコは裕福な身分であるにも拘らず、父や祖父や曾祖父と同じやうに、大都會の便利な生活に馴れた人には、貧乏臭く思はれる位な、質素な暮しをして居たのである。

畫家は深い昔馴染のある下の室へ入つた。それは應接の間兼臺所で、時代がついて黒光りに鏡の様に光る蟲蝕ひだらけの木で作つた無恰好な椅子や、腰掛や、大靴や、重い錫の食器を載せる臺などが一杯並べてあつた。天井には煤けた梁が縦に幾本も並んでゐて、それには乾した藥草の束が縛り付けてあつた。白い壁は紙も何も張つてない剥き出しの儘で、床には煉瓦を敷

き詰め、大きな煤けた煖爐が据ゑてあつた。變つた新しい物と言へば、網目の様な圓い彫模様  
のついた、濁つた緑色の厚い窓硝子であつた。レオナルドは今でも憶えてゐるが、彼の子供時分  
には何の窓も何の窓も、一般にトスカナの村落で行はれて居た様に、蠟引きの麻布で蔽はれて、  
晝でも室の中は薄暗かつたものである。又寢室に宛てられてゐた二階の室は、唯木製の雨戸で  
窓を閉める丈けだつたので、此の地方の烈しい冬の凍の時など、洗面器の水が凍る程であつた。  
庭作りの老人は香りの高い山ヒース(バラ色の花をつくる低き木)と柏ひやくしんで作つた炭を起して、壁爐かきの中に銅の  
鎖で吊してある細長い口をした燈明に火を點じた。それにはよく古いエトッリヤ(伊太利州)族の墓  
穴などで發見される陶器類に、酷く似た手がついてゐた。その優美で華奢な形は、質素な貧し  
い室の中に置かれてゐる爲めに、尙一層美しく思はれるのであつた。此の半開なトスカナの一  
隅では今でも住民の血や、言語や、家具や、習慣などの中に、有史以前の古い時代の名残——  
エトッリヤ民族の痕跡が保存されて居るのであつた。

若い娘が酵母の入つて居ない丸麵麴や、煎餅の様に平つたい皿に盛つた莴苣のサラダや、葡  
萄酒を入れた瓶や、乾した無花果などを卓の上へ並べながら、小忠實こまごまに働いてゐる間に、レオ  
ナルドはぎい／＼と軋む階段傳ひに二階へ上つて行つた。此處も矢張り昔の儘であつた。天井の  
低い廣い室の眞中に、まるで家中うちうちの者が寝られさうな、大きい四角な寢臺が据ゑてあつた。そ  
れは優しい祖母のルチャ、即ちアントニオ・ダギンチの妻が、以前幼いレオナルドと一緒に寝た  
ものである。此の家傳來の神聖な寢臺は、遺産相續者たるフランチェスコ叔父の手に入つた譯で  
ある。今でも矢張り同じ様に枕上まくらの上の壁には十字架や、聖母像や、聖水を入れる貝殻や、霧ネッピヤと呼  
ばれる灰色をした乾草の束や、羅甸語の祈禱を記した古い紙などが吊してあつた。  
彼は下へ降りて火の傍へ座を占め、圓い木の椀で酒を交ぜた水を飲んだ。椀からは新しい椀  
籠の匂がした。此の匂が又すつと遠い幼年時代を想ひ出させるのであつた。ジアン・パチストが  
孫娘を連れて寢に行つて、レオナルド一人切りになつた時、彼は晴やかな靜かな瞑想に沈んだ。

二

彼はフロレンス共和国の公證人をしてゐる自分の父、セル・ビエロ・ダギンチの事を考へて  
ゐた。彼は二三日前、フロレンスでも目抜の繁華なデベリノ街なる父の家で（それは彼が自  
分の腕一本で手に入れた物である）父に會つて來た。もう七十からの老人であつたが猶墨鏢と  
して、顔は紅くはなを呈し、白い髪は房々と渦巻いて居た。レオナルドは一生涯を通じて、此のセ  
ル・ビエロ位單純な愛を以て、人生を愛してゐる人を見た事が無かつた。嘗て以前彼は始めて生  
れた自分の私生兒に對して、父親らしい愛情を抱いてゐたものであるが、その後正妻の腹に生

れた、アントニオにジャリヤノと云ふ二人の息子が大きくなつた時、二人は父が長男のレオナルドに、財産の一部を分けてやつたら大變だと云ふ心配の爲めに、レオナルドと父の間を不和にしようと思つた。今度最近に父と會つた時、彼は自分が家族の中で一人他人の様な氣がした。殊にその當時世間に擴まつてゐた、彼が無神者だと云ふ噂に對して、人一倍悲しみの情を表したのは、弟のロレンツォであつた。年から言へば未だ子供で有り乍ら、もうすつかり事務的な人間で、サザナラ信者の所謂「泣き蟲」派であると同時に、フロレンスの羊毛商組合の正直で儉約な手代であつた。彼はよく父の前で兄を掴まへて、基督教の事だの、懺悔の必要な事だの、謙遜と云ふ事だの、現代の哲學者が異端的な意見を有つてゐる事など語つた。そして錢別として自分の著した靈魂救済の本を贈つた。

今古い生家の煖爐の傍に坐り乍ら、レオナルドは如何にも番頭臭い丁寧な手蹟で、細かく書いた其本を取り出した。

「懺悔の書、フロレンス人ロレンツォ・ヂ・セル・ピエロ・ダゼンチ著はす。許婚の妻ナンナに贈る此の書物は、己れの罪を懺悔せんと欲するすべての人に取りて、極めて有益なるものなり。これを取りて一讀の際、目錄の中に己れの罪を見出したる時はこれを書き留むべし。己れの知らぬ罪は打捨て置くべし。こは他の人を益する事あらん。何となればかゝる種類の事柄は、假

令幾千の言葉を費すとも、到底悉く數へ上ぐる事能はざればなり」

その次に若い羊毛商人が、如何にも商賣人らしい小忠實な態度で編纂した、詳細極る一切の罪惡の目錄と、「基督教徒が懺悔の神祕に向ふ際、必ず心の中に抱くべき」八つの敬虔なる思念と云ふものが擧げてあつた。

ロレンツォは神學者氣取りの勿體らしい調子で、關稅を拂はない羅紗其の他の毛織物を身に着けるのは、罪惡か何うかと云ふ事を考察してゐた。「靈魂の點に關しては」と彼は解決を與へて居る。「斯くの如き異邦の織物を身に着くるとも、若し關稅にして不當なるものならば、何等害を及ぼす事なし。これ故愛する兄弟姉妹よ、決してかゝる事柄に惑ふ事なく、心を安んじらるべし。若し人ありて、「ロレンツォよ、汝外國の羅紗につきてかゝる事を斷言するは、抑々何に基きたるや」と訊かば、余は斯く答へん。去る千四百九十九年商用にてビザに在りし時、サン・ミケレ教會にてザノピ師と呼ぶ、聖ドミニコ派の僧侶の説教を聞きしが、師は殆ど信すべからざる程の驚嘆すべき、豊富なる神學的論證法を用ひて、外國製の羅紗に關し、今余の説くと同一なる事柄を確説したり」

それから彼は結論として、同じ様な退屈で重苦しい冗漫な筆を以て、惡魔が長い間此の靈魂救済の書をかゝる事を妨げた、と云ふ次第を物語つて居る。つまりロレンツォはそれに就いて必

要な學問も文才もないから、靈魂救済の書をかくと云ふよりも、自分の店の仕事を心配した方が似合はしい、とかう云ふ風に説いたのであるが、併し彼は惡魔の誘惑に打克つて、此の仕事に必要なのは學問上の智識や文才よりも、寧ろ基督教的爱と神に關する思念が必要であると云ふ結論に到着したので、彼は基督並に處女マリヤの助を借りて、「許婚の妻ナンナ、及び基督に依つて繋るゝ一般兄弟姉妹に贈るべき此の書」を書き上げた譯である。

レオナルドは又次の一節に注意を拂つた。多分有名な畫家たる自分の兄を頭に置いたらしく、ロレンツォは基督教の四つの善行を、比喩に依つて現はす様、一般の畫家に勸めて居る。それは睿智を三面の神に依つて表はし（過去現在未來を觀ると云ふ意味）、正義を劍と衝を持つた神に依つて、力を柱に凭り掛つた神に依つて、中庸を片手にコムパス、片手に剪刀を持つた神に依つて表すとの事であつた（これは一切無駄なものを切り捨て限界すると云ふ意味なのである）。

レオナルドは此の書物の中から、馴染の深い町入式な潔白性の匂ひが漂ひ出る様な氣がした。それは先祖代々傳つて此の家庭を支配し、彼の幼年時代を包んだ精神なのである。

彼が生れる百年も前から、ギンチ家の家長達は父のセル・ビエロと同じ様に、正直で儉約な、信心深い役人として、フロレンス共和国に勤めて居たのである。千三百三十九年の書類中に、彼の曾々祖父セル・グキド・ヂ・セル・ミケレ・ダギンチなる公證人の名が、始めて登載せられたので

ある。

彼の目の前には祖父のアントニオが、さながら生けるものゝ如く浮んで來た。

彼の處世觀は孫のロレンツォの抱いてゐるものと寸分變りが無いのであつた。彼は子供等に向つて、名譽とか、尊敬とか、官位とか、軍務とか、過分な富とか、過分な學問とか、すべて自分より高い物に向つて努力してはならぬと教へた。

「萬事につけて中庸を守ると云ふ事が、何より一番確かな方法だ」と彼は言ひくした。

此の人生觀の礎石とも云ふべき「萬事につけて中庸を守る」といふ教訓を説く時の、彼の落着き拂つた物々しい老人臭い聲を、レオナルドは今でもよく憶えて居た。

「なあ子供達、お前等は今日の日に明日の事を心配する蟻を手本にするがよい。何でも儉約して無駄をしないようにしなければならぬ。善良な一家の主を誰に譬へたらよからうなあ？ さうだ蜘蛛に譬へよう。何時も巢の真中に坐つてゐて、端の方の極く細い絲が一寸慄へても、直ぐ直しに行く蜘蛛に譬へるのが一番よい。」

彼はすべての家族に對して、晩のアゼ・マリヤの鐘が鳴るまでには、必ず一つ處へ集るようによ要求した。そして自分で家の中を巡視して、門を閉めた上、方々の鍵を寢室へ持つて來て、枕の下へ隠すのであつた。家庭内に於ける如何なる些細な事物も、彼の改々として倦まぬ監督の目

を免かれ得なかつた。牛に飼料のやり方が少くても、下女が燈明の心を餘り澤山出し過ぎて、油が餘分になくなつても、彼は悉く氣を付けて見付け出すのであつた。併し彼は吝嗇ではなかつた。着物を作る時には彼自身は勿論、子供達にも勤めて、金を惜まらずに上等の羅紗を選ました。それは持がよくて始終取換へる必要がないからである。いゝ羅紗で作つた服は、立派なばかりでなく値段も安いと彼は言つた。

祖父の意見に依ると、家族は分家しないで一つ屋根の下で暮すべきであつた。「何故と言つて皆が一つ卓に向つて食事をすれば、卓布も一枚、蠟燭も一本で済むけれど、二つの卓に分れると、卓布も二枚蠟燭も二本入る譯だ。みんなが一つの煖爐に當つてれば、薪も一束で澤山だけれど、二つの煖爐に分れれば二束入る——すべてが其の通りだ」

婦人と云ふものを高みから見下してゐた。

「女などは臺所と子供の事さへ心配すればいゝので、男の仕事に口を出すべきぢやない。女の智恵など信用するのは馬鹿者だ」

併しセル・アントニオの哲學は、幾分狡猾な所もあつた。

「子供達」と彼は繰返した。「お前達は神聖な教會の要求する通り、恵深くなくちやならない。併しそれでも友達には不幸な人よりも幸福な人を、貧しい人よりも裕福な人を選ぶがいゝ。つま

り徳行高い人と云ふ名譽を失はないで、それと同時に狡猾な人間の裏の裏を搔くのが、世渡り術の最上なるものだ」

彼は又自分の畑と他家の畑の境に、果物の樹を植ゑるのにも、木の陰が隣の畑へ落ちるやうにせよと子供等に教へたり、愛想よく借金の無心を斷る法を授けたりした。

「さうすると二重の利益が得られる譯だ」と彼は言添へた。「金を自家に藏つて置けるし、其上自分を欺さうとした奴を、笑ひ草にしてやると云ふ楽しみもある。若しその無心者が賢い人間だつたら、屹度此方の心持を合點して、體裁よく斷つた腕前を尊敬して呉れるに相違ない。つまり取る奴は悪者で、出す奴が馬鹿なのさ。併し親類や家の者に對しては金ばかりでなく、汗と血と名譽と、すべて自分の持つてゐる一切の物を盡して助けてやらねばならぬ。一族の安寧幸福の爲めには、自分の命さへ惜しんではならん。何故と云つて、よいか子供達、忘れてはならんぞ、身内の者の爲めに盡すのは、他人に盡すよりもずつと遙かに名譽でもあるし、亦利益でもあるのだ」

十三年の別離の後父祖の家の屋根の下に坐つて、風の唸り聲を聞いたり、煖爐の火が次第に消えて行くのを眺めたりし乍ら、畫家は自分の生活全體が、此の世界と共に古い、蜘蛛か蟻の様な勤儉貯蓄主義の處世觀の、偉大なる背反だと云ふ事を考へた。全くそれは弟のロレンツォに

云はせると、中庸の女神が鐵の鋏で切り取らずに置かない、豪放なる餘剰であり不法なる無駄であつた。

## 三

翌日早朝彼は庭作りの目を醒させないやうに、そつと家を出掛けた。そしてひよろ／＼背の高い小家が要塞を中心として、丘の斜面にこぢや／＼こびり附いてゐる貧しいギンチ村を通り抜けて、隣村のアンキアノに通ずる急な坂路を辿つて、段々山の上へ登り初めた。

今日も亦昨日の様に佗しく白々した、まるで冬日の様な太陽が照して、空は未だ早朝なのに拘らず、一片の雲もなく冷たく牙え渡つて、端の方が濁つた瑠璃色をして居た。北風トウモロコシは一夜の中に勢を増して來たが、昨日の様に引き捲るやうな吹き方でなく、まるで空から落ちてゐる様に、眞直に北の方から坦らかに吹いて、耳許で單調な呻り聲を立てるのであつた。此處でも赤色の穂めた様な静かな畑に、麥の穂が疎らにちらほら見えてゐたが、此の高地ではそれが尙一層北國らしく感じられた。畑は皆丘の斜面に沿うて半圓形の棧敷のやうに、段をなして上へ上へと重つてゐた(ギンチ村の人々はかうした畑を三日月畑と呼んでゐるのであつた)。瘠せた葡萄畑、疎らな色の薄い草、四方に散り敷く罌粟の花——埃っぽい灰色をした橄欖樹の黒

い頭丈らしい枝は、風の爲めにびく／＼と、びく／＼と病的に慄へて居た。

アンキアノの村へ入つた時、レオナルドはすつかり様子が變つて了つたので、思はずそこに立止つた。彼の記憶する所では、此處にアヂマリ城の廢墟があつて、僅かに形を保つてゐる哨樓の一つに、小さな村の酒屋が有つた筈である。今はカムボ・デラ・トルラチアと呼ばれる此の場所が葡萄園になつて、その眞中に、壁を綺麗に白く塗り上げた、新しい家が建つてゐた。低い石垣の中で一人の農夫が鋤を以て、葡萄の木を掘つて居た。此の男が畫家に向つて事情を話して呉れた——酒屋の持主が死んだ後で、相續人が此の土地をオルビニヤノの富裕な牧羊業者に賣つて了つた。すると其の男は丘の上を綺麗に垣なまして、葡萄園と橄欖の林を造つたのである。

レオナルドが此のアンキアノの酒屋の事を訊ねたのは譯があつた。外でもない、彼はその中で生れたのである。

此貧しい山村の入口——アルバノ山を越えてニエブレの溪谷からプラト、ピストイヤへ通ずる大街道に面して、騎士時代の遺物たるアヂマリ城の、骨ばかりの様な薄暗い廢墟の中に、五十年以前陽氣な酒場が設けられて居た。「居酒屋」と記した看板は錆びた蝶番ひの音をきい／＼と立て、入口の戸は開け放されて、樽や、錫の杯や、腹の大きく脹らんだ土燒の瓶などが、ずらりと並んだのが見透かされた。硝子が無くて、只黒ずんだ雨戸を附けたばかりの二つの窓は



狡猾さうに隣きしてゐる視力の鈍い目の様に思はれた。客の靴でつる／＼に磨り耗らされた正面の階段は太陽を透して輝く爽やかな葡萄棚の陰から覗いて居た。サン・マニヤトか、又はフチュコ市場へ出掛ける近在の住民、野生の山羊を追ふ獵人、馬を追ふ馬方、フロレンスの國境税關の監督、すべてかう云ふ様な質素な人達が此處へ立寄つて、お喋りをしたり、失敗の腹癩せに酸ばい安酒を鱈腹飲んだり、將棋や歌留多や、骸子や、トロッカなどを弄もてあそんだりするのであつた。

此の酒場に十六になる娘が居た。ギンチ村の百姓家に生れた、天涯に寄る邊のない孤兒で、名をカテリーナと云つた。

或時千四百五十一年の春、若いフロレンスの公證人ピエロ・ヂセル・アントニオ・ダギンチが、父の家へ逗留に來た。彼は一年中大抵フロレンスで事務に没頭してゐたが、此の時油搾の石臼六分の一に對する長期契約締結の爲めに、アンキアノへ招かれたのである。契約條件を合法の手續で登記して了つた時、村民は隣村のカムボ・デラ・トルラチアの酒場で手打ちの式を行ふ爲めに、公證人のピエロを招待した。セル・ピエロは氣さくな人で、身分の低い者に對しても愛想が好かつたので、快く承諾した。此時給仕に出たのがカテリーナであつた。若い公證人は、後に彼自身告白した所に依ると、一目見るなり此の娘に惚れ込んで了つたのである。鶉の獵に事寄

せて、彼は秋までフロレンスへ出發するのを延ばした。そして此の田舎酒屋が得意となつて、カテリーナの後を追廻し始めた。が彼女は彼が豫想したより以上の、堅い娘であつた。併しピエロは女性の征服者として名を知られた男であつた。彼は其の時二十四で、服装も洒落てゐれば、顔も美しく、其の上器用で力も強く、大抵の女は容易く擒とらにされて了ふ位な、自信の籠かごつた口説くはの才を有つてゐた。カテリーナは長い間抵抗して、聖母マリヤに助力を祈つたけれど、到頭最後まで持堪へる事が出来なかつた。汗氣の多い秋の葡萄に肥え太つたトスカナの鶉が、ニエブレの溪谷から飛び去る頃に、彼女は只ならぬ體となつたのである。

ピエロがアンキアノの酒場の女中をしてゐる、貧しい孤兒と關係したと云ふ噂が、遂にアントニオ・ダギンチの耳に入つた。彼は父親の咀くはひを浴せ掛け乍ら、早速息子をフロレンスへ戻して了つた。そして其冬、彼自身の言葉を借りると、「小僧の身を固める爲めに、アルピニャ・アマドリと云ふ婦人と結婚させた。それはもう若くもなければ美しくもないけれど、立派な家の娘で持參金も澤山あつた。又一方カテリーナは自分の家で使つてゐる、アカタブリガ・ヂピエロ・デル・ヅッカと云ふ日傭取りの所へ嫁入らせて了つた。彼はもう大分な年配の氣難かしい男で、先妻を酔拂つては撲り付け、遂に棺の中へ叩き込んだと云ふ噂があつた。主人から約束された三十フロリンの金と、猫の額ほどの橄欖林に食指動いて、アカタブリガは自分の名譽を以て、

他人の罪を蔽ふ事を敢て辭せなかつた。カテリーナは少しも不平を言はずに黙々として従つたが、それでも悲しみの爲めに病み付いて、産後危く死なない許りであつた。彼女に乳が無かつたので、レオナルド(赤ン坊にかう云ふ名を付けたのである)を育てる爲めに、アルバノ山から山羊を連れて來た。ビエールもカテリーナを思つて悲嘆に暮れ乍ら、矢張り同じ様に運命に服従したが、併しレオナルド丈けは家へ引取つて養ふやうに父に乞うた。その當時人々は私生兒を恥としないで、何時でも正妻の子と同じ様に養育し、時としては其の方をより以上優遇する事も珍しくなかつた。父は息子と妻の間に子が無かつたので、容易に此の乞を入れて、幼兒の面倒を妻に委せる事とした。それはレオナルドに取つて善良な祖母である、ルチャ・ヂビエロ・ゾジ・ダバカレトであつた。

フロレンス市の人民戸籍帳の中には千四百五十七年の部に、祖父なる公證人アントニオ・ダギンチの手に依つて書かれた、注意書きが保存されて居た。

「レオナルド、上記ビエロの息、現今アッカタブリガ・ヂ・ビエロ・デル・ゾカ・ダギンチの妻たるカテリーナとの間に儲けたる私生兒、生後五ヶ年」

レオナルドは自分の母を夢の様に憶えてゐた。殊に彼女の優しい、微妙な捕捉する事の出来ない微笑を憶えてゐた。それは一種不思議な神祕に充ちて居て、幾分狡猾らしい影を帯びてゐ

た。それ故彼女の單純な、愁を含んだ、嚴つゝい、殆ど險のある位美しい顔に對照して、何となく奇妙に感じられる程であつた。或時フロレンスなるメチチ家のサン・マルコ庭園の美術館を訪れたとき、彼はエトリアの古市アレツツで發見された、一つの彫刻に目を付けた。それは有史以前の古代に於ける地の女神、キベラを現した小さな銅像であつたが、此の女神もギンチ村の若い農婦たる彼の母と、まるで同じ様な微笑を浮べて居た。

母のカテリーナに就ては、嘗て自著『繪畫論』の中に書いたと同じ事を考へた。

「諸君はかう云ふ事に氣が付かれたか？ ぞつ／＼した貧しい著物を纏つた山の女は、その美しさの點に於て、紅粉を裝つた都會の婦人に勝つて居る」

彼の母の若い時を知つて居る人達は、レオナルドが彼女に似てゐると斷言した。取分けほつそりと長い手、絹糸の様に柔かい金色を帯びた髪の毛、それから彼の微笑などが、カテリーナを聯想させると云ふのであつた。彼は父親からは堂々たる體格と、健康の力と、生に對する愛とを、又母からは彼の體全體からだに滲み渡つてゐる女性的の美を受繼いだのである。

カテリーナが良人と共に暮してゐた小家は、セル・アントニオの邸から程遠からぬ處にあつた。正午祖父が晝寢をし、アッカタブリガが牛を連れて野良へ仕事に出ると少年は葡萄園を潜つて塀を乗り越え、母の許へ駈け込んだものである。彼女は入口の階段の上で紡錘紡錘を手にし乍ら、

心待ちに待つてゐたが、遠くの方から我子の姿を見付けると、両手を差し伸べるのであつた。少年が母に飛び蒐ると、彼女は其の顔、目、唇、髪と、一面に接吻を植ゑ付けた。

併しそれよりも夜の密會の方が、二人に取つて尙一層樂しかつた。祭日の晩には、老ア、カタブリガは酒場へ飲みに行つたり、近所へ骸子勝負へ出掛けたりした。でレオナルドは夜中にそつと起きて、祖母のルチャと並んで寝てゐる、家傳來の大寢臺から下りて、半分着物を引つ掛けた儘、音のしないやうに鎧戸を開けて窓から這ひ出し、大きく擴がつた無花果の枝を傳つて地面へ下り、カテリーナの家の方へ駈け出した。露に濡れた葉の冷たい感觸、水雞の啼聲、遠い星の輝き、祖母が眼を醒して自分の居ないのに氣が付きはしまいかと云ふ心配、それからカテリーナの寢床へ潜り込んで、暗い夜具の下で自分の體をびつたり押付けた時の、まるで不義の抱擁の様な祕密の快感——何も彼もが甘く嬉しかつた。

ルチャは彼を愛して甘やかして居た。彼は祖母の何時も同じ暗褐色をした着物や、人の好ささうな、皺だらけの淺黒い顔の周りを包んだ白い頭巾や、靜かな子守唄や、田舎風の菓子の甘さうな匂ひを憶えて居る。此の菓子はベルリンゴツツと云つて、祖母が自分で酸乳脂スルツナをつけて、皮がこんがり、狐色に焦げる位焼いたものである。

併し祖父との間は何うも圓滑に行かなかつた。初めアントニオは自分で孫の教育をしてゐた

が、少年は不精々々に講義を聞いた。滿七才になつた時、彼はギンチ村の隣にある、聖ペトロニラ教會付屬小學校へ入學した。けれど羅旬語の文法も、彼には矢張り巧く行かなかつた。

よく彼は朝、家を出ると、學校へ行く代りに、葦の生ひ茂つた荒涼たる谷の中へ入つて、仰向けに寝轉び乍ら幾時間も幾時間も、列を作つて飛び過ぎる鶴の群を見送つては、惱ましい美望の念を覚えるのであつた。花を見付けてもそれを撿らうとしないで、傷めないやうにそつと大切に花片を擴げて見て、その微妙な構造や、ちつと俯向いた花の冠りや、蜜に沾つた蕊しほなどに驚嘆した。アントニオが所用で町へ出掛けた時などは、幼いナルドは祖母の優しいのに乗じて、二日も三日も續けて山の中へ逃げ込んだ。そして高い斷崖の上の、巖石峨々たる人跡未だ到らぬ山羊の通ひ路を辿つて、アルパノ山の突兀たる絶頂へ攀ち登り、其處から目も届かぬ様な草原や、森や、畑や、フチキオの沼の様な湖水や、ピストイヤ、プラト、フロレンスなどの町や、雪を頂いたアルプスの嶺々が見渡された。天氣のよい日には地中海が、蒼みがかつた霧の帯の様に指點された。彼は體中引つ掻き傷を拵へて、埃だらけの日に焼けた顔をして家へ歸つて來たが、その様子が餘り愉快さうなので、祖母のルチャは叱り付けたり、祖父に告げ口をしたりする勇氣が無かつた。

少年は孤獨な日を送つた。彼に都會風の甘い物を贈つて呉れる父親や、優しいフランチェス

コ叔父は、何方も殆ど一年中フロレンスに暮してゐたので、極稀にしか會ふ事が無かつたし、學校友達とはまるで付合ひしなかつた。皆のして遊ぶ事などは、彼に取つて少しも興味が無かつたのである。彼等が蝶の翅を捲つて、その不自由さうに這ひ廻るのを見て悦んでゐる時など、レオナルドは病的に顔を擧めて、蒼い顔をしながら向うへ行つて了つた。ある時家畜小屋で家政婦が祭日の用意に、肥つた豚の子を殺して居た。仔豚はばた／＼と身を跳き乍ら、刺し通すやうな悲鳴を揚げた。それを見た彼は理由も言はず、長い間執拗に肉を食べるのを厭がつて、祖父のアントニオを怒らしたものである。

或時學校の子供等が、ロツと云ふ大膽で利口で、而も意地の悪い餓鬼大將の指揮の下に、一匹の土龍を掴へた。そして半死半生の苦しみを面白がり乍ら、その足に紐を結へ付けて、番犬に遣つて八ツ裂にさせようとした。レオナルドは子供等の群へ飛び蒐つて、其中の三人を突き轉ばした。彼は強力で敏捷だつたのである。學生等は不斷音無しいナルドが、こんな事を仕出來さうとは思ひも設けないで、呆れてぼんやりして居る隙に乗じて、土龍を掴んで一目散に野原へ駆け出した。子供等は我れに返つて、喚いたり、笑つたり、口笛を吹いたり、罵つたり。石を投げたりし乍ら、彼の後を追蒐け初めた。背のひよる長いロツは（彼はナルドより五つ年上であつた）、彼の髪の毛を引つ掴んで、其處に大喧嘩が始まつた。若し祖父の家の庭作りのジ

アン・パチストが駆け付けなかつたら、彼等はナルドを小つ酷く撲り付けたに相違ない。けれど少年は自分の目的を貫徹した。土龍は掴み合ひの間に巧く逃げて助かつたのである。喧嘩で夢中になつてゐる時、レオナルドはロツの攻撃を防ぐ爲めに、彼の片目をしたたか打つた。所が此の餓鬼大將の父親は、隣の別荘に住んでゐる貴族の料理人だつたので、早速祖父に苦情を申込んだ。アントニオは非常に腹を立てて孫をうんと折檻しようとしたが、祖父の執りなしで此の刑罰だけは免れた。そしてナルドは二三日の間、階段の下の物置へ押籠められた。

これは彼の経験した無数の不公平な待遇中最初のものであつた。其の後此の事を想ひ浮べた時、彼は日記の中で自分で自分にかう問ひ掛けて居る。

「若し子供の時でさへ、當然爲すべき事をした爲めに牢屋へ入れられたとすれば、年を取つた今は何んな取扱ひを受けるだらう？」

少年は暗い物置に坐つた儘、一匹の蜘蛛が太陽の光に虹の様に輝く巢の真中で、蠅の血を吸つて居るのをちつと眺めて居た。哀れな生螿はその足の中で跳いてゐたが、じい／＼と云ふ呻き聲も次第に細く掠れて行つた。ナルドは土龍を救つた様に、此の蠅をも助ける事が出来たのであるが、打克つ事の出来ない、漠とした感情が彼を制止した。彼は蜘蛛が獲物を食ふ邪魔をしないで、野の花の微妙な構造の祕密に對する時と同じ、冷靜無垢な好奇心を抱きながら、怪物

めいた昆蟲の残忍性を観察するのであつた。

四

其の頃ギンチ村から餘り遠くない處に、バンドリフ・ルチライ氏の大きな別荘が、大アルベルチの門人なるピアジオ・ドラゼンナと云ふ、フロレンスの建築家の手で建てられて居た。レオナルドは始終建築の場所へ行つて、人夫が壁を築いたり、角度計で石の並びを担したり、機械で吊上げたりするのを眺めて居た。或時ピアジオは少年と言葉を交へて見て、その明晰な頭腦に一驚を吃した。初めの中は一寸何かの序でに冗談半分の様にしてゐたが、其の中段々眞剣になつて、彼は少年に算術、代數、幾何學、機械學などの原則を授け始めた。是等すべての物を易々と苦もなく擲んで行く、此の小さな弟子の理解力は、彼に取つて到底有り得べからざる奇蹟の様に思はれた。それはまるで以前に知つて居た事を、想ひ出して居るかの様であつた。

祖父はかうした孫の奇行を白い眼で眺めて居た。彼は又レオナルドの左利きと云ふ事も氣に入らなかつた。それは一般に良からぬ前兆と思はれて居た。當時の人々は悪魔と契約を結ぶ魔法使ひは、生れ乍らの左利きだと信じて居たのである。併し少年に對するアントニオの快からぬ感情を尙一層強める事が生じた。それはファルト、ニヤノから來た老練の巫女が彼に向つて、

ナルドを養つた黒山羊の持主たる、アルバノ山中の僻村フォルネロの老婆は魔法女であるから、従つて悪魔の御意に適ふ爲めに、ナルドを養つた山羊の乳に咀ひを掛けたに相違ない、と斷言したのである。

「全く本當の事は何處までも本當の事だ」と祖父は考へた。「何んなに狼の子を優しく育ててやつても、始終森の方ばかり眺めて居るものだ。いや、これも神様の思召らしい。何處の家にも不具の一人位無しには濟まないて」

祖父は自分の祕藏息子が、我家の相續人として恥しくない丈けの本當の孫を生んで呉れるのを、今かくと待ち兼ねてゐた。何故と言つてナルドは偶然の落し胤で、實際此の家庭に於ける「私生兒」だからである。

アルバノ山の住人は外に何處でも見受ける事の出来ない、奇妙な此の山の特色を物語つて居た。それは多くの動植物が、悉く白い色をしてゐると云ふのであつた。此の話は實際自分の目で見た事の無い人には、到底信じる事が出来ない様な氣がするけれど、アルバノ山の森や草場を跋涉した人は、實際に於て度々白い莖や、白い葎や、白い雀や、黒鳥の巢の中に齧めてゐる白い雜などに、行き會ふ事があるのであつた。かう云ふ譯で此の山全體が、何時の頃とも知れぬ古い昔から、白山と云ふ名稱を有つてゐるのだ、とかうギンチ村の住人は説明して居る。

幼いナルドも此の白山の奇蹟の一つであつた。徳望ある平凡なフロレンス市公證人の家庭に於ける不具者、黒鳥の巢の中に生れた白い雛鳥なのであつた。

## 五

少年が満十三才になつた時、父は彼をギンチ村からフロレンスなる自分の家へ引取つた。それから後レオナルドは餘り自分の故郷を訪れなかつた。

千四百九十四年の彼の日記に（彼は其頃ミラン王に仕へて居たのである）、例に依つて簡単な、謎の様なノートが残つてゐる。

「千四百九十三年七月十六日カテリーナ来る」

これは家事向の必要で傭入れた、女中の事を言つたものの様に想像出来るけれど、其實これはレオナルドの母親なのであつた。

良人ア・カタブリガの死後、カテリーナは餘命幾何もないものと感じて、此の世の名残に我子を見ようと思ひ立つたのである。

聖アマヴロシイの遺骸や、神聖な主の受難の釘を拜む爲めに、トスカナからロムペルヂヤへ赴く順禮者の群に交つて、彼女はミランへやつて來たのである。レオナルドは敬虔な念に充

ちた優しい態度で彼女を迎へた。

彼は昔の様に母の傍にゐると、夜跣足でそつと駆け出して來て、母の床の中へ潜り込み乍ら、ひしと體を摺り付けた、あの小さいナルドと變りがない様な氣がした。

老婆は息子に會つて後、生れ故郷の村へ歸らうとしたが、彼はそれを押留めて、近所のエルチル門の傍にある、サンタ・キヤラの尼寺の中に、閑靜な僧房を借り受け、注意深く色々な設備をして住はせた。其後彼女は病氣して床に就いたけれど、息子に心配を懸け度くないと言つて、何うしても彼の家へ引移るのを拒んだ。で彼はフランチェスコ・スフォルツァの建てた、まるで豪華な宮殿の様な、美しいミランのオスベダレ・マジオレ病院へ入れて、毎日の様に見舞に行つた。彼女の臨終の前には、殆どその傍を離れなかつた。而も彼の親しい友人や弟子でさへ、カテリーナがミランに滞在してゐる事を、誰一人知らなかつたのである。日記の中にも母の事は殆ど少しも書かなかつた。只一度文筆に上した事があるが、それも母の病んでゐる病院内で觀察した、大病に悩む若い娘の「謎の様な」（これは彼自身の言葉である）、珍しい顔の事に就いて、一寸序でに書いたものに過ぎない。

「チオヴニナ——謎の如き顔——カテリーナに訊け、病院内」

次第に冷たくなつて行く彼女の手へ最後に唇を觸れた時、彼は此の貧しいギンチ村の農婦た

るつつましい山の女に、自分の有する一切の物を負うて居る様な心持がした。彼は華々しい葬送を營んで母の靈を慰めた。それはつつましいアンキアノの酒場の下女などではなくて、立派な貴婦人の葬式か何ぞの様であつた。彼は公證人の父から受継いだ几帳面な性癖から、嘗て何の必要もないのに、アンドレア・サライノの新しい服に要した釦や、銀のレースや、薔薇色の繻子の値段を書き留めたと同じ態度で、葬式の費用を記入したのである。

それから六年経つた千五百年に、モロー没落後フロレンスへ向けて出立する爲め、ミランで荷物の片付けをして居た時、彼はとある戸棚の中から丁寧に包んだ小さな包みを見付け出した。それはカテリーナがギンチ村から持つて来た田舎土産で、自分の手で織つた太い鼠色の麻の襦衣二枚と、矢張り手製の山羊の毛で編んだ靴下三足とであつた。彼は細地の肌衣に馴れてゐるので、それを身に着けはしなかつたが、今突然此の小さな包みが、科學書や數學器具や、その他の機械類の間に忘れられて居るのを見ると、彼は胸が哀愁の念で一杯になる様な氣がした。

其の後長い間國から國、町から町へと孤獨な佗しい放浪を續けながらも、彼は靴下と襦衣の入つた不用な貧しい包を、必ず持つて歩くのを忘れなかつた。そして何時も人の目から隠すようにしながら、自分に取つて特に貴重な品々と共に、此の一包みを恥しさうに、而も大切に藏ひ込むのであつた。

## 六

子供の時から見馴れた急な徑傳ひに、アルパノ山をさして登つてゐる間に、レオナルドの心中をかうした追憶が掠めて過ぎた。

彼は餘り風の當らぬ岩の凹みに入り、捨石に腰を下して邊りを見廻した。去年の枯葉を附けた儘の、瘤だらけな背の低い椴の木、村の人が「刷毛」と呼んでゐる、鈍い緑色をしたヒースの香はしい小さな花、色の薄い野生の堇——これ等すべての物の上に、苦蓬の匂ともつかず、春の匂ともつかず、名を知らぬ山草の匂ともつかぬ、何とも捕捉し難い新鮮な薫りが漂つてゐた。波の様に起伏した地平線は、アルノ川の溪谷に降り乍ら次第に遠ざかつて行つた。右手の方に當つて眞裸な岩山が、うね／＼と曲線を描いた陰影や、蛇の様な形をした裂目や、灰色がかつた瑠璃色の絶壁などを見せ乍ら、巍然として聳えて居る。彼の直ぐ足の下では、アンキアノの村が日を受けて白々と見えて居た。それよりもつと深い谷の奥ではギンチ村が、先の尖つた圓い丘にこびり、付き乍ら、山蜂の巢の様に小さく見えて居たが、その中の要塞の塔が、丁度アンキアノ街道で見た二本の糸杉のやうに、鋭く黒く突つ立つてゐるのであつた。

何一つ變つてゐる物は無かつた。何だか、昨日此の徑を傳つて登つたばかりの様に思はれ

た。今も四十年前と同じく、此處にヒースが豊かに茂つて、白つぽい草が咲き、樫の木は鉞だらけの茶色をした葉をがさ／＼鳴らし、アルバノ山は暗鬱な蒼みを呈して、邊りの物全體がすべて昔の様に、質朴で、靜かで、貧しく色が褪めて、如何にも北國らしい氣分を表して居る。けれどそれと同時に此の靜寂と蒼ざめた色調を透して、昔のエトルリヤ今のトスカナ、即ち永遠に春の如き復活の地の微妙な美しさが窺はれた。丁度ギンチ村の若き農婦たるレオナルドの母の峻厳な美しい顔に、奇妙な優しい微笑が洩れ浮ぶ様に。

彼は立上つて、険しい坂路を先へ／＼と登つて行つた。高くなるに随つて、風は次第に寒く意地悪くなつて來た。

再び追憶が彼を取り卷いた——今度は青年時代の事である。

## 七

公證人ピエロ・ダギンチの商賣は段々繁昌して行つた。彼は敏捷で快活で人が好くて、一生涯の間萬事とん／＼拍子に行つて、自分も愉快に暮せば他人の邪魔もしない、と云つた様な種類の人間であつたので、何んな人とも巧みに調子を合す腕を持つてゐた。殊に教會の方の人達が彼に好意を抱いた爲めに、富裕な聖アンヌンチアタ僧院や、其の他多くの慈善團體の管理人に

なつて、ピエロは段々財産を太らして行つた。そしてギンチ村附近の地所や、家屋や、葡萄園などを新たに買入れたが、併しアントニオの處世訓に従つて、以前の質素な生活振を改めなかつた。只教會の裝飾には悦んで喜捨をしたし、又一族の名譽を思ふ爲めに、フロレンスのパヂヤに在るギンチ家の墓場に、立派な石碑を建てたりした。

第一の妻アルビエラ・アマドリが死んだ時、三十八才の寡夫は大して悲しみもしないで、フランチェスコ・デ・セル・デオヴニ・ランフレチニと云ふ、殆ど子供の様な若い美しい娘と結婚した。二度目の妻との間にも子供が出来なかつた。此の頃レオナルドはゴッキオ宮殿に近い、サン・フィレンツェ廣場なるミケレ・ブランドリニと云ふ人の持家を借りた、父の住居で起居してゐた。ピエロは始めて生れた自分の庶子を、金に糸目を附けないで立派に教育してやらうと考へた。つまり嫡子が無い爲めに行く／＼彼を後目相續人に直して、ギンチ家に生れたすべての頭息子と同じ様に、フロレンスの公證人にしようと思ふ腹だつたのである。

其の頃フロレンスに有名な自然科学者、兼數學者、兼物理學者、兼天文學者のバオロ・ダル・ボツォ・トスカネリと云ふ人が住んでゐた。彼はクリストフォロ・コロムブスに手紙を送つて、對蹠人の國を越えて印度へ赴く海路は、人々の考へてゐる程遠くないと云つて、此の探險旅行を勧め成功を豫言した。若しトスカネリの後援と補助が無かつたら、コロムブスもあの發見を成



就する事が出来なかつたに相違ない。此の偉大な航海者は單に不動の瞑想法に彈ぜられた、從順なる樂器に過ぎなかつたので、フロレンスの學者が自分の靜かな書齋の中で計畫考量した事を、事實の上に行つた丈けなのである。ロレンツ・メヂチの華やかな宮廷生活や、都雅でも空虚な饒舌家の新プラトニズムの學者や、古代文化の模倣者などの群を離れて、トスカネリは當時の人々の言葉を借りると、「まるで聖者の様な暮し」をして居た。沈黙精進の行者で、金錢の慾を知らず、肉類を口にせず、又絶對の童貞を保持してゐた。彼の顔は殆ど嫌惡の念を與へる程醜かつたが、併し明るくて靜かで、子供の様に單純な目丈けは如何にも美しかつた。

千四百七十年の或晩、ピッチ宮に近い彼の住家の戸を、未だ子供の様な若い未知の人が叩いた。トスカネリは又何時もの様に用もないのに好奇で來た客だらうと思つて、嚴つい冷やかな態度で彼を迎へた。併しレオナルドと話を始めて見た時、以前の建築家セル・ビアチオ・ガラエンナと同じ様に、青年の數學的天才に驚嘆した。かうしてパオロは彼の師となつた。晴れた夏の夜など、二人はフロレンスに近いピジオ・アル・ピノ丘の一つに登つた。一面に生ひ繁つたヒースや、香りの高い柏樹や、樹脂の多い黒松などの間に、半ば崩れ掛つた木造の番小屋が残つてゐたが、それが大天文學者の觀象臺になつてゐたのである。彼は自然界の法則について、自分の知つてゐる丈けの事を悉く弟子に話して聞かせた。

此の物語の中からレオナルドは、人の未だ知らぬ新しい、偉大な力に對する信仰を汲み取つたのである。

父は別に彼を束縛しなかつたけれど、只何か収入の多い職業を選むように忠告した。彼が絶えず物の形を作つたり畫を描いたりしてゐるのを見て、ピエロはかうした製作の二三を携へて、昔からの親友なる金工で畫師で彫刻家の、アンドレア・デル・エロッキオに見せた。間もなくレオナルドは、彼の畫室へ弟子入りしたのである。

## 八

貧しい煉瓦焼の息子であるエロッキオは、レオナルドより十七歳の年長であつた。

鼻の上へ眼鏡を載せて、手に蟲眼鏡を持ち乍ら、薄暗い畫室の臺に向つて坐つてゐる所は、大畫家と云ふより寧ろ普通のフロレンスの小商人に似てゐた。彼の畫室はアルノ川のどんぶりした綠色の水に壁を浸して、腐つた棒で支柱をした、少し傾き掛つた古い小家の一つであつた。彼はちつと据つて動かぬ平つたい、色の白い、腮のくゞれたふつくりした顔をして居た。只きつと引締つた薄い唇と、小さな目から出る針のやうに鋭い眼光の中に、冷靜で、正確で、大膽な好奇心に充ちた理智が窺はれた。

エロッキオは古代の畫家パオロ・ウッチェロを自分の師と考へて居た。人の語り傳へる所に依ると、ウッチェロは藝術に應用する爲めに、抽象的な數學や、頭の痛くなる様な遠近法の問題に没頭しながら、世間の人に輕蔑せられ見捨てられて、赤貧洗ふが如き境遇に陥り、殆ど發狂しいばかりであつた。彼は幾日もく食物なしに過し、幾晩もく一睡もせず送つた。何うかすると夜中眞暗な床の中に臥り乍ら、歡喜に充ちた叫聲を立てて妻を呼醒ますのであつた。

「あゝ遠近法は實に愉快なものだなあー」

遂に彼は世に解せられない儘で、嘲笑の中に此の世を去つたのである。

エロッキオも矢張りウッチェロと同じ様に、數學を以て藝術科學に共通の基礎と考へてゐたので、始終かう云ふ事を口にして居た。「幾何學はあらゆる科學の母たる數學の一部であるから、従つて一切の藝術の父たる素描の母である。」美にまれ醜にまれ、世に珍しい顔や體に出會つた時は、彼はサンドロ・ボチチェリの様に、氣難しげな態度で顔を反向けたり、空想的な感傷に陥つたりする様な事なしに、冷靜な態度でそれを研究した上、石膏を以て解剖上の模型を拵へて置いた。之は彼以前の畫家が誰一人しなかつた事である。彼は無限の忍耐力を以て、比較したり測量したり實驗したりした。それは美の法則の中に、數學的必然の法則が潜んでゐるのを直覺したからである。彼はサンドロ以上に不撓の努力を以て、新しい美を探し求めた。併しそれはボチ

チェリの様に奇蹟や物語の中でもなければ、オリムピヤがゴルゴタと融和した、魅惑な薄明の境地でも無く、嘗て前人の思ひ設けなかつた様な、自然界の神祕に侵入する事に依つて此の探求を續けたのである。何故と言つて、エロッキオに取つては奇蹟が眞理ではなく、眞理が奇蹟だつたからである。

ピエロ・ダゲンチが彼の所へ、十八才の息子を連れて來た日に、二人の運命は決しられた。エロッキオは單に弟子のレオナルドの師となつたばかりでなく、亦その弟子になつたのである。

エロッキオがフロムプロザの僧侶達からの依頼で描いた基督洗禮圖に、レオナルドは跪ける天使を書いた。エロッキオが漠然と豫感し、盲者の如く手探りで求めてゐたすべての物を、レオナルドははつきりと見定めて、此の天使像の中に具現したのである。其の後人々は、師エロッキオが少年に負を取つたので（絶望の餘り畫を止めて了つた、と云ふ風に語り傳へたが、實際に於て二人の間には反目嫉視など少しも無かつた。彼等二人は互に補充し合つたのである。弟子の方は、エロッキオが自然から恵まれなかつた輕快さを有つてゐたし、師の方は餘りに多方面で移り氣なレオナルドに缺けてゐた、集中力持久力を持つてゐたのである。嫉妬もなく競争も無く、二人は何方が果して對手に負ふ所が多いか、さう云ふ事は全然念頭に置かなかつた。

此の頃エロッキオはオルサン・ミケレ寺院の爲めに、基督とトマス像を青銅で鑄造してゐた。

ペート・アンゼリコの樂園じみた空想畫やボチチュリの物語めいた夢の様な畫と違つて、基督の傷口へ指をさし入れて居るトマスの姿を借りて、嘗て此の地上に例の無かつた神に對する人間、即ち奇蹟に對する實驗的な理智の冒瀆を、始めて人々の目の前に突き付けたのである。

九

レオナルドの最初の作品は、フロレンスの市民が葡萄牙王に贈る爲めに、フランダールで織らせた金糸入りの絹帷の模様畫であつた。それはアダムとイヴの墮落を表はしたもので、節くれ立つた樂園の棕櫚の幹など、完成の極致とも云ふべき出来榮であつたので、その繪を見た當時の人は「人間にかばかりの忍耐力ありやと思へば、心暗くなる如き心地す」と言つてゐる位であつた。悪魔なる蛇の女の様な顔は、何とも言へない誘惑的な美に息づいてゐて、「否死する事なからん。されど此實を味ひたる日に汝等の眼開きて、汝等は善惡を知る神々の如くなるべし。そは主の神も知り給へる所なり」と云ふ、彼の言葉が聞えるやうに思はれた。

妻のイヴは智慧の木に手を差し延べ乍ら、大膽な好奇心に充ちた微笑を浮べてゐた。それはゴロッキオの彫つた不信者トマスが、基督の傷口へ指をさし入れ乍ら、唇の邊に浮べてゐる微笑と同じ様なものであつた。

或時父のピエロは、魚釣や獵の時世話になつてゐるギンチ村の住人の依頼で、「ロッテル」と呼ばれてゐる圓い木の楯に、何か畫をかくようにとレオナルドに頼んだ。諷刺畫や題銘などを書いたかう云ふ種類の楯は、當時家の裝飾として一般に用ゐられて居たのである。

畫家はその楯にメドゥサの首と同じ様に、看る人に恐怖の念を起させる様な怪物を描かうと思ひ付いた。

彼は自分の室へ他の者を誰も入れないようにして、其の中へ蜥蜴や、蛇や、蟋蟀や、蜘蛛や、百足や、蛾や、蠍や、蝙蝠や、その他無数の醜い動物を集めた。彼はそれ等の物の體の部分々々を選び出して、組み合したり廓大したり乍ら、此の世に存在しない、超自然的な而も飽く迄現實的な怪物を作り出した。丁度ユウクリダスやピタゴラスが、一つの定理から又別な定理を抜き出す様な明快さを以て、彼は現存せる物から現存せざる物を造り出したのである。

此の怪物が岩の裂目から這ひ出してゐる姿を見ると、黒く光る滑々した環狀の腹を地に摺り付けて、がさ／＼と音を出してゐるのが聞える様な氣がした。大きく開いた口は臭い息を吐いて、目からは焰が、鼻の穴からは煙が噴き出してゐるのであつた。併し何よりも不思議なのは、此つ怪物の恐しい姿がまるで美の様に、人の心を捕へ且つ牽き寄せる事であつた。

レオナルドは毎日毎晩、蟲けらの死骸から發する堪へ難い臭氣が、空氣を毒し盡して息の空

りさうな室の中に閉ぢ籠つて居た。不斷は甘やかされ過ぎると思ふ位、すべての悪臭に對して殊に敏感であつた彼が、今は少しもそれに氣が付かなかつたのである。到頭彼は父に向つて、繪が出来たから取りに来てよいと告げた。セルビエロがやつて来た時、レオナルドは一寸次の間で待つて呉れと頼んで、畫室へ歸つて畫を卓の上へ載せ、その周りへ黒い布を置いて鏡戸をしめ、只一筋の光線が眞直に楯の上に落ちるようにならして後、始めて父ビエロを呼入れた。此方は室へ入つて一目見るなり、きやつと叫んで驚愕の餘りたち／＼と後へ退つた。彼は自分の前に本當の怪物が居る様な氣がしたのである。畫家は父の顔に表れた恐怖の表情が、驚嘆の色に變るのをちつと注意深く見詰めた後、微笑を浮べ乍らかう口を切つた。

「私の繪は目的を達しました。丁度私が望んだ通りの効果を奏してゐます。さあ持つて行つて下さい——すつかり出来上りました」

千四百八十一年、レオナルドはザン・ドナト・アンコベト寺院の僧達から、祭壇の後ろに飾る爲めに『東方賢者の禮拜』を描くようにと註文を受けた。

此の聖畫に對する下繪に於て、彼は先人未到の解剖學的造詣や肉體の運動に表はれる感情に關する深い知識を示した。

畫の背景としては古い希臘の生活らしいものが配置されてあつた——樂しげな遊戯や、騎士

の闘技や、眞裸の美しい青年の群もあれば、迫持や階段の半ば崩れた荒寥たる神殿の廢墟も見えてゐた。橄欖の木陰なる石の上には、聖母マリヤが幼きイエスを抱いて腰掛け乍ら、未知の國の華々しい賓客が、薫香、香膏、黄金、その他あらゆる大地の貴重な賜物を、秣槽なる幼兒に捧げるのを見て、驚いた様な表情をして居る。幾千年來の知識の重荷に疲れ果てた彼等は頭を垂れて、掌を半ば盲ひた目の上に翳し乍ら、如何なる奇蹟にも増して偉大な奇蹟を眺めてゐる。それは神が人間の姿を假りて出現したのである。彼等は「我誠に實に汝等に告げん、汝等若し小兒の如くなるに非ずんば、天國に入るを得ざるべし」と言ふべき運命を有する人の前に、ひれ伏すのであつた。

此の最初の二つの作に於て、レオナルドは自分の觀察の圈界を完全に表示した。即ち原人の墮落に於ては、大膽なる理智に現れたる蛇の如き賢しさを、亦賢者の禮拜に於ては謙抑なる信仰に表れたる鳩の如き單純さを示したのである。

とは云へ彼は此の繪を完成しなかつた(其後も彼は自分の多くの作品を、一つとして完成しなかつたのである)。それは際しもなく完全を追ひ求める結果、繪筆を以て征服する事の出来ない困難な問題を、自分で自分に生み出したからである。ペトラルカの言葉を借りて言へば、「過度の渴きが自分自身癒す事を妨げる」のであつた。

ビエロの第二の妻フランチェスカは、年若くして世を去つた。で彼は三度目の結婚をして、二百六十五フリロンの持参金を有つた、フランチェスコ・デ・ゲリエルモの娘、マリゲリタを娶つた。新しい母はレオナルドを愛しなかつたが、アントニオとジョリヤノの二人の息子を生んで、良人を喜ばせてから以來それが殊に酷くなつた。

レオナルドは金遣ひが荒かつた。ビエロはさして寛大と云ふ程でもなかつたが、兎に角彼に仕送りをしてやつた。マルゲリタは良人が正當な相続者の財産を奪つて、魔法の山羊に養はれた、青二才の私生兒に分けてやると云つて、恐しい權幕でビエロに食つて掛るのであつた。

ドロッキオの家や、その他方々の畫室に通ふ友達仲間でも、彼は矢張り多くの敵を持つてゐた。その中の一人は師と弟子とが並外れて仲がよいのを見て、二人が男色罪を犯してゐると云ふ無名の密告をした。レオナルドがフロレンスでも指折りの美男子であり乍ら、婦人から遠ざかつてゐる爲めに、此の讒謗は何となく本當らしく思はれたのである。「彼の容貌全體が」と或る當時の人はかう言つて居る。「何とも言へない美に輝いてゐるので、其の顔を見ると何んなに沈んだ心でも晴れくゝとなる」

その年彼はドロッキオの畫室を捨て、只一人別に居を定めた。その時もうレオナルドは「邪教的な考へをもつて居る」とか、「無神者だ」とか云ふ噂さが行はれた。かうして、フロレンス

に留まつてゐるのが、彼に取つて益々苦しくなつて來た。

ビエロは息子の爲めに、ロレンツォ・メチチから有利な註文を取つて來たが、レオナルドは彼に取り入る事が出来なかつた。外でもない、ロレンツォは何よりも先づ第一に、卑屈な阿諛追従（それは上品なものであつたけれど）を近侍の人々から求めて、餘り自由な大膽な人間を悦ばなかつたのである。

無爲の悩みがレオナルドを苦しめ始めた。彼は當時フロレンスに駐劄してゐた、埃及の大使カイト・ベイの仲介を経て、シリヤ國の大官と祕密契約を結ぼうと迄し懸けた。それは此の大官の許へ建築技師長として就職しようといふのであつたが、これが爲めには基督教を棄て、回々教に移らなければならぬといふ事は、彼自身も承知してゐたのである。

彼はもうフロレンスさへ出て行けば、其の行先は何處だらうと構はなかつた。此の町に留まつてゐたら、自滅より外仕方がないと云ふ様な氣がしたのである。

併し偶然の機會が彼を救つた。彼は丁度馬の鬮體の様な、銀で作つた多絃の琵琶を發明した。所が熱心な音楽の愛好者たるロレンツォは、その琵琶の奇抜な形と音がすつかり氣に入つて了つた。彼は發明者に向つて、ミランへ赴いてロムバルヂヤ公スフォルツォ・モローに、此の琵琶を捧呈したら好からうと勧めた。

千四百八十二年生れて三十歳のレオナルドは、フロレンスを捨て、ミランへ赴いた。併しそれは美術家又は學者としてではなく、只宮廷附の音樂師として招聘されたのである。出發前に彼は次の様な手紙をモロー公に送つた。

「賢明無比の殿下よ、現今の發明家の作製せる武器を研究批判の結果、微生は是等の武器が一般に使用せらるゝものと異りたる、何等特異の點を見出し得ざりし次第に御座候。此の故に微生は敢て殿下に一書を呈して、微生の技術の祕法を御披露致すべく決心仕候」

かう言つて彼は自分の發明した品々を數へ上げた。非常に輕くて而も火に燃えない橋、若し城塞の基礎が岩の中に切り込まれて居ない以上、砲の力を借りないでこれを破壊する方法、音を立てないよう迅速に堀や川の下へ地下道を敷設する方法、如何なる力も到底抵抗する事の出來ない様な勢を以て、敵陣の中へ食ひ込んで行く翼のついた車、「極めて見事にして有益なる組織」の射石砲、大砲、臼砲。「驚くべき効力を有する」破城槌、巨大な砲彈、其の他の武器などであつた。又彼は箇々の場合必要に應じて新しい機械を發明する由を述べた後、海戦に要する一切の攻防兩用の武器、石彈鐵彈に堪へ得る軍艦、前人未知の爆發藥などを列擧した。

「又平時に在りては」と彼は書き續けた。「公私の家屋を建築し運河水道等を開鑿して、必ず殿下の御希望に副ひ得る事と自信仕候。

「尙、大理石銅粘土等の彫塑に於ても亦繪畫に於ても、他の如何なる畫家にも劣らざるよう、あらゆる御註文に應じ申す可く候。

「尙、右の外殿下の御父君、並に名譽あるスフォルツァ家全體の永久の記念たるべき、青銅騎馬像の鑄造をも御引受け仕る可く候。

「若し上記の發明中、不可能と思召さるゝ物有之候はゞ、御城内の庭園又は其の他御指定の場所にて、實驗を行ひても宜敷候。右推參乍ら自身御紹介申上ぐる事斯くの如くに御座候、最も忠實なる殿下の僕」

レオナルド・ダ・ヴィンチ

青々としたロムバルヂヤの平野の末に、始めて雪を頂いたアルプスの嶺を見た時、彼は新しい生涯が始まらうとしてゐる事を感じた。そして此の他郷の土地が自分に取つて、眞の故郷となる様な氣がしたのである。

レオナルドはアルベノ山へ登り乍ら、かうして半世紀に亘る過去の生活を憶ひ起した。

彼はもう白山の頂きなる時に近付いて居た。今徑は枯れた木の茂みや、去年の葉を付けた儘の瘠せて節くれ立つた樗の間を、少しも曲りくねらないで眞直に上へ登つてゐた。濁つた瑠璃色の山は風の息吹きを受けて、野性的な物凄く寂寥たる姿を呈して、まるで此の地球上のものではなく、何か別な遊星の上に在る物の様に感じられた。風は顔をひう／＼と鞭うち、氷の針を以て刺し、目を潰すのであつた。時々足下から石が轉がり出して、陰に籠つた音を立て乍ら絶壁の下へ落ちて行つた。

彼は次第に高く高く登つて行つた。此の上へ登ると云ふ努力の中に子供の頃から覚えのある不思議な悦びがあつた。風に包まれた氣難かしい峻巖な山を一步々々征服して行く様な心持がした。一足登る毎に視線が長く、鋭く、宏大になつて行く様に思はれた。それは一步毎に遠方の眺めが段々廣く展開して行くからであつた。

此處にはもう春は無かつた。木の枝には一つとして蕾が無く、草の緑も有るか無しで只、刺す様に鋭い、濕つた苔の匂ひがするばかりであつた。そして彼の目指して進んで行く上の方には、たゞ石ころと蒼褪めた空が有るのみであつた。フロレンスの位してゐる反對の側の溪谷はもう見えなくなつて、只エムポリに至る目も及ばぬ様な大空間が眼前に展けてゐた。先づ始めは谷や凹みに大膽な陰影を呈した、冷たい、濁つた瑠璃色の山が連つてゐるが、其の次はリヲ

ルノからカステリナ・マリチマ及びブルテラノを経て、サン・ジミニヤノに到る無數の丘が波の様に起伏してゐる。かうして到る處空間と、空虚と、大氣の世界であつた——と狭い徑が彼の足許を離れて走り出したと思ふと、彼は波の様に腕り乍ら降つて居る此の大遠景の上を、殆ど感じられない位の滑らかさを以て靜かに徐かに、大きな翼に乗つて飛んでゐる様な心持がした。此の高い山の上では、翼が自然に必要な物のやうに感じられた。そして人間に翼がないと云ふ事實は、急に兩足無くした様な驚きと恐れとを、心の中に呼び醒すのであつた。

彼は自分が子供の時鶴が空を翔けるのを見、まるで「飛ばう、飛ばう」と誘ふ様な微かな啼聲を聞いた時、美しさの餘り、泣き出した事を想ひ出した。又祖父の鳥籠の中からそつと内緒で椋鳥やのじこを放して遣つて、自由の身になつた鳥の悦しさうな様子に見惚れた事を想ひ出した。或時學校教師たる牧師から、デダルスの子イカラスが、蠟で拵へた翼に乗つて空を飛んでゐる中に、墜ちて死んだと云ふ話を聞いて、其の後教師に昔の英雄の中で誰が一番偉いかと訊かれた時、彼は少しも躊躇なしに「デダルスの子イカラス」と答へたものである。それから始めてカムパニー（フロレンスなるマリヤ・デル・フィオレ寺院の鐘樓）で、ありとあらゆるでゐる學を表はしたデオットの浮彫の中に、頭から足の先まで鳥の羽毛で包まれ乍ら、空を飛ん藝術科デダルスの滑稽な、無恰好な姿を見た時の驚きと喜びをも、彼は同様想ひ出したのであ

る。彼はもう一つ極めて幼い頃の想ひ出を持つてゐた。それは他の者には馬鹿々々しく思はれるけれど、現在のそれを心の中に秘めてゐる常人に取つては、何か豫言的な夢の様な神祕に充ちた追憶なのである。

「鳶の事を詳細に書き記すのは、屹度余に定つた運命に相違ない」彼は自分の日記の中で此の追憶の事を、かう云ふ風に言つて居る。「外でもない、或時余の未だ極めて幼い頃次の様な夢を見たのである。余が揺り籠の中に臥て居ると、一羽の鳶が余の所へ飛んで来て、余の口を開き乍ら、自分の羽毛を以て、幾度となく余の唇を撫で廻した。それは丁度余が一生涯、翼の事のみ語り續けると云ふ兆の様であつた」

此の豫言は的中した。實際人間の翼と云ふ事は、彼の一生中最後の目的となつたのである。今も再び此の白山の坂路で、四十年前の少年レオナルドと同じ様に、彼は人間が翼を有つてゐないと云ふ事が、堪へ難い侮辱であり且つ不可能な事である様に感ぜられた。

「一切を知る者に取つては一切が可能なのだ」と彼は考へた。「只知りさへしたならば、翼は必ず出来るのだ！」

## 一

もう頂きに近い徑のとある曲り角で、誰やら後から着物の端を掴まへる様な気がしたので、レオナルドは振返つて見ると、それはデオヴンニ・ペルトラフィオであつた。

デオヴンニは目を細め、首を前へ屈め、片手で帽子を抑へながら、一生懸命に風と戦つてゐた。見受けた所、彼はもう前から大きな聲で呼んでゐるのだが、風に聲を取られて了ふらしかつた。師が彼の方へ振返つた時、此の荒寥たる死の如き高山の上で、長い髪の毛をばら／＼と振り亂し、長い鬚を風で肩の後ろへ吹き靡かせ、目の中にも深い額の皺の中にも、嚴めしく聳めた眉の中にも、不撓不屈の容赦なき意志と思想の表情を浮べた彼の顔は、まるで別人の様に恐しく見えたので、弟子は殆ど人違ひかと思つた程である。暗紅色をしたマントのゆつたりした髪は、風に揉まれてまるで大きな鳥の翼か何ぞの様であつた。

「たつた今、フローレンスから参りました」とデオヴンニは叫んだが、その聲は風の咆哮の爲めに、まるで囁いてゐる様に聞えた。只「重大な……手紙……今直ぐ……渡せ……お吩咐け……」と云ふ、断れ／＼の言葉が聞取れるのみであつた。

レオナルドは、ツェーザル・ボルジアから手紙が届いたのだなと察した。

デオヴンニはそれを師に渡した。畫家は直ぐボルジア公の秘書官、アガピトの手蹟を見分ける事が出来た。



「下へお降り！」寒さの爲めに紫色になつたチオヴンニの顔を見乍ら、彼はかう叫んだ。「私は直ぐ後から行く……」

ベルトラフィオは灌木の枝に掴まつて、小石に足をむらせ乍ら、背を屈め身を縮めて、急な坂路を下りて行つた——其の様子が如何にも小さくて、意氣地がなく弱々しいので、今にも嵐が彼を草の葉の様に持上げて、何處かへ運んで行きさうに思はれた。

レオナルドはその後を見送つてゐたが、弟子の憐れな姿が師に彼自身の弱さを想ひ起せた。それは彼の一生に付き纏ふ無力の呪ひであつた。巨像と「最後の晩餐」の無意味な崩潰、機械工アストロの墜落、彼を愛する人々の不幸、チュザレの憎悪、チオヴンニの病氣、少女マイヤの目に浮んだ迷信的な恐怖、恐しい永久の孤獨——かうした無数の失敗の連続が想ひ浮べられた。「翼！」と彼は考へた。「一體これも私の爲るすべての事と同じ様に、空しく減びて了ふのだろうか？……」

ふと病めるアストロが讒語の様口走つた言葉が、彼の記憶に浮んで來た。それは人の子が無限の深淵の恐怖と、飛行の歡喜を以て誘惑する者に答へた言葉である。「主の神を試むる勿れ」

彼は頭を上げて、尙一層嚴然と薄い脰を引き締め眉を擧めつゝ、風と山とを征服し乍ら再び

坂路を登り始めた。

やがて徑が消えて見えなくなつた。彼は嘗て以前誰一人通つた者が無からうと思はれる様な裸石の上を踏み乍ら道もない處を進んだ。

もう一奮發今一足——と彼は斷崖の突端に立止つた。もう先へ行く事は出來ない。只飛んで行けば行ける丈けである。岩石は盡きて急に切れて了つた。そしてその向う側には、今見えなかつた反對の絶壁が展けたのである。ぼうと霞んだ、濁つた瑠璃色の、空氣の深淵がわつと大きな口を開いて、まるで自分の足下にあるのは地面では無くて、頭上にあるのと同じ無限にして空虚な大空が續いてゐる様な氣がするのであつた。

風は旋風に變つて、まるで凄まじい雷鳴か何ぞの様に、轟々と耳許に騒ぎ始めた。それは丁度目に見えぬ速力の早い凶鳥が群をなして、大きな翼をひう／＼とならし乍ら、後から／＼と飛び過ぎるかの様であつた。

レオナルドは屈み込んで深淵の中を覗つた。と不意に又、少年時代から經驗してゐる飛行の必要必然と思ふ心が、以前に倍する力を以て彼を捕へたのである。

「出来る」と彼は呟いた。「翼は出来る！ 若し私が成功しなかつたら、誰か他の人が現れるだらう。兎に角人間が飛ぶ様になるのだ。精靈が言つたのは嘘でない。智慧の實を味ひたる人々

は翼を得て、神々の如くなるべしだ！」  
 彼は心の中で一切の境界と重壓を征服して、光榮と力に充ちた空中の王たる人の子を想像して見た。それは雪の如く白い巨大な翼を持つて、碧瑠璃の空を翔ける偉大なる白鳥なのである。

恐怖に似た歡喜が彼の心を充した。

## 一一

彼がアルパノ山を降りて行つた時、太陽はもう没しようとして、その濃厚な黄色い光線を受けた糸杉は墨の様に黒く、遠ざかり行く山々は、紫水晶の様に優しく透明に見えた。風は次第に弱つて行つた。

彼はアンキアノ村に近づいた。とある曲り角を出外れると、忽然として下の方の、搖籠に似た深い居心地の好さうな谷合に、暗い小さなギンチの部落が現れた。全部が山蜂の窩のやうな恰好をして、黒い糸杉に似た城の塔が見えてゐた。

彼は立留つて覚え帳を取出し、次のやうな言葉を書き留めた。

「勝利者なる言葉より名を得たる山より(Vincereは伊太利語で打勝つと云ふ意)偉大なる鳥は

最初の飛翔を試むべし。そは大なる白鳥の背に乗りたる人間にして、世界を驚嘆の聲に充たし、すべての書を己れの名を以て蔽ひ盡すべし——彼を生みたる巢に永遠の光榮あれ！」

白山の麓に位した自分の故郷を一瞥しながら、彼はもう一度繰返した。

「偉大の白鳥を生みし巢に永遠の光榮あれ！」

アガピトの手紙は、目前に迫つたフエンツアの攻撃に用ゐる攻城機を建造する爲めに、至急ツニーザルの陣へ赴任すべしと云ふ、新任技師に對する命令であつた。

二日の後レオナルドは、ローマニヤなるツニーザル、ボルジアの許を指して、フローレンスの町を出發した。

## 第十二編 皇帝か然らずんば無か

150

「神の御恵に依りてローマニヤ王たり、アンドリヤ公たり、ピオムビノ其の他(中略)の主権者たり、又聖羅馬教會の旗手兼長官たる予ツェーザル・ボルジャ・デ・フランチャは、予の部下に屬するすべての太守、城代、軍指揮官、備兵隊長、僧侶判事、兵士其の他の臣民に左の如く命令す。

「我宮廷附建築技師長にして一世の敬慕措く能はざる、本書の持參者レオナルド・ダギンチに對して隔意なき好遇を與へ、彼並に其の同行者を無税にて通過せしめ、我國の要塞城等の内部に於ける一切の物を、希望に任せて測量檢閲批判せしめ、且つ必要なる人員を即時供給し、其の他すべての助力を怠り無く與ふべきものなり。上記レオナルドは、予の領内に於けるすべての要塞及び城の監督を委託したる者なるを以て、他の建築技師は如何なる場合に於て、彼の意志に従ふ事を要す。

「基督誕生後千五百二年、ローマニヤに於ける予の即位後第二年八月十八日、バギヤに於てこ

れを下附す。ローマニヤ王ツェーザル」

これが今度の城塞檢閲の爲めに、レオナルドに與へられた通行證明書であつた。

此の頃ツェーザル・ボルジアは羅馬法王と佛蘭西王の保護の下に、ありとあらゆる欺騙と惡逆を行ひ乍ら、羅馬法王がコンスタンチヌス大帝から下賜されたと稱する、古からの教會領地を征服し、正當の君主たる十八歳の青年アストレ・マンフレからファエツツの町を奪取し、カテリナ・スフォルツァからフォルリの町を横領した。二人とも力無い子供と女で、ツェーザルの騎士的な名譽心に信賴を懸けたのであるが、彼は此の兩人を聖天使の牢獄へ投じて了つた。又ウルピノ王とは同盟を結んだが、それはつまり王の武力を奪つた後、まるで大道の追剥が旅人に飛び蒐る様に、不意を襲つて攻撃し、掠奪しようとして云ふ目的なのであつた。

千五百二年彼はボロニヤの領主、ベンチブリオ征服を企てた。それは此の町を占領して新帝國の首都としようが爲めであつた。隣國の君主達は恐惶に陥つた。彼等は自分達も一人残さず、晚かれ早かれツェーザルの犠牲とならねばならぬ、彼はすべての競争者を滅して、伊太利全國の獨裁君主とならうと空想してゐる、と云ふ事を悟つたのである。

九月二十八日ツェーザルの敵に當る大僧正バゴロ、グラギナ(アッリア)公オルシニ、ギテロッツ、ギテリ、オリゴット、ダフェルモ、ベルジャの君主ジアン・パオロ・パリオニ、シエナ王の大使アント

ニオ・ジオルダニ・グベナルフ、バンドルフ、ヘトルッチオなどがカルピヤ平原なるマジオネの町に集つて、ツェーザルに對抗する秘密同盟を結んだ。此の集會でギテロツ、ギテリはハンニバル氣取りの誓を立て、一年間に共同の敵たるツェーザルを、殺すか、牢に入れるか、伊太利の國外に放逐するかして見せると約束した。

マジオネ盟約の噂が世上に傳はるや否や、ツェーザルから侮辱を受けた無數の君主達が、此の同盟に馳せ参じた。加之にウルピノ公國にも反亂が起つて獨立を宣言し、部下の軍隊も彼に背いた。而も佛蘭西王迄が援軍の派遣を躊躇したので、ツェーザルは殆ど破滅の淵に瀕したのである。併し人々に背き棄てられて、殆ど武力を失つてゐ乍らも、ツェーザルは依然として恐るべき人間であつた。狭量な評ひや動搖の爲めに、ツェーザルを滅す絶好の機會を逸して、聯合派は彼に協議を許し一時的休戦を承諾した。彼等は狡智と威嚇と約束を以て、敵方を手中に丸めて籠絡し、互の間を離間したのである。獨特の巧妙を極めた偽善の假面を被つて愛嬌の滴る様な態度で敵を魅了し乍ら、彼は新たに降伏したばかりのシニガリヤと云ふ町へ彼等を招待して、今度は言葉の上ばかりでなく、共同の遠征と云ふ實行の上に於て、自己の信服の情を示さうと申出たのである。

レオナルドはツェーザル・ボルジヤの近臣中でも、重要な位置を古めた一人であつた。

彼はツェーザルの命に依つて、占領された町々を壯麗な建築や、宮殿や、學校や、圖書館などで飾つたり、カステル・ポロニエゾの要塞の廢墟に、ツェーザルの軍隊を入れる兵營を建てたり、アドリア海の西岸で屈指の良港たる、ポルト・チエザナチコの築港をして、それをば運河に依つてチエザナ川と連絡したり、ピオムピノに強固な要塞を築いたり、軍用器械を發明したり、地圖を拵へたりなどした。かうしてウルピノ、ペザロ、イモラ、ファエンツァ、チエザナ、フォルリ等、すべてツェーザルが血腥い功名を建てた町々を、主君に隨つて巡歴しながら、例の如く簡單で正確な日記をつけたのである。併し此の日記の中には、まるで自分の周圍に起る事が見えなかつたのか、それとも見度くなかつたのかと思はれる程、ツェーザルの事は一語として認めてなかつた。その途上で見聞した極めて些細な事柄を、洩さず書き留めて居るのであつた。例へばチエゼナの農夫が葡萄の蔓を以て、果樹と果樹を繋ぎ合す方法だとか、シエナの寺院に吊してある鐘を槓杆で自然に動かす装置とか、リミニの町で噴水の音が奏する、不思議な靜かな音楽だとか云ふ様な類であつた。彼はウルピノの城内にある、螺旋階のついた塔や鳩小屋などを寫生した。それはツェーザルに掠奪された不運なグキドバルド公が、當時の人々の言葉を借りると、『下欄袴一枚で』逃げ出した城であつた。又ローマニヤでは、アペニン山脈の麓に住んでゐる牧夫達が、角笛の響を強くする爲めに開いた先の方を、深い洞穴の小さな口に當てがひ乍ら吹く、と

云ふ事をも観察した。すると宛然雷霆の様な響が谷を充し、反響に依つて繰返されるので、何んなに遠い山で遊んでゐる家畜の群でも、それを聞付けずには居られないのであつた。又彼はピオムビノの荒寥たる海岸に只一人立つて、波が後から後からと押寄せて来て、色々な物の破片や、木片や、小石や、海草などを吐き出したり又吸ひ込んだりする様を、幾日もくちつと眺める事もあつた。「かうして波共は獲物の爲めに戦つてゐるが、それは一人の勝利者の手に歸するのである」と、かうレオナルドは日記に記した。彼は自身の周囲で人類の正義の法則が悉く破られてゐる間に、彼はそれを非難しようとも辯護しようともしないで、一見した所偶然の氣紛れの様に見えるけれど、其の實一定不變の規則正しい波の運動の中に、「第一動力」に依つて定められた神聖なる機械學の、犯すべからざる公平な法則を觀じたのである。

千五百二年六月九日羅馬近郊のチル川で、ファエンツァの若い君主アストレと、その弟の死體が発見された。それは絞め殺した上に石を首へ結へ付けて、聖天使の牢獄から川の中へ抛り込んだのである。當時の人々の言葉に依ると、此の二人の死體は何とも言へない程美しくして、これに似た死體は千の中に一つと見付からぬ程であつたが、不自然な暴行を加へられた痕を歴々として残してゐた。世間の人々は、此の惡逆はツェーザルの所業に相違ないと噂し合つた。此の頃レオナルドは自分の日記の中で、次の様な事を記入してゐる。

「ローマニヤでは四輪の馬車が使用されてゐる。前の二つが小さくて後の二つが大きい此の車の装置は、實に馬鹿げたものである。何故なれば物理學の法則に依つて（拙著『原子』第五章參照）全體の重量が前輪に懸るからである」

かうして彼は精神的均衡の法則の大違反を默過して、ローマニヤの馬車の構造に現れた、物理學の法則の違反に憤慨してゐるのであつた。

## 二

千五百二年十二月下旬ヴレンチノ公ツェーザルは、廷臣一同并に軍隊を引率れて、チェゼナの町を出發し、シニガリヤから二十哩ほど隔つた、アドリヤ沿岸のアルツィラ川に臨んだフノ市に移つた。それは舊聯盟諸侯オリエラト・ダフェルメ、オリシニ、及ゼテリ等との會見地に定められた所である。此月の終りにレオナルドはツェーザルの許をさして、ペザロの町を出發した。

朝出立の時には、日暮頃までに目的地へ到着の豫定であつたが、途中雪嵐が起つて、山々は到底踏み渡る事の出来ない雪に蔽はれて了つた。驟馬はのべつ、躓いてばかり居た。蹄が凍つた石の上を走るのであつた。峻しい絶壁の上を蜿つてゐる、狭い山路の左に當つて、遙か下の方でアドリア海の黒い波が白い岸に當つて碎け乍ら、轟々と鳴り響いてゐた。突然驟馬がよろ／＼

と跟<sup>お</sup>めいて、案内人をひやりとさせた。それは白楊<sup>オウゴン</sup>の枝でぶら／＼してゐる、首吊人の匂ひを嗅ぎ付けたのである。

黄昏れて来た。一行は賢い動物に一切を委せる積りで、手綱を放して出鱈目に進んで行つた。ふと遙か彼方で小さな火がちらつき始めた。案内はフアノとベザロの丁度真中に當る、ノギララと云ふ山間の小村に立つてゐる、大きな宿屋の火だと氣が付いた。

一行は要塞の門の様に、一面に紙を打つた大きな扉を、長い間叩かなければならなかつた。やつとの事で寝惚け面をして角燈を提げた馬丁と、それに續いて宿の主人が出て来た。彼は斷然宿を斷つた。彼の言葉に依ると、室がみんな塞つてゐるばかりでなく、既までがぎし／＼に填つてゐて、今夜は何の寢臺も何の寢臺も、三人や四人一緒に寝てゐない所はない。而もそれが皆王に扈從してゐる廷臣や武官で、身分の高い人達ばかりであつた。

レオナルドが名を名乗つて、王の印や署名の附いてゐる通行證を見せた時、亭主は急に詫や愛嬌を撒き散して、自分の居間を明渡すと言ひ出した。そこは今同盟國たる佛蘭西軍に屬する、イヴ・ダレグル支隊の長官が三人切りで占領して、散々食ひ酔つた擧句、死人の様になつて寝てゐる所であつた。亭主は女房を連れて、鍛冶場の隣の小部屋へ立退くと申出た。

レオナルドはローマニヤの宿屋に必ず附物の、食堂兼料理場と云つた様な室へ入つて行つた。

それは煤で燻つた汚い室で、壁紙の張つてない剥き出しの壁はぼろ／＼落ちて、濕氣の爲めに汚染だらけになつてゐるし、棲り木の上には雞や珠雞<sup>トウキ</sup>が眠つてゐるし、格子で圍つた小屋の中では仔豚が黄色い聲で鳴いてゐた。その外黄金色をした玉葱が山の様に積んであるかと思へば、眞黒になつた天井の梁には、血の垂る様な腸詰やハムが吊してあつた。上から煉瓦の煙突の垂れ下つた大きな煖爐では火が盛に燃えて、丸の儘の豚が焼串にさされて、しう／＼音を立てて居た。客人達は細長い卓に向つて、赤い焰の反射に照らされ乍ら、食つたり、飲んだり、怒鳴つたり、口論したり、骰子や將棋や歌留多などを闘はしたりしてゐた。レオナルドは注文した晚餐が出来るのを待ち乍ら、火の傍に一寸腰を下した。

直ぐ隣の卓にはツニーザル公の槍兵隊長をしてゐる、年取つたバルダザレ・スチピオネ、宮廷附の會計長官アレクサンドロ・スバノキヤ、フエララの使臣バンドルフ・コレヌチオなどと云ふ顔馴染の人々がレオナルドの目に留つたが、さう云ふ人達を聴手にして、一人の見知らぬ男が兩手を振廻しながら、恐しく興に乗つたやうな風付で、細い黄色い聲を絞つて話をしてゐた。

「諸君、私は古今の歴史から例を引いて、これを數學的に正確に證明してお目に掛けます。すべて軍事の方面で名譽を獲得した國家を考へて御覽なさい——羅馬人でも、スバルタ人でも、雅典人でも、エトリア人でも、アケーヤ人でも、それからアルプスの彼方に住む多くの民族で

も、すべて偉大なる征服者は自國民の中から軍隊を集めたものです。ミノス(アッソリアヤ紀元前二千年)はア、シリヤ人から、キルスは波斯人から、アレクサンドルはマケドニヤ人から……尤もピロスやハニバルは傭兵を率ゐて勝利を博したけれど、それは指揮官が並々ならぬ巧妙な手段で、異國の兵士らに國民軍と同様の、勇壯果敢の精神を鼓舞し得たからです。それに何うか兵學の根本基礎とも云ふべき、一番大切な點を忘れないで下さい。軍の決定的な力は歩兵に在るのです。いゝですか、只歩兵のみで、騎兵でもなければ飛道具や火薬でもありません。そんなものは新しい時代の考へ出した馬鹿々々しいものですよ……」

「少し調子に乗り過ぎる様ですね、ニコロさん」槍兵隊長が慇懃な微笑を浮べ乍ら口を入れた。「現今大砲は日増しに重大な意義を有して来る様になりましたよ。あなたがスパルタ人や羅馬人を何んなに讚美しても、現代の軍隊が古代のものに比べて、遙かに優れた武器を供給されてゐる事は、立派に斷言し得ると思ひます。あなたのお氣に障つたら困りますが、佛蘭西軍の騎兵中隊や、臼砲三十門も持った砲兵隊は、あなたの好きな羅馬の歩兵隊は愚か、大きな岩でも顛覆させて了ひますよ！」

「詭辯！ 詭辯！」とニコロ氏は熱くなつて叫んだ。「私はあなたの言葉の中に、現代の優れた武人をして眞理を謬らしめる、恐しい迷妄を認める事が出来ません。見ておいでなさい、今に北

方の蠻軍が伊太利人の目を醒さして呉れますから、其の時彼等は傭兵の憐むべき無力に氣が付いて、騎兵も砲兵も牢固たる正規の歩兵軍に對しては、食ひさしの玉子程の價値もないと云ふ事を、始めて悟るでせうが、併し——時既に遅しです……一體世間の人は何う云ふ譯で明々白々の事實に對して議論するのでせう？ 只一寸ルクルス(羅馬皇帝紀元前六十年)が微々たる歩兵の一隊を以て、アルメニヤ王チグランの五萬の騎兵隊を破つた事でも、考へて見たらよさうなものですがね。此の騎兵隊は今の佛蘭西騎兵隊と全然同じ組織だつたんですよ……」

「オナルドは、ルクルスの戦勝をまるで自分の目で見た様に話してゐる此の男を、好奇の念を抱き乍ら眺めたのである。」

見知らぬ男はフローレンス共和國の高官や、大使館の祕書官などの着る様な、物々しい莊重な裁方をした、襲の眞直に垂れた、暗紅色の羅紗の着物を身に纏つてゐたが、その着物は大分草臥れたやうな様子で、所々大して目には立たないけれど、一寸々汚染が付いて、袖などは大分てか／＼光つてゐた。きつちり鈕を掛けた襟の陰から、細い線を描き乍ら覗いてゐる襦袢の端から判する所、肌着は餘り大して新しいものでは無いしあつた。始終書き物をしてゐる人によく見られる様に、中指に肉刺の出来てゐる節くれ立つた大きな手は、インキの汚染だらけであつた。全體に此の男の外貌には人に尊敬の念を起させる様な、堂々たる所が少しも無かつた。

未ださして年取つてゐない、四十前後の、瘠せた肩幅の狭い男で、顔の輪郭は驚くばかり生々して、險があつて、角ばつて、並外れて奇妙な感じを持つてゐた。時々話の間に、丁度鴨の嘴の様に平つたくて長い鼻を上へ向けて、小さな首を後ろへ反らせ目を細めて、物思はしげに下唇を突き出し乍ら、相手の頭越しに遠くの方を眺める様な恰好をした。その様子はまるで肉食鳥が細長い頸を差し延べて、全身を注意に化し乍ら、非常に遠くの物を狙ふ形に似てゐた。落着きの無い身振りや、髪を剃り落した淺黒いこけた頬から、飛び出した廣い顴骨へ掛けて現れてゐる熱病的な紅の色や、取り分け重苦しい程ちつと一所に据つた、大きな灰色の目の中に、心内の熱火が窺はれるのであつた。此の目は意地悪く見え度がつてゐたけれど、時々冷やかな苦言や辛辣な嘲笑の透間から、何かしら臆病らしい憐れつばい或物が閃くのであつた。

ニコロ氏は戦闘に於ける歩兵有力説を、何處までも敷衍し續けたが、レオナルドは此の男の言葉の中に眞理と虚偽、無限に大膽な論法と卑屈な古人の模倣とが、互に混淆してゐるのに一驚を吃した。ニコロは火砲の無益な事を證明し乍ら、遠距離に於ける砲の照準が極めて困難な爲めに、砲弾は敵の頭上高く飛び過ぎるか、若しくは餘り低きに失して、敵陣に届かない場合が多いと述べた。畫家は自分でも經驗に依つて、當時の大砲の不完全さを知つてゐたので、此の觀察の犀利で正確なのに感心した。併し直ぐその後で、要塞は國家を防ぐ力なしと云ふ意見を披

瀝し乍ら、ニコロ氏は要塞を築かなかつた羅馬人や、市民の勇氣のみを城壁とする爲めに、スパルタの町を固めさせなかつたニコニヤ人などを引合に出した。そしてまるで古人の爲たり考へたりした事は、駁論の餘地のない眞理でもあるかの様に、學校生徒の間で有名なスパルタ人の格言を引用した。それは雅典の城壁を嘲つたもので、「若し町の中に女ばかり住んで居るとしたら、その城壁は有益なものだつたかも知れない」と云ふのであつた。

此の議論の終りをレオナルドは聞かなかつた。それは亭主が寢床の用意をした二階の部屋へ、彼を連れて行つたからである。

### 三

朝になると雪嵐は益々烈しく吹き募つた。案内者はこんな天氣には優しい人間は、犬さへ家の外へ出さないと云つて、出立を拒むのであつた。で畫家はもう一日此處に逗留しなければならなかつた。

所在のない儘に、彼は自分の發明した自動廻轉焼申を、料理場の煖爐に取り付け始めた。それは幾枚かの薄板を斜に並べてくつ付けた大きな輪が、煙突の中の暖い空氣の引力に依つて動き乍ら、同時に焼申を廻す様な装置なのであつた。



「此の器械があつたら」レオナルドは呆れ顔をしてゐる見物に向つて、かう説明した。「料理人は肉が焼け過ぎはしないか、と心配する事がなくなつて了ふ。何故と言つて熱の度は何時と同じで、若し火氣が強過ぎれば焼串も早く廻るし、火氣が弱ければ焼串の廻轉も遅くなるからだ」レオナルドは人間の翼を作る時と同じ位の愛と感興を以て、此の完全な庖厨用の焼串を取り付けるのであつた。

同じ室の中でニコロ氏は、向う見ずな博奕打である、若い佛蘭西砲兵隊の曹長共を捕まへて、彼自分の言葉を借りると、「娼婦の様な運命の女神」の氣紛れを征服して、間違ひなく骰子遊びに勝つ規則を説明して居た。それは彼が抽象的な數學の法則から発見したものだ、と云ふ觸れ出しであつた。彼は此規則を辯舌爽かに論理的に述べたけれど、それを實地に證明しようと試みる度に敗けて了つた。彼自身は少からず驚いたが、聴手の方は小氣味よげに笑ふのであつた。けれど彼は規則は正しいのだけれど、それを實地に適用する際誤謬を犯したのだ、と云つて自ら慰めた。勝負はニコロ氏に取つて不愉快な談判で終つた。外でもない、いざ清算となつたとき、彼の金入が空つぽであつて、彼は借金勝負をしたのだ、と云ふ事が分つたからである。

其の晩遅く山の様な荷物や箱や、無数の召使や、小姓や、馬丁や、道化者や、女黒奴や、様々な面白い動物を連れた、レナ・グリファと云ふゼニスの高等娼婦がやつて來た。それは嘗てフロ

レンスで、ザラナロラ長老の率ゐる小審問官の神聖軍に襲はれて、危く憂目を見ようとした例の女である。

二年前多くの朋輩に倣つて、「悔い改めたるマダグレナ」氣取りで、尼僧の中へ入つて行つたが、それはたゞ後で「名譽娼婦名簿、一名外國名士の案内書、ゼニスに於けるすべての名譽娼婦の定價及性質、附手引女名簿」と云ふ本に記された、自分の定價を引上げようが爲めなのであつた。かうして黒い尼僧の衣の中から、華々しき蝶々が飛び出したのである。レナ・グリファは、ぐんぐんと出世して行つた。全盛の名譽娼婦の常として、ゼニスの街で育つた「可愛い子」が、素晴らしい系圖を作り上げた。それに依つて見ると、彼女は正真正銘間違なしに、ミラン王の弟アスカニオ・スフォルツァ大僧正の落し胤と云ふ事になるのであつた。その頃彼女は老いぼれて半ば耄碌した、底の知れない程金持ちの或る大僧正の愛妾となつた。此の大僧正が今ツェーザル・ボルジアの廷臣に交つて、彼女の到着を待ち兼ねてゐるので、レナはゼニスからファノの町へ赴く途中なのであつた。

宿の亭主は困じ果てた。大僧正の愛妾たる此の貴婦人に、宿を断ることも出来兼ねるし、それかと言つて空いた室も無いのであつた。到頭アンコナの商人連と妥協して、勘定から一定の割引をするからと云ふ約束で、鍛冶場の方へ引移らせ、その寢室を高貴なる賣笑婦の從者に譲ら

す事とした。所で當の女主人公の爲めに、亭主はニコロ氏と、その同宿人たるイヴ・ダレグル隊の佛蘭西騎兵に向つて、その室を明渡して矢張り鍛冶場へ引越し、商人連と一緒に寝て呉れと請求した。

ニコロは眞赤になつて腹を立て、亭主に向つてあんな行き當りばつたりの淫賣女の爲めに、身分ある紳士に對してこの様な無禮を働くとは、一體氣でも狂つたのではないか、全體對手を誰だと思ふのかと詰問し初めた。けれども其處へ内儀が割り込んだ。これは氣の強い話好きで、「猶太人に舌を買入れしなかつた」女であつた。彼女はニコロ氏を捕まへて、そんなに悪口ついたり暴れたりする前に、自分の食べた物や、侍僕や三頭の馬の宿賃を拂ふのが當り前だ。それから序に亭主が人の好い爲めに、先週の金曜日に貸してやつた、四ドゥカートドゥカートの金も返して呉れときめ付けた。それから獨り言のやうな調子であつたが、それでも傍に居合す人々に聞える位な聲で、此の頃大道をうろくし乍ら、何か大變な身分の高い人間か何ぞの様に觸れ廻してゐる、野師か乞食の様な連中には碌な復活祭復活祭は出来やしない。人の物を只食ひしてる癖に、正直な人間を掴まへて豪さうに威張散らすのだ——と呟いた。

此の女の言葉には幾分の眞理が含まれてゐたらしく、ニコロ氏は急に靜かになつて、内儀の容赦ない視線を避けて目を伏せた。そして何うかして體裁よく此處を逃げ出し度いものだと、

思案してゐるらしい様子であつた。

下男共は彼の荷物を室の外へ運び出した。レナの祕藏してゐる醜い小猿は途中ですつかり凍えて了つて、さも憐れつぽく顔を撃め乍ら、ニコロ氏の書類やペンや書物の載つてゐる、卓の上へ飛び上つた。その書物の中にはチート、スリギウススリギウスの年代記や、ブルタルクの英雄傳などがあつた。

「あなた」レオナルドは愛想のいゝ微笑を浮べ乍ら彼の方へ振向いた。「若し私と一緒に寝るのがお厭でなかつたら、私は此の詰らない義務を盡すのを自分に取つて名譽に存じます」

ニコロは幾分驚いた様な風で彼の方へ振返つて、前より餘計どぎまぎしたが、直ぐに心持を取り直して、品位のある態度で好意を謝した。

彼等はレオナルドの室へ移つた。畫家は此の新しい同宿人に良い場所を譲らうとして、色々心配するのであつた。

レオナルドは此の奇妙な男を観察すればする程、益々面白く珍しく感じられて來た。

彼は畫家に自分の姓名と身分を告げた——彼はニコロ・マキアエリと云つて、フローレンス共和国十人代議院の祕書官であつた。

三ヶ月以前狡猾で用心深いフローレンス政府は、ツォーザル・ボルジアと商議する爲めにマキ

アズリを派遣したのである。ツューザルは共同の敵たるベンチブリオ、オルジニ、ギテリなどに對する防守同盟を結ぼうと提言して來たが、それに對しては漠然とした抽象的な友情の表明を以て答へ、ツューザルの奸計の裏を搔かうと云ふ心算なのであつた。實際に於てフロレンス共和國は彼を恐れて、敵にも味方にもし度くないと思つたので、ニコロ・マキアズリには少しも實際の全權を與へないで、只フロレンス商人の爲めに、アドリア海沿岸に於ける王の領地の、通過權だけ得させようとしたのである——それは代議院の辭令に述べてある通り「共和國の養育者」たる貿易に取つて、中々重大な仕事なのであつた。

レオナルドも自分の名を名乗つて、ヴレンチノ公の宮廷に於ける地位を知らせた。二人は全然性格の相反した、孤獨な、瞑想的な人々によく見られる様な、自然な氣輕さと信賴の念を覺えながら、盛に話し込んだのである。

「レオナルドさん」とニコロは直ぐに白狀した。此の正直な態度が畫家の氣に入つたのである。「私は勿論あなたの大畫家だと云ふ事を聞いてゐます。併し前以てお断りして置きますが、私は畫の方はまるで分らないし、又好きでもないのです。尤も嘗てダンテが街を歩いてゐる時、自分を侮辱した一人の悪戯者に向つて、「お前が自分の物を百呉れても、私の物は一つもやりはしないから」と答へたさうですが、藝術の方でも私に向いて、それと同じ事を答へるかも知れま

せんね。併し私の聞いた所では、ヴレンチノ公はあなたを軍事科學の大學者と信じてゐられるさうですから、此の事に就いて、何時かあなたとお話がして見度いと思つてゐたのです。私は何時も考へてゐましたが、これは注意に價する重大な學問です。何故と云つて、各國民の平和的威力は軍事的威力、即ち常備軍の數と質の上に築かれるからです。此の事は「君主國と共和國」と云ふ私の著書の中で證明します。その本はあらゆる國家の生活、生長、衰退、死滅を司る自然律を、丁度數學者が數の法則を論じ、自然科學者が物理や機械學の法律を決する様な態度で、正確に定義して見る積りなのです。何故と云つて今迄國家に關する著述をした者はすべて……」

此處まで言つてから彼はふと氣がついて、人の好ささうな微笑を浮べ乍ら言葉を切つた。

「失禮しました！ 私は何うやらあなたの御好意を濫用し過ぎる様です。多分あなたも政治の方は、私の繪と同じ様に餘り興味をお持ちにならないでせうね……」

「いや、いや、それ所ぢやありません」と畫家は答へた。「併しねニコロさん、私もあなたと同じ様に正直な所を言つて了ひませう。私も本當の所世間の人の有り觸れた戦争や、政治の話が好きません。何故つてそれは虚偽で皮相の物だからです。けれどあなたの御意見は世間多數の意見とまるで違つて、如何にも新しく奇抜ですから、私は全くの所愉快に拜聴してゐますよ」

「おゝレオナルドさん氣をお付けなさい」とニコロは尙一層お人好しらしく笑ひ出した。「後

で後悔なさる様な事がないとも限りませんよ。あなたは未だ私を御存知ないのです。だつてこれは私の十八番ですから、一旦始めたらあなたが黙れと命令なさる迄、決して止めやしませんからね。私は三度の飯を食して貰はなくつても、賢い人と政治論さへさして貰へばいいのですよ。併し困つた事には、その賢い人が何處にも見付からないのです。フローレンスの元老達は、羊毛や絹の値段の外何一つ知らうとしません。所が私は運命の神のみ心でかう云ふ人間に生れついたと見えて、「彼は誇らしげな、とは云へ苦い薄笑ひを浮べた。「損得の話も羊毛や絹商業の話もまるで出来ないものですから、ちつと黙つてゐるか、それとも政治の話をするか、二つに一つを選ぶより外仕方がないのです」

畫家はもう一度彼を落着かせて、實際面白く感じられた話を復活させる爲めにかう訊いた。

「ニコロさん、あなたは今かう言はれましたね。政治は數學を基礎とした自然科学と同じ様に、實驗と觀察に依つて正確を期する科學でなければならぬ、とかう云ふ風に私は解釋しました」

「さうです、さうです」とマキアエリは眉を擧めて目を細めつつ、レオナルドの頭越しに向うの方を眺め乍らかう言つた。その様子は全身を注意に化し乍ら、細長い頸をさし伸べて、非常に遠くの方の獲物を狙つてゐる、肉食鳥の姿に似てゐた。

「事に依つたら私にはそれを仕遂げる事が出来ないかも知れません」と彼は語り續けた。「併し私は嘗て前人が語つた事のない様な人類の事業に關する言葉を、世間の者に示してやらうと思ふのです。プラトンはその『理想國』に於て、アリストテレスは『政治論』に於て、聖アウグスティヌスは『神の町』に於て、其の他すべて國家に就いて著述をした人々は、最も重要な一事を看過してゐます。それは外でもない、人間の意志や善悪を超越した自然律です。これが各民族の生活を支配してゐるのです。すべての人は只善若くは悪と感じられ、高潔又は卑劣と思はれる事のみを語つて、單に理想としては望ましいけれど、實際に於て存在もしなければ亦存在し得ない様な政體を空想して居るのです。私は數學家が數の性質を究め、解剖學者が人體の組織を學ぶ様に、共和國又は君主制と呼ばれる偉大なる肉體の性質を、愛も憎みも賞讃も非難もなく、冷靜に研究し度いのです。私だつてこれが困難で危険だといふ事は知つて居ます。何故と云つて眞理を憎み且つこれに報ゆる事、政治界に於ける程甚しい所はないからです。けれどそれでも私は彼等に眞理を示します。たとへジロラモ長老の様に火炙りにされても構ひません」

レオナルドは、不思議な氣狂ひめいた光りに燃えるマキアエリの目や、其の顔などに表れた豫言者的な、それと同時に小學生のやうに輕はずみな大膽不敵の表情を、我れともなしに微笑を舍んで觀察し乍ら、心の中でかう考へた。

「冷靜を説く此の人自身が何と云ふ興奮の仕方だらう！ 公平無私を語る態度が何と云ふ熱情的な事だらう！」

「ニココロさん」と畫家は言つた。「若しあなたの此の計畫が成功したら、あなたの発見はエウクレイダスの幾何學、アルキメデスの機械學に劣らない位、偉大なる意義を有するに相違ありません」

レオナルドは實際ニココロ氏の言葉の新しさに驚かされたのである。彼は三十年以前人體の内臓を描いた本を完成した時、傍の方の餘白に、「天なる神よ、今余が人體の内部組織を研究するが如く、人間の性癖習慣を研究する事にも助力を與へ給へ」と書いた事を想ひ出した。

## 四

二人は長い事話をした。レオナルドは何かの序でにニココロに向つて、昨日槍兵隊長との話に、要塞や火藥や、大砲の有してゐる、一切の軍事的價值を否定したのは何う云ふ譯か、あれは單なる冗談なのかと訊ねた。

「戰術上絶對の教師たる古のスパルタ人や羅馬人は、火藥などと云ふ物は考へても居なかつたぢやありませんか」

「併し經驗と自然の認識は」と畫家は叫んだ。「古の人が思ひも初めなかつた多くの事物を、我に啓示して呉れたではありませんか。今でも尙一層多くの物を啓示しつつあります」

マキアゼリは飽く迄自説を主張した。

「私の考へでは」と彼は繰返した。「軍事及び政治の方面に於て新しい民族は、古人の模倣を避ける爲めに誤謬に陥つてゐます」

「一體そんな模倣が可能でせうか？」

「何うして不可能なんでせう。全體人間でも自然でも、空でも太陽でも、自分の運動や秩序や力を變へて、古とは違つたものになつたとしても仰有るんですか？」

如何なる論證も彼の信念を動かす事が出来なかつた。他のすべての點では大膽不敵な彼が、古代歴史の話となると、突然街學的な學校教師か何ぞの様に、臆病で迷信的になるのに、レオナルドは氣付いたのである。

「此の人は偉大な理想を抱いてゐるが、何んな風にそれを實現するだらうか？」と畫家は考へた。先程の骰子勝負でマキアゼリは巧みに抽象的な規則を説明し乍ら、それを實地に證明する段になると、何時も負けて了つた事を、我れともなしに想ひ浮べるのであつた。

「ねえレオナルドさん」ニココロは議論半ばに、抑へる事の出来ない歡喜を目に閃かせ乍らかう

叫んだ「私はあなたの話の聞けば聞く程、彌々驚異の念に堪へません——自分の耳を信じる事が出来ない程です!……ねえ、まあ一寸考へて御覽なさい、あなたと私が出會つたと云ふ事は、何と云ふ星の廻り合はせなのでせう! 人間の智慧には三通りの種類があります。第一種は自分で一切の物を見且つ曉る人、第二種は人々に教へられて始めて見る人、第三種は人に教へられも見えないし理解の出来ない人です。第一の者は極めて稀な優れた人で、第二の者は中位に属する良い人で、第三の者は一番有り觸れた何の役にも立たない屑なのです。あなたなどは……いや、餘計な謙遜をする様に思はれるのは厭だから、私自身も御同様に、第一の種類に編入しませう。何を笑つていらつしやるのです? 本當ぢやありませんか。まあ何とお考へになつてもあなたの御勝手ですが、併し私はこれは只事ぢやない、運命の神のみ意が實現されたのだと思ひます。今日あなたと出會つた様な機會は、私の生涯に於てさう容易く繰返されはしません、何故と云つて私は此の世に賢い人が少いのを、よく承知してゐるからです。此の會談を記念する爲めに、何うかりギウスの年代記の一番美しい場所を讀まして下さい。そして私の説明を聞いて頂き度いのです」

彼は卓から書物を取つて、残り少なの蠟燭を引寄せ、鐵縁が毀れたのを丁寧に糸で縛つた、大きな圓い玉の笹つた眼鏡を掛けて、まるで祈禱か何か宗教的な儀式でもする時の様な、嚴かな

敬虔な表情を顔に浮べた。

不完全な組織を有する國家に取つて、戰勝と征服は光榮の緒と云ふよりも、寧ろ滅亡の基である論じた一章を探し出す準備をし乍ら、眉を上げて人差指を立て、銅の如く響くりギウスの莊重なる最初の一句を讀み上げようとした時、入口の戸が靜かに開いて、腰の曲つた皺だらけの小柄な老婆が、忍び足でそつと入つて來た。

「旦那様」と彼女は低く會釋しながら口をもぐぐ動かした。「お騒がせ申しまして洵に恐入りますが、私の主人レナ・グリフ様の飼つてお出でになる、御祕藏の獸が逃げ出しまして——頸に水色のリボンをつけた兎でございます。散々探して探して、足が棒になる程家中掻き廻しましたけれど、何處へ隠れたものか皆目見當が付きませんので……」

「此處には兎なんかでんで居やしない」とニ、エロは腹立たしげに遮つた。「さつさと出て行きなさい」

かう言ひ乍ら、老婆を追ひ出す爲めに立上つたが、ふと眼鏡越しに注意深く彼女を眺めると今度は眼鏡を鼻の先へ下して、更にもう一度硝子の上から見直した後、兩手を鳴らし乍らかう叫んだ。

「あゝアルギジャー! お前だつたのか、老い婆れ婆さん! わしはもう兎共がお前の死骸を鍵

に引つ懸けて、地獄へ引摺つて行つた事と思つてゐたよ……」

老婆は視力の鈍い狡猾らしい目を細めて、相手の優しい罵言に答へる爲めに齒の無い口を開けてにや／＼した。その爲めに彼女の顔は尙一層醜くなつた。

「ニココロ様でしたか！ まあ幾年振りでせうねえ！ 本當に神様がもう一度あなたと引合はせて下さらうとは、夢にも思ひ初めませんでしたよ……」

マキアエリは畫家に詫を言つて、アルギジャを臺所へ誘つて、一喋り昔話をしに行かうとした。併しレオナルドは決して邪魔にならないからと引留めて、自分は書物を取つて傍の方へ腰を下した。ニココロは侍僕を呼んで、まるで自分が此の宿の一等客でもある様な風付で、酒を持つて来るように命じた。

「いゝか、お前あの悪黨の亭主にさう言つて呉れ、今後は此の前出した様な酸っぱい酒を持つて來たら承知しないつてな。何故と言つてわしやアルギジャは、悪い酒が嫌ひなんだからな。アルロット牧師でさへも、聖餐の時に酒が悪かつたら、こんなものは主の血に成る筈がないと言つて、決して膝を突かなかつたと云ふ話だからなあ！」

アルギジャは鬼の事を、ニココロはリギウスの事を忘れて了つて、昔馴染のやうな風付で酒瓶を前にし乍ら喋り出した。

話の様子から察する所、老婆も嘗て昔は名譽娼婦であつたが、其の後フロレンスで妓樓の女將となり、ゴニスで手引女と早變りして、今ではレナグリフの衣裳部屋の鍵を預る老女を勤めて居るのであつた。マキアエリは二人の共通の知人の事や、十五になるアタランタと云ふ目の碧い少女の事など訊ねた。此のアタランタは色慾の罪の話をしてゐる時に、無邪氣な微笑を浮べ乍らかう叫んだのである。「一體これが聖靈を漬す事になるのでせうか？ 坊様や牧師さんなどは、何とでも勝手な事をお説教するがいゝけれど、私は可哀さうな人達に楽しみをさしてやるのが、死んでも賠へない様な罪だなんて、そんな事は何うしても本當にならないわ！」

それから美しいリチャ夫人の事も話題に上つた。此人の良人は他人から妻の不貞を聞かされた時、哲學者のやうな落着き濟した調子で、女房と云ふ物は竈の下の火と同じ事で、幾ら近所の人に分けてやつても、決して減るものではない、と云つたとの事である。又肥つた赤毛のマルミリヤの事も追憶した。彼女は自分の崇拜者の哀願に屈する度に、恭々しく聖像の前の帷を下し乍ら、「聖母が御覽にならない様に」と言つたものである。

ニココロはかう云ふ詰らない猥雑な話になると、まるで魚が水に放たれた様な氣持にならしかつた。レオナルドはフロレンス共和國の秘書官であり、冷靜賢明な話對手であつた人が、怪しい巢窟に出入りしてゐる放埒な遊蕩兒に早變りしたのに一驚を喫した。尤も彼の態度には

本當に愉快さうな所が無かつた。レオナルドは彼の皮肉な笑の中に、心内の悲痛を察したのである。

「全くですね旦那、若い物はすん／＼大きくなつて行つて、古い物が次第に年を取つて行くんですねえ」老い耄れた戀の運命女神みたいに首を振り乍ら、感傷的な調子でアルギジャが語を結んだ。「もう昔とは時代が違ひましたよ」

「嘘をつけ、此の魔法女め、悪魔の御機嫌取りめ！」ニコロは狡さうに瞬きをして見せた。「え叔母さん、神様にお腹を立てさせる様な事はいゝ加減に止めたが宜からう！ 他の女は兎に角として、お前の御主人公などは今有卦に入つて居るぢやないか。今時美しい女で焼餅やきの、厄介な亭主なんか持つてゐるものは有りやしない。それにお前の様な腕つきと仲よくして居たら、本當に左團扇で暮せるよ。何んなに誇の高い貴婦人でも、金の爲めに體を自由にさせる世の中だ——今は伊太利全國に手引商賣と放埒な習慣が行渡つて、卑しい商賣の女と素人とは、只黄色い徴で區別が出来る位なものだ……」

此の黄色い徴と云ふのは、群集の中で良家の婦人と混同しない爲めに、娼婦が必ず頭に着ければならぬ様に法律で定められた、特別な泊夫藍色の鉢巻であつた。

「まあ旦那、そんな事を言はないで下さいよ！」と老婆は惱ましげに吐息をついた。「今の世の

中は古と比べたら、まるでお話になりやしませんよ。現にかう云ふ事を考へて見た丈けでも分ります。つい此の間まで伊太利で佛蘭西病などは、まるで聞いた事も有りませんでした——私達はみんな基督様の懐の中に住んでゐる様でしたよ。それから今仰有つた黄色い鉢巻——あゝあ、本當に災難ですよ！ まあ何うでせう、先の謝肉祭の時にも危く私の御主人が牢へ抛り込まれる所でしたつけ。まあ思つても御覽なさい、レナ様が黄色い鉢巻をするなんて、一體あらう事ですかね？」

「何故しては不可ないのだい？」

「何を仰有るのです、何を仰有るのです、飛んでもない！ 一體あの高貴な御身分のレナ様が、そんなじよ其處らのやくざ連中を對手にする、娘つ子などと同じ様に出来ますか？ あなたは復活祭の日にあの方の寢床へ掛ける夜具が、法王様のお法衣より立派な事を、御存知でございますか？ 所であの方の御發明で學問のお有りになる事と言つたら、ボロニヤ大學の博士達でさへ、跣足で逃げ出す位だと思ひますよ。まああなた、あの方がベトラルカや、ラウラや、天國の愛の無窮などと云ふ事を論じて居られる所を、一度聞いて御覽なさい！」

「當り前さ」とニコロは冷笑した。「あの女でなくて誰に愛の無窮な事が分るものか！」

「まあお笑ひなさい旦那、幾らでもお笑ひなさい。だけどかう云ふ事があるんですよ。若しこ



それが嘘だつたら、私は此の場から立てなくなつて了ひます。此の間あの方が或一人の可哀さうな若い人に、これから心を入れ變へて、善行の修行をするがよいと云ふ手紙を詩で書いて、それを讀んで聞かして下すつた時、私はちいつと一心に聞いて居る中に、到頭泣き出して了つたのですよ。丁度サンタ・マリヤ・デル・フィオーレ寺院で、お亡くなりなされたジロラモ長老のお説教でも聽いてゐる様に、かう魂をぐつと引つ摺んで了ふのでございます。全く新しいシセロですよ！立派な身分の殿方が、只あの方からプラトニクな愛の神祕を聞く丈けで、他の女が一晩中に貰ふより二ドゥカートか三ドゥカート位少いか知れませんが、莫大な金をお拂ひになるのも、道理な事でございますよ。それだのあなたは黄色い鉢巻だなんて！」

終りにアルギジャは自分の若い時の物語をした。其の頃彼女も美しかつたので、多くの人にちやほやされて、彼女の氣紛れと云ふ氣紛れで叶はない物が無かつた。そして彼女もありと有らゆる事をし盡した。一度なぞパドヴァの寺院の寶藏で、大僧正の被つてゐる法冠を取つて自分の女奴隷に被せた事があつた。併し年と共に容色も移らつて、崇拜者の數も段々と散つて行き、遂には貸間や賃洗濯で暮さねばならなくなつた。その中に病氣して極度の貧困に陥り、いつそお寺の入口で施しを乞うた上、その金で毒を買つて飲み度いと思ふ位になつた。けれど聖母マリヤが彼女を死から救つて呉れた。ある年取つた方丈に、隣に住んでゐる鍛冶屋の女房を取持

つたお蔭で、彼女は正しい道に踏み入つて、それから後賃洗濯よりもつと有利な職業に携はる事となつたのである。

彼女の保護者たる聖母マリヤが奇蹟的の助力をした物語は、室の中へ駈け込んだレナの侍女の爲めに中斷された。女主人は猿の凍傷した手に付けてやる膏藥の罐と、ボカチオのデカメロンを出して呉れと、侍女頭に命じたのである。十日物語は高貴なる娼婦の愛讀書で、每晚寝る前に讀んでは、祈禱書と一緒に枕の下へ隠して置くのであつた。

老婆の立去つた後で、ニコロは紙を取出してペンを削り、フロレンスの元老達に宛て、ブレンチノ公ツェーザルの企畫や、行爲に關する報告書の作成に掛つた。それは軽い巫山戯た調子で書かれてゐるにも拘らず、國士としての賢察に充ちた書翰であつた。

「レオナルドさん」突然仕事から目を放して、ちつと畫家を見詰めたが、彼はかう言ひ出した。「白狀なさい、私が先刻スバルタ人や羅馬人の徳性に關する、偉大な壯重な議論をしさせて、不意に遣り手婆さんと娘つ子のお喋りに移つたので、屹度吃驚されたでせう。併し何うか餘り八益しくそれを咎めないで、かうした複雑性は自然その物が、永久の矛盾と變態に依つて我々に教へて呉れたものだ、と云ふ事を想ひ出して下さい。何より一番肝腎なのは、一切恐れ氣なしに自然に従ふ事です！ 全く氣取つて見たつて何になりませう？ 我々はみんな人間なのぢ

やありませんか。あなたは古い昔話を御存じですか？ 哲人アリストテレスが自分の弟子の亞歴山大帝の面前で、夢中になる程惚れてゐる賣女の氣紛れに任せて、四つ匍ひになつて其女を背中に載せてやると、その恥知らずの女は眞裸で古今無類の賢人を、まるで騾馬の様に乗り廻したと云ふ事です。勿論これは昔話ですが、併し其の意味は深長です。若しアリストテレスの様な人でさへ、可愛い娘つ子の爲めにこんな馬鹿な事をしたとすれば、我々の様な罪障の深い人間に何うして我慢が出来るものですか……」

もう夜は更けてゐた。一同は疾うに寢鎮つて、邊りはしんとしてゐた。只蟋蟀が片隅で唱ふ聲と、板仕切の向うでアルギジャが、凍傷に罹つた猿の足に膏藥を塗つてやり乍ら、何やらぼそ／＼と咳く聲が聞えるばかりであつた。

レオナルドは床に就いたが、長い間寢入ることか出来ないで、噛みくたしのペンを手に握つた儘、熱心に手紙の上へ屈み込んでゐる、マキアエリの姿を見詰めてゐた。残少な蠟燭の焰は白い露はな壁の上に、輪郭のごつ／＼した彼の頭臚の影を投げてゐた。矢張り下唇が突き出して、細い頸が矢鱈に長く、鼻は鳥の嘴の様に鋭い。ツューザルの政策に關する報告を書き終へて、包紙を蠟で封印し、いつも急ぎの送り物に書く *cito, citissimo, celerime* (我儘、大急ぎ) と認め、た後、彼はリギウスの年代記を開いて、自分の好きな數年來の仕事に没頭し始めた。それは年

代記に對する説明註釋の編纂であつた。

「ユニウス・ブルトウスは愚者を粧ひつつ」と彼は書いた。「最も賢なる人々に勝れる光榮を贏ち得たり。彼の生涯を仔細に點檢して、余は次の結論に到達せり。即ち彼が斯くの如く振舞ひたるは、嫌疑を避けて暴君の制裁を容易にせんが爲めにして、すべての暗殺者の取つて範とすべき態度と謂つべし。勿論公然叛を起すは潔白の行爲なりと雖も、若し公明の戦ひに力足りざれば、密かに事を行ふに如かず。即ち漸次皇帝の傍に接近してその寵を得、且信用を博せんが爲めには何事をも厭はず、皇帝のあらゆる悪行を身に傾ち、その淫蕩の幫助者たるを要す。何となれば此の種の近接は第一に叛逆者の生命を救ひ、第二に機を見て皇帝弑逆の可能を與ふるが爲めなり。故に暴君を滅亡に陥れ、祖國に自由を返還せんが爲めには、ユニウス・ブルトウスの如く愚者を粧ひ、己れの感ずる所と全然相反する物を賞讃し否定するを可とす。」

消えなるとする蠟燭の光りに、白い壁の上で奇怪な黒い影が踊り狂つて、無恥な醜い形を映し出すのを、レオナルドはちつと見詰めてゐた。併しフロレンス共和國の祕書官の顔は、さながら古代羅馬の偉大さを反射したやうな、物々しい静けさを保つてゐた。只目の深い奥底と、しなやかな、唇の兩隅に時々苦い冷笑を含んだ、狡猾な、曖昧な表情がちら／＼と現れては消えた。それは手引女と娘つ子の話をしてゐた時のやうな、皮肉な表情であつた。

翌朝雪あらしは止んだ。日光は宿屋の小窓の色の薄い緑寶石のやうな、濁つた緑色の硝子の霜にきら／＼と閃いてゐた。雪に蔽はれた野や丘は柔毛のやうにふうはりと、碧瑠璃の空の下で目映しい程白々と輝いてゐる。

レオナルドが目を醒した時、同室の人はもう其處に居なかつた。畫家は下の臺所へ下りて行つた。此處では煖爐の火が盛に燃えて、新しく出來た自働廻轉式の炙串で、焼肉がし／＼と音を立ててゐた。亭主は何時まで飽きもせずレオナルドの器械を眺めてゐるし、邊鄙な山里から來たよぼ／＼の老婆は、丸の儘の羊がまるで生きた物の様に、自分で自分の體を紅く染め乍ら、焦げ付かないやうにくる／＼と廻つてゐるのを、迷信的な恐怖に囚はれ乍ら、目を圓くして眺めて居た。

レオナルドは驛馬に鞍を置く様に案内者に吩咐けて、旅行前に腹を拵へて置く爲めに食卓に向つた。その傍ではニココロ氏が恐しく興奮した様子で、新しく着いた二人の泊り客と話をしてゐた。一人はフロレンスから來た急使で、今一人は社交界の人らしく整然とした服装の青年で、その顔は馬鹿でもなければ利口でもなく、善人らしくもなければ悪人らしくもない、一寸

見た位では容易に記憶に残らない、すべての群集に共通な顔付であつた。これはルチオとか云ふ人で、後でレオナルドの聞いた所に依ると、マキアエリに好感を抱いて居る、有名な勢力家フランチェスコ・エトリの二徒弟で、フロレンス共和国の長官ピエロ・ソデリニの親戚であつた。一家の私用でアンコナへ出掛ける途中、ルチオはローマニヤでニココロを探し出して、フロレンスの知人の手紙を渡さうと思つたので、急使と一緒にやつて來たのである。

「ニココロさん、そんな心配は御無用でございますよ」とルチオは言つた。「叔父さんのフランチェスコが、直ぐ近い中に金を送ると言つて居ました。つい先週の金曜日に元老達が叔父さんに約束したんですから……」

「私はね」マキアエリは毒々しく遮つた。「二人の召使と三頭の馬を連れてゐますよ。かう云ふものは元老達の約束だけでは養へないんですからね！ 私はイモラで六十ドゥカート受取りましたが、それで七十ドゥカートの借金を拂はなければなりません。若し親切な人達が同情して下さらなかつたら、フロレンス共和国の秘書官は餓死して了つたかも知れませんよ。いや全く申分ありません。自分の國の使者を貧の爲めに三ドゥカート、四ドゥカートづゝ合力を乞はせる様な破目に落すなんて、元老達は本當によく町の名譽を心配して下さいますよ……」

彼はかうした壁訴訟の無駄な事を知つて居たが、しかしそんな事は何うでもよいので、只煮

えくり返る様な癩癩を吐き出し度かつたのである。厨には殆ど誰一人居なかつたので、彼等は自由に話をする事が出来た。

「此の方は我々と同郷の方で、レオナルド・ダギンチさんです。長官も多分御承知の筈です」マキアエリは畫家を指さし乍ら語を次いだ。ルチオは慇懃に會釋した。「レオナルドさんはつい昨日も、私の受けた侮辱を目撃された様な始末ですよ……」

「私は免官を要求します。いゝですか、請願するのぢやなくて要求するのです！」まるで此のフロレンス人が元老全體を代表してでも居る様に、段々熱くなつて行き乍ら彼は語を結んだ。

「私は元來貧乏人で、家政は紊亂を極めて居ます。加之に私は病身ですから、若しこんな工合で續けて行つたら、私は棺に入れられて家へ歸る様になるでせう！ それに私に與へられた権限内で爲し得る事は、此處でもうすべてし盡しました。併し交渉を延引して同じ所を堂々廻りし乍ら、一步進んだと思ふと又一步退き、あゝもし度いがかうもし度いと云つた様な駈引は眞平御免蒙ります。私の考へでは、ボルジャ公はそんな子供らしい外交を弄ぶには餘り利口過ぎます。尤も私はあなたの叔父さんにも手紙を出して置きました……」

「叔父さんは」とルチオは言葉を返した。「あなたの爲めに出来る丈けの事を盡すでせうけれど、一つ困つた事には、十人會議があなたの報告を共和國の幸福の爲めに、必要缺くべからざるも

のと見做して、此の地方の問題に對して非常に有利な説明を與へるものと信じて居ますから、あなたを免官するなど云ふ事には、誰一人耳を假さうとしないのです。私達は喜んでお望みを叶へ度いのですが、肝腎の後任者が無いのです。皆あなたの事を唯一人の大切な人、フロレンス共和國の目だ、耳だと言つてゐます。私は誓つてあなたに申し上げますが、あなたの手紙はフロレンスで非常な人氣を呼起して、あなた御自身でさへあれ以上望まれる必要が無い位です。みんなあなたの文章の有してゐる、模倣を許さない優美さ輕快さに感心し切つてゐるので、此の間も叔父さんが私に話して聞かせましたが、あなたの諧謔に充ちた手紙を議場で朗讀した所、元老達はもう其の場に笑ひころげて了つたさうですよ……」

「あゝさう云ふ譯だつたのか！」とマキアエリは叫んだ。彼の顔は急にびくりと痙攣つた。「いや今こそすつかり分りました。私の手紙が先生達の趣味に適つたのですね。ニコロ氏も何かのお役に立つた譯で、まあ仕合せでしたよ！ あの人達が國で私の文章の優美なのに感心し乍ら笑ひころげて居る間に、私は今此處で犬の様な生活をし乍ら、餓ゑて凍えて、熱病に慄へて屈辱を忍んで、まるで氷の上に置かれた魚の様に腕いてゐる——それもこれも皆共和國の幸福の爲めなんださうだ！ そんなものなんかあの愚痴つばい婆さんの様な長官と一緒に、惡魔にでも掠はれて了へばいゝのだ！ みんな揃つて野たれ死でもしてよへー！」

彼は車夫馬丁の様な言葉を以て罵り始めた。自分の輕蔑してゐる「國民の指揮者達」に、走り使ひの役目を勤めてゐる事を考へると、例の力無い忿懣の念が彼の心を充すのであつた。

ルチオは話題を變へようと思つて、若い妻のマリエッタから來た手紙を、ニコロ氏に差し出した。

マキアエリは鼠色の紙の上に、子供らしい大きな字で撲り書きした、數行の手紙に目を走らせた。

「噂に聞きますと」その中にかう云ふ文句があつた。「あなたの被居る地方では、熱病やその他色々の病氣が流行してゐますとの事、私の胸の中が何の様なかお察し下さいまし。あなたの事を思ふと、夜も晝もぢつとして居られません。子供はお蔭で丈夫でございます。それは／＼驚く程あなたに似て参ります。顔は雪の様に白くて、黒い／＼濃い毛の被さつた頭は、そつくりあなた其の儘でございます。此の子が美しいと思はれるのもあなたに似て居るからでございます。それに活潑で浮き／＼としてゐる事と言つたら、まるで誕生越した子の様でございます。あなたは本當になさらないかも知れませんが、生れるや否や「可愛い目を睜いて、家中響き渡る様な聲で喚き立ててでございます。あなた何うか私達の事を忘れないで、少しも早くお歸り下さい。本當にお願ひでございます。もう私は此の上待つ事は出来ませんし、又待たうとも思ひません。

後生ですから歸つて下さい——さらば主なる神様聖母マリヤ様、それから又萬能の聖者アントニオ様のお恵みで、お怪我のありませんように、私は絶えずあなたのお達者なようにと祈つて居ます」

レオナルドはマキアエリの顔が此の手紙を読んでゐる間に、鋭い角々した輪郭に不似合な、思ひ掛けない程善良な微笑に照らし出されたのに氣が付いた。それはまるで他の人の顔がちらと覗いた様な感じであつた。けれどもそれは直ぐに隠れて了つた。彼は輕蔑したやうに肩を竦めて、手紙をくしや／＼に丸めると、その儘衣囊の中へ突つ込んで、腹立たしげに呟いた。

「一體誰が何の必要があつて、私の病氣の事なぞ觸れ廻したんだらう？」

「隠す譯に行かなかつたのです」とルチオは言葉を返した。「マリエッタ様が毎日の様にあなたのお友達の所だの、十人會議の議員の所などへお出でになつて、あなたが何處にいらつしやるか、又何うしていらつしやるかと云ふことを、根掘り葉掘り訊ねて、探り出しなされるんですからね……」

「いやもう分つてゐます、分つてゐます、言はないで下さい——彼女には全く困つて了ひますよ——」彼はじれつたさうに手を振つて言ひ足した。「國務は獨身の人間に任命しなくちや駄目ですよ、妻か政治か二つに一つです——」

それから稍少し顔を外向け乍ら、きい／＼と甲高い聲で語り續けた。

「君は結婚しようと言ふ意志はありませんか？」

「今の所別にありません、ニコロさん」とルチオは答へた。

「よくお聞きなさい、何んな事があつても決してそんな馬鹿な了見を起しちや不可ませんよ。

飛んでもない事だ、結婚はね君、鰻を掴まうと思つて、蛇の一杯入つた袋へ手を突つ込むのも同じですよ。結婚生活は普通の凡人に取つては言ふ迄もなく、巨人アトラスにすら堪へ難い重荷です。レオナルドさん、さうぢやありませんか？」

レオナルドは彼の顔を見て其の心中を察した。マキアエリは深い愛情を以てマリエッタを愛してゐるが、此の愛情を恥ぢる爲めに、無恥厚顔の假面を被つてそれを隠してゐるのであつた。

旅宿はがらんとして來た。早立ちの客が散り／＼になつて了つたのである。レオナルドも旅の支度が出来たので、一緒に出立しようと言ふマキアエリを誘つた。けれど、此方は悄然と首を振つて、自分は主人に拂をして馬を雇ふ爲めに、フローレンスから金が來るのを待つてなければならぬと答へた。昨日の取つて付けた様な磊落さは影さへ無かつた。彼は急に意氣銷沈して情氣こんで了ひ、まるで不仕合せな病人か何ぞの様に思はれた。同じ場所に餘り長い間逗留してゐる爲めに生じた、無爲の倦怠は彼に取つて死ぬるよりも苦しかつた。或る手紙で十人會議の議員

達が理由の無い頻繁な移轉は國務の混亂を惹起すると云つて、彼を責めてゐるのは敢て怪しむに足りない。「乞ふニコロ自省せよ、極度に往所の轉換を欲する汝の放浪癖が、余等を如何なる状態に陥るかを想へ」

レオナルドは彼の手を取つて小傍に導き、金を用立てようと申立た。ニコロは辭退した。

「何うか私を侮辱しないで下さい」と畫家は言つた。「昨日あなたが自身で言はれた事を想ひ出して下さい——私達の様な人間が此處で邂逅したのは、何と云ふ星の廻り合せだらうと被仰つたではありませんか。何故あなたはかうした運命の恩恵を、私からも亦あなた自身からも奪はうとなさるのですか？ 一體あなたには分らないのですか？ 二人の中で精神的に對手を裨益したのは、私ぢやなくてあなたなんです……」

畫家の顔にも聲にも偽りならぬ親切が表はれてゐたので、ニコロは彼を失望させるに忍びなくなつた。で彼は三十ドゥカートドゥカートの金を受取つて、フローレンスから金が着くや否や返済する事に約束した。彼は直ぐ様王侯貴人の様な大度量を示し乍ら、宿屋の拂ひを済したのである。

## 六

一行は其處を出立した。それは繊細な感じのする靜かな朝で、日向は雪解けの滴が垂れて春

めかしく暖かに、陰の方は香ばしく新鮮な感じのする凍に蔽はれて居た。コバルト色の陰影を帯びた深い雪は、馬蹄の下でぱり／＼と音を立てた。白い丘と丘の間に、鈍い緑色をした冬の海が時々さつと姿を現はした。そして金色の蝶々の翅の様な黄色の三角帆が、ところ／＼其上に閃くのであつた。

ニココロは喋つたり、冗談を言つたり、笑つたりした。

海とアルチラの溪流の岸に建てられた貧しい漁村に來掛つた時、小さな教會の前の廣場で、脂肥りのした陽氣さうな坊さん達が、若い村の女の群に取巻かれゐるのが、一行の目に入つた。女達は十字架や、珠數や、聖者の遺骸の小片や、ロレタの聖母の家から取つて來た小石や、大天使ミカエルの翼の羽毛などを買ひ求めてゐるのであつた。

「お前等は何をぼんやりしてゐるのだ？」其處の廣場に立つてゐる女達の良人や兄に向つて、ニココロはかう叫んだ、「坊主達を女の傍へ寄せては不可ないよ！一體お前等は知らないのか！脂は造作なく火に燃えるものだ。有難い教父達は、別嬪さんから教父様と呼ばれる丈けで足りないので、本當のお父さんにして貰ひ度がつてゐるのだ！」

又レオナルドと羅馬教會の話を始め時、彼は伊太利が亡びたのは此の羅馬教會のお蔭だ、と云ふ事を證明し始めた。

「酒神に懸けて誓ひますが」と叫んだ。其の目は憤懣の火に輝くのであつた、「若し誰かあの長老だの坊主だのと云ふやくざ連中に、横暴か亂淫か何方かを放棄させる者があつたら、私は其の人を自分と同じ様に愛して遣りますがねえ！」

レオナルドは彼に向つて、あのサプナローラの事を何と思つてゐるのか訊いた、ニココロはそれに答へて、一時自分も熱烈なサプナローラ信徒であつたが、間もなくあの豫言者の無力を悟つたと自白した。

「あゝした偽善者の一派が胸のむかつく程嫌になりました。想ひ出すのさへ厭な位です。あんな連中なんか何うだつていゝさ！」と彼は氣難かしげな聲で語を結んだ。

## 七

午頃一行はフノ町の城門へ乗り入つた。何の家も何の家も兵士や將校や、ツューザルの供奉の人々で一杯になつて居た。レオナルドは宮廷附の建築技師として宮殿に近い廣場の家に二室だけ用意して貰つた。その中の一室を彼はニココロに提供した、他の部屋を手に入れる事は到底不可能だつたからである。

マキアゾリは宮中へ参内したが、やがて重大な情報を持つて歸つて來た。外でもないツューザ

ルの股肱の臣たるドン・ラミロ・チロルクヅ太守が死刑に處せられたのである、十二月二十五日基督降誕祭の朝、人々は城塞とロッカ・チゼナの間で、首の無い死體と一挺の斧が、血の池の中に轉がつてゐるのを發見したのである。その傍には槍が土の中に突立ててあつて、その先にラミロの首級が刺してあつた。

「此の慘刑の原因は誰にも分らないのです」とニコロは語を結んだ。「併し今町ちうが、此の時で持ち切つてゐます。而も輿論が中々面白いのです。私はわざ／＼あなたを誘ひに寄つたんですよ。一つ廣場へ出て立聽きして見ようぢやありませんか。全く政治の自然律を研究實驗する爲めには、かう云ふ機会を等閑にするのは寧ろ罪惡です」

古いサント・フォルト・ナト寺院の前で、群集は王の出御を待設けてゐた。彼は軍隊檢閲の爲めに、陣營の方へ赴く豫定になつてゐたのである。人々は太守死刑の噂をしてゐた。レオナルドとマキアエリとは群集の中へ紛れ込んだ。

「皆の衆、一體どういふ譯だらう？ 俺はとんと合點が行かない」人の好い愚直らしい顔をした一人の若い職人が、何處までも追窮するものであつた。「何でも人の噂に依ると、王様は大臣方の中でもあの太守を、一番寵愛していらつしやつたとか云ふ事だがなあ」

「つまり寵愛してゐらしたからこそ、それで御成敗なすつたのだ」栗鼠の毛皮外套を着た人

品卑しからぬ鍛冶屋がかう口を切つた。「ドン・ラミロは王様をお騙し申したのだ。王様の威光を笠に被て人民を窘しめ、牢屋へ打ち込んだり、拷問にかけたり、非道な年貢を取り立てたりしながら、王様の前へ出ると小羊の様な假面を被つたものだ。それでまふまふと巧く騙し了せた様に思つてゐたが、中々さうは行かない。愈々時が來て、王様の勘忍袋の緒が切れたのだ。王様は人民の幸福の爲めには、自分の一番大切な臣下でさへ容赦なく、極惡非道の罪人として裁判の宣告も待たないで、首斬臺の上へ上げてお了ひになつたのだ。外の者の見せしめにならないからな。今脛に傷持つ奴等みんな尻尾を巻いて、王様のお腹立が何んなに恐しいか、王様のお裁きが何んなに正しいか、と云ふことをよく合點した事だらう。王様は選つた者を憐れんで、敬れる者を成敗なさるのだ」

「汝鐵の笏を以て民を治むべし」と一人の僧が默示録の言葉を引いた。

「さうだ、さうだ、鐵の笏を以てあいつ等をみんなやつ付けて了へ！ 人民を窘める犬の子等をやつ付けて了へ！」

「王様は罰する事も懲れむ事もよく知つておいでになる」

「もうあれ以上の王様は要らない位だ！」

「全くさうだ！」と田舎者らしい男が言つた。「これは大方神様がローマニヤの土地を懲れんで



下すつたのだらう。以前は生きて者死んだ者の區別なしに身の皮を剥ぐ様にして、色んな納め物で此方等の身上を荒らしてゐたものだ。此方等は食ふ物も無くて困つてゐるのに、年貢が滞つたと言つて、一匹しか残つてない牛を引つ張つて行つたりして、ブレンチノ公の時には只もう野たれ死にする許りの有様だつたが、今度のツェーザル様はどうか神様のお恵みで長命なさいますように！」

「それに裁判だつてさうだ」と商人が後を次いだ。「以前は何時までも引つ張り付けて、ほと／＼精も根も盡き果てる様であつたが、此の頃は立ち所に裁きが付いて、もうあれ以上早くして貰ふ事は要らない位だ！」

「つまり孤兒を守つて、寡婦を慰めて下すつたのだ」と僧は言ひ足した。

「何もくどく／＼言ふ事はない。憐れんで下さるのだ、人民を憐れんで下さるのだ！」

「他所の國に指一本ささせはなさらぬよ！」

「お、神様、神様」よぼ／＼した乞食婆さんが、感激の餘り吸り上げて泣き乍らかう呟いた。

ツェーザル様は私共の父親でございます、恩人でございます、養ひ親でございます。どうか天國なる聖母マリヤ様の御加護を受けられますように、美しいお太陽さま……」

「聞きましたか、聞きましたか？」とマキアエリは伴のレオナルドに耳打した。「民の聲は神の

聲なりです！ 私は何時もさう言つてゐるのです、山を見んと欲する者は溪に下らざるべからず、皇帝を知らんと欲する者は民と共に居らざるべからずつてね。ツェーザルを悪黨だなどと言ふ連中を、此處へ連れて来て見せてやり度いですよ！ 神をこれを賢き者に祕して、心貧しき者に示し給ふです」

此の時軍樂の聲が響いて、群集は動搖し始めた。

「王様だ……王様だ……お見えになつた……そら見ろ……」

人々は爪先立ちをして首を差し伸べた。家々の窓からは好奇心に充ちた人達の首が覗いた。若い娘や女達は、戀する人のやうな目付で、「亞麻色の毛をした美丈夫のツェーザル様」を見ようと、露臺や涼廊へ駆け出すのであつた。王は殆ど少しも人民の前に姿を現す事が無いので、彼を拜すると云ふ事は極く稀にしか得られない幸福なのであつた。

先頭には樂隊が立つて、耳を聳する様な太鼓の音が、兵士等の重々しい足取りに調子を合して居た。その後には續くのはローマニヤ王の近衛軍であつた。これは皆一粒選りの勇敢な美丈夫で、三エルもある様な戟を携へ、鐵の甲冑に身を固め、右半身は黄左半身は赤と、二色に染め分けられた服を纏つてゐた。ニココロはツェーザルの創り上げた此の軍隊が、眞に古羅馬軍の様に美しく整頓してゐるのを、何時までも飽かず見惚れて居た。近衛軍の後からは、前代未聞の

奢りを極めた服装をした、小姓や馬丁が練つて来た。彼等は金襴の短衣に、眞紅の天鷲絨へ金糸で羊齒の葉を刺繡つたマントを身に纏ひ、劍の鞘や帯には蛇の鱗を貼り付けて、天に向つて毒を吹き付けてゐる、七頭の大蛇を現した尾錠が附けてあつた——これはボルジャの紋章なのである。胸の所には、黒い絹の上に銀を以て「Crest」と云ふ文字が織り出してあつた。これに續いて、ツニーザルの護身兵たるアルバニヤの備騎兵が、緑色の土耳其頭巾を戴き、長い半月刀を帯び乍ら進んで来た。陣營長官たるバルトロメオ・カブラニカは、羅馬教會旗手の印たる劍を抜き放して、眞直に立てながら捧げてゐた。其の後ろから額に太陽の様な夜光石を附けた黒馬に跨つて、ローマニヤの君主にしてヴレンチノ公たる、ツニーザル・ボルジャがしづ／＼と進んで来た。彼は佛蘭西の百合を白い眞珠で刺繡つた、水色の絹のマントを纏ひ、鏡のやうに光る青銅の鎧に身を固め、大きな口を開けた獅子の首を飾りとした胸當てを着け、龍のやうな海の怪物を現した兜を頂いてゐた。怪物の刺々した羽や翼は、薄い銅で造つてあつて、身を動かす度にさや／＼と慄へて鳴るのであつた。

ヴレンチノの顔は(彼は今年二十六歳であつた)始めてレオナルドがミランなるルイ十二世の宮廷で見て以來、大分瘠せて頬がこけて来た。それに全體の輪郭が險しくなつてゐる。鋼鐵の様に青みが、つた黒色をした目の光は、尙一層他人の窺知を許さない様な堅固さを帯びて来た。たし、亞麻色の髪は益々深くなつて、左右に分れた鬚は大分濃くなつて来た。長めになつた鼻は猛禽の嘴を想はした。けれど以前と同じ様に澄み渡つた晴れやかさが、此の冷靜な顔の中に感じられるのであつた。たゞ今は以前にも増して無鐵砲な大膽さと、磨ぎ澄した拔身の刀に似た、慄然として人を戦かせる様な鋭さが、此の顔の上に表はれて居た。

王の後には砲兵隊が続いた。これは伊太利全體で最も優れたもので、銅製の細いクレヴリンや、小砲や、チエルポタンや、石弾を飛ばす太い鑄鐵の臼砲などから成立つて居た。是等の臼砲はみな牡牛に曳かれて、大地を轟かす様な鈍い響を立て、動いて行つた。喇叭の響きや太鼓の音がその轟音に交つた。血の様な落日の光りを受けて、大砲や、鎧や、兜や、槍などは宛然たる稲妻の様に閃くのであつた。そしてツニーザルは凱旋將軍の如く莊嚴な冬の夕の紫袍に包まれ乍ら、此の血の様に赤い、巨大な、低い太陽を目蒐けて、眞直に進んで居る様に思はれた。

群集は息を凝らし乍ら、無言の儘此の英雄を眺めて居た。叫喚を以て歓迎の意を表はし度いと思ひ乍ら、殆ど恐怖に似たる敬虔の念に打たれて、聲を立てる氣力が無かつたのである。涙が乞食婆の頬を傳つて流れた。

「有難い聖者様……聖母マリヤ様——」と彼女は十字を切り乍ら囁いた。「神様のお蔭をもちまして、美しいお太陽様のお顔を拜む事が出来ました——」

羅馬教會保護の爲め法王がツューザルに授けた利劍は、彼女の目に大天使ミカエルの焰の劍の様  
様に映じたのである。

レオナルドはニコロの顔にも、老いぼれた乞食婆の顔にも、同じ單純な歡喜の表情が浮んで  
ゐるのを見て、思はず薄笑ひを洩したのである。

## 八

レオナルドが家へ歸つて見ると、明日殿下の御前へ伺候するようにと云ふ、祕書官長アガビ  
トの署名した命令が届いて居た。

ルチオはアンコナへ赴く途中、休息の爲めにフアノの町へ足を停めたが、翌朝出發しなければ  
ならないと云ふので、二人の宿へ暇乞ひにやつて來た。ニコロがラミロ・ヂロルクヴの死刑の  
事を言ひ出したので、ルチオは彼に向つて、此の死刑の眞因を何と思ふかと思ふかと訊ねた。

「ツューザルの様な君主の行動に就いて、その原因を察するのは困難です、いや寧ろ不可能です」  
とマキアゾリは抗辯した。「併し私が何と考へてゐるか、それが知り度いと言はれるなら、喜んで  
申しませう。ツューザルが征服統一する迄のローマニヤは、御承知の通り多數の詰らない暴君  
の軛の下に在つて、暴行掠奪惡逆に充ちて居たものです。ツューザルは是等一切の物を直ちに鎮

定しようと思つて、賢明で忠實な近臣ドン・ラミロ・ヂロルクヴを太守に任命しました。それから  
殘忍な刑罰を以て人民の間に、都合よく法律に對する恐怖心を呼醒しながら、短日月の間に彼  
は混亂状態を絶滅して、國內に絶對の平靜を樹立したのです。王は目的が達せられたと見て取  
ると、自分の殘虐の武器を亡さうと決心して、苛斂誅求の名の下に太守を捕縛して死刑に處し  
た上、其の死骸を廣場へ晒し物にするように命令しました、此の恐しい光景は人民を満足さすと  
同時に、その膽を冷したのであります。他の帝王が取つて以て範とすべき、深遠な教訓に充ち  
た此の行爲に依つて、王は三つの利益を得た譯です。第一に以前の無力な暴君に依つてローマ  
ニヤの地に播かれた、不和葛藤の雜草を根こぎにしましたし、第二にすべての殘忍暴虐は王に  
無斷で行はれた、と云ふ事を人民に確信させ、一切の責任を太守一人に押し付けて、自分は綺  
麗に口を拭つて済し込み乍ら、太守の慘忍が齎した良き結果のみ利用して居るのです。第三に  
自分の寵臣を人民の犠牲に供すると云ふ事に依つて、高潔な絶對公平の模範を示した譯なので  
す」

彼はまるで抽象的な數學の結論でも述べる様に、顔の筋肉一つ動かさないうで冷靜な態度を保  
ち乍ら、落着いた靜かな聲でかう言つた。只目の奥の方に惡戯らしい、大膽な、まるで小學生  
の様に喧嘩好きらしい、愉快げな表情が火花の様に、閃いたり消えたりし乍ら慄へてゐた。

「實に結構な公平振りですね、何も云ふがものではありません！」とルチオは叫んだ。「ねえニコロさん、あなたのお言葉に依りますと、此の如何はしい公正な裁きは、つまり卑劣の頂上だと云ふ事になりますね！」

フロレンスの秘書官は悪戯つ子らしい光を消す爲めに、兩眼を伏せたのである。

「さうかも知れませんが」と彼は冷かに附け足した。「大きにさうかも知れませんが。併しそれが何うだと云ふのですか？」

「え、それが何うしたかつて？ 一體あなたはかうした卑劣な行爲を、帝王の取つて範とすべき教訓だと仰有るんですか？」

マキアエリは肩を竦めた。

「ルチオ君、君が政治の方で少し經驗を得て來たら、自然に分つて來るでせうが、人間の現在行つてゐる事と、又行はなければならぬ事との間には非常な相違があつて、これを忘れるのはつまり自分で自分を滅ぼす事なのです。何故と言つて人間は邪惡で不徳義なもので、利益か恐怖かに依つて強制せられない限り、善行をすることは出來ないからです。それだから私はかう言ふのです——自滅を避ける爲めには、善行家と見せ掛ける術を學ばなければなりません。併し實際善行家になるならないは、その時／＼の必要に準じるべきで、祕密の悪行に對する良心

の苛責を恐れては不可ません。何故と言つて此の悪行なしには權力を維持する事が不可能だからです。善惡の本性を正確に研究して見ると、善行と思はれるものが帝王の主權を亡ぼし、悪行と思はれるものが却つてその威を輝かす、と云ふ結論に到着せざるを得ないです」

「飛んでもない事を、ニコロさん！」ルチオは到頭憤慨して了つた。「若しさう云ふ風に考へたら、何んな事をして構はないと云ふ事になります。何んなに兇惡な卑劣な行爲でも、すべて辯護出來ないと云ふ事はなくなつて了ひます……」

「さうです、何んな事をして構はないのです」尙一層冷やかな落着いた調子でニコロはかう言つた。そして此の言葉の意味を一層強めようとする様に、手を舉げてもう一度繰返した。「天下を支配しようとする者は、又さうする能力の有る者は、何をしても構はないのです——」

「で」と彼は言葉を續けた。「最初の本論に返ると、結論は次の様になります。ラミロの助を借りてローマニヤを統一し、掠奪暴虐を鎮定したヴレンチノ公は、自己の領地内で絶えず暴動反亂を許してゐるフロレンス人などよりも、單に賢明であるばかりでなく、寧ろ慘酷は慘酷なりに慈悲深い位なのです。何故と云つて少數者を懲す惨忍は、動亂の中に人民を自滅せしめる仁惠よりも、寧ろ優つてゐるからです」

「併し一寸待つて下さい」大分脅し付けられて度胸を抜かれたらしいルチオは、漸く氣を取り